

Résonances

レゾナンス
REVUE EN LIGNE

東京大学大学院総合文化研究科フランス語系論文集



古城一樹／高井実奈／中田峻太郎／谷虹陽／浅野千咲

ISSN 2435-8371

<https://resonances.jp/revues/16/>

n° **16**
novembre 2025

フランスの「ユダヤ人生存者」をめぐる 歴史論争

なぜ、約 24 万人のユダヤ人がナチ占領下のフランスを
生き延びたのか？

古城一樹

『Résonances』第 16 号

2025 年 11 月発行

1-18 ページ

ISSN 2435-8371

フランスの「ユダヤ人生存者」をめぐる歴史論争

——なぜ、約 24 万人のユダヤ人がナチ占領下のフランスを生き延びたのか？

古城一樹

はじめに

1940 年、ナチス・ドイツ占領下のフランスには、約 32 万人のユダヤ人が住んでいた。弁護士、そして歴史家としても著名なセルジュ・クラルスフェルトの調査によると、その約 32 万人のユダヤ人のうち、約 7 万 4150 人がナチ占領下のフランスで逮捕され、強制収容所で死亡したという¹⁾。この調査は、フランスのユダヤ人の約 4 人に 1 人が死亡したという悲惨な実態を明らかにした一方で、1940 年時点でフランスに居住していたが、収容所に連行されることのなかった約 24 万人のユダヤ人の存在を同様に浮かび上がらせた。近年、強制収容を免れ、ナチス・ドイツ占領下のフランスを生き延びた約 24 万人のユダヤ人——「ユダヤ人生存者 (survivants juifs)」に焦点を当てた研究が増えている。というのもフランスはユダヤ人生存者の数が極めて多く、またフランスに住んでいたユダヤ人に占める彼らの割合が約 4 分の 3 にあたり、ナチ占領下の他国にくらべて高かったことから、何らかの「フランスの特殊性」があるのではないかと考えられたためである²⁾。ホロコーストに関する歴史研究では、論争や記憶の整理を目的とした史学史研究が多くあるが、本稿ではこうした研究で未だ取り扱われていない「ユダヤ人の生存」に視座を置いた研究の論点を整理する³⁾。本稿の目的はかかる論争を整理し、ホロコースト史家がユダヤ人生存者の生存要因をどのように考えているかを明らかにするとともに、彼らに関する分析がホロコースト研究にどのような意義をもたらすのかを明らかにすることである。

なおユダヤ人生存者に類似する用語に、「ホロコースト・サバイバー」や「ホロコースト生還者」がある。ただ、これらは「収容所を生き延びたユダヤ人」としても用いられることがあるため、本稿では使用しない⁴⁾。フランス史家のなかで議論されているのは、強制収容所を生き延びたユダヤ人ではなく、強制収容所への連行を免れ、ナチ占領下のフランスで生き延びた約 24 万人のユダヤ人をめぐる境遇である。なお、本稿では後者のユダヤ人たちを先行研究に則り「ユダヤ人生存者」と定義づける⁵⁾。以下、第 1 章ではホロコースト研究の潮流を簡単に整理する。同章では歴史研究の動向および記憶に関する政策が変化するなかで、ホロコーストに対する関心が、死亡したユダヤ人からユダヤ人生存者に移行していく過程を描く。第 2 章ではこのような動向のなかで、約 24 万人のユダヤ人がフランスで生き延びたのはヴィシー政府の統治のおかげだと解釈する「ヴィシー擁護論」が復活したことを示す。同章ではこの代表的論者である歴史家アラン・ミシェルと政治家エリック・ゼムールの主張を分析し、ヴィシー擁護論が支持され、拡散されるにいたった政治的背景と史学史上の要因を明らかにする。第 3 章

では、歴史家たちがこうした「歴史の歪曲」にどのように応答したかを明らかにする。そして「なぜ約 24 万人のユダヤ人がナチ占領下のフランスを生き延びたのか」という問いに対する歴史家たちの見解を整理し、それを踏まえ、ユダヤ人の「生存」という事象に歴史研究として取り組むことがホロコースト研究にどのような意義をもたらすのかを明らかにしたい。

第 1 章 フランスのホロコースト研究の潮流

フランスのホロコースト研究は戦後まもなくの 1950 年頃から行われ始め、現在までに膨大な量の研究があるが、この研究動向については大きく 3 つに分けることができる。第一は「ヴィシーの神話」が色濃く残る 1950 年代から 1960 年代にかけての研究で、第二は 1970 年代から現在まで続く「パクストン革命」以後のホロコースト研究である。そして第三は、2000 年代以降に第二の動向と並存するかたちで現れる「レジスタンス主義」に即した研究である。以下、時系列順にこの 3 つの動向を整理しよう。

1-1. 「ヴィシーの神話」に基づくホロコースト研究

第二次世界大戦後、フランスのユダヤ人は元どおりの生活を送ることが優先事項であった。というのも、悲惨な経験をした多くのユダヤ人が殺されたことに加え、生き残ったとしても、彼らの仕事や財産がすでに収奪されており、その財産の回収や仕事への復帰、そして病気や怪我などの治療が当時のユダヤ人にとって最優先であったためである。このようにユダヤ人迫害を経験しても自らの生活を取り戻すために、またつらい記憶を忘れるために、ホロコーストの経験に口を閉ざす人々が大半であった⁹⁾。歴史家アンリ・ルソーが終戦から 10 年後までを「服喪の時代」、1950 年代半ばから 1960 年代末の時代を「忘却、公的な沈黙、抑圧の時代」と表現したのはこのためである⁷⁾。

こうした状況下では、被害者であるユダヤ人たちの語りというよりも粛清裁判の記録からホロコーストを考える評論が多数であった。当時、粛清裁判にかけられたヴィシー政権期の副首相ピエール・ラヴァルは同政府の下でユダヤ人を迫害する政策を行ったことについて次のように釈明した。

フランスのユダヤ人たちによって判決を下されることを私は強く願います。というのも、現在、この「ホロコーストの」事実を知っている彼らは、私が権力の座についていたことを歓迎し、私が彼らに施した保護に感謝しているためであります⁸⁾。

このような考えはレイモン・アロンにも共有されていた。彼は、「ピエール・ラヴァルが自らの国「フランス」のためになしたことは、とても素晴らしいと考える」と称賛し、ラヴァルが裁かれることを嘆いた⁹⁾。そして同様の主張は歴史学者ロベール・アロンの『ヴィシー体制』

においてもみられる。同書は 1960 年代までのヴィシー政府理解を支える歴史研究である。彼は、多数の外国籍のユダヤ人がナチに引き渡されたことは「恥辱である」と指摘しつつも、他方でフランス系ユダヤ人の「多くの命を救った」人物としてピエール・ラヴァルを捉えた¹⁰⁾。

こうしたユダヤ人迫害に関する理解は、戦後のフランス国内政治によって支えられていた¹¹⁾。ド・ゴール派はヴィシー政府の存在を否定しつつも旧ペタン派を取り込むために、ド・ゴールという「剣」とペタンという「盾」の二つが当時のフランスにあったという解釈を生み出した。この解釈はロベール・アロンによるヴィシー政府理解と適合し、外国籍のユダヤ人を犠牲にしつつも、大多数のフランス国籍のユダヤ人をヴィシー政府が救ったとする「ヴィシーの神話」を醸成したのである。またこの時期には「レジスタンス神話」というもう一つの神話が流布されていた¹²⁾。ド・ゴール派は自らが創設したレジスタンス組織「自由フランス」をフランスと同一化するイメージをひろめ、ヴィシー政権崩壊後のフランスの統一に自由フランスとド・ゴールが重要な役割を果たしたと主張していく。他方で、フランス共産党はフランス国内で一貫して抵抗運動を組織した唯一の政党として自らを描き、正統なレジスタンス組織としてのシンボルを占有しようとした。このように 1960 年代まで、ヴィシー政府とレジスタンスの実態は二つの神話によってそれぞれがヴェールで覆われていた。とはいえ戦後、レジスタンスはユダヤ人迫害と結びつけて語られることはなかった。実際、占領下のフランスでは一部の民間人あるいはレジスタンス組織がユダヤ人を迫害から逃そうと尽力したが、戦後から 1960 年代にかけて、こうした救援行為はレジスタンスとみなされなかった。例えば、1951 年に設立された「第二次世界大戦史委員会」はレジスタンス運動を祖国の解放のための愛国主義的運動として位置づけたため、同会が編纂した刊行史料ではユダヤ人迫害やユダヤ人の救援に言及することはなかった¹³⁾。したがって 1960 年代までのユダヤ人迫害に関する語りは、多くのユダヤ人を救ったフランス政府というイメージをうえつけたヴィシーの神話に大きな影響を受けていたといえる。

1-2. 「パクストン革命」以後のホロコースト研究

このように 1960 年代末ごろまで支配的であったヴィシーの神話やレジスタンス神話は、1970 年代に入り、打ち崩されることとなる。その契機となったのが、1971 年に出版されたアメリカ人研究者ロバート・O・パクストンの『ヴィシー時代のフランス』である¹⁴⁾。本書は上述の粛清裁判の記録に加え、これまでの研究者が用いてこなかったドイツ側の史料を利用している。具体的には、終戦後に連合軍が持ち帰ったドイツ政府やドイツ軍関係の資料であり、ワシントンの「合衆国国立博物館」やロンドンの「公的記録オフィス」に収められていたものである¹⁵⁾。本書の特徴はこうした史料をもとに、ロベール・アロンのヴィシー政府理解を批判することで、「ヴィシーの神話」を暴いた点、またユダヤ人迫害に関与したフランス政府の動きを追うことで、フランス政府のコラボラシオン（対独協力）の実態を明らかにした点にある。そして、マイケル・マラスとの共著である『ヴィシーとユダヤ人』では、ユダヤ人迫害に対す

るヴィシー政府の加担の実態がより詳細に明らかにされる。例えば、1940 年に出されたユダヤ人身分に関する法律がナチス・ドイツではなく、ヴィシー政府に由来すること、また 1942 年にフランス全土で行われたユダヤ人検挙にフランス警察が積極的に関与し、その結果、被害者数が増大したことを本書は明らかにした¹⁶⁾。1970 年代当初、彼らの著作を否定的に捉える研究者は少なくなかったが、多くの歴史家たちにヴィシー政府の実態を再考する契機を促した。1979 年 1 月 3 日に制定された「文書保存法」では公文書の公開が 30 年後に制定され、占領期のフランスに係る行政文書が閲覧できるようになり、フランスの公文書を用いてヴィシー政府のユダヤ人迫害に関する政策を研究することが可能になった¹⁷⁾。このように「ヴィシーの神話」を打ち崩し、同政府の再考を促し、そして当時の法制度までも改正させた点で、この研究成果は彼の名をとって「パクストン革命」と呼ばれている¹⁸⁾。

また 1970 年代には、本論文の冒頭で紹介したセルジュ・クラルスフェルトによるユダヤ人被害者数に関する緻密な調査が開始していた。この調査はユダヤ人迫害に加担したフランス人やナチの官僚を裁くケルン裁判の証拠収集を目的として実施され、1978 年に『フランスのユダヤ人迫害に関する記録名簿』として出版された¹⁹⁾。さらに、彼は 1980 年代後半から 2000 年代にかけて、『フランスのショアー』と題した全四巻の著作を出版する²⁰⁾。第一巻はフランスのユダヤ人迫害を時系列順に整理したクラルスフェルトの論考で、第二巻と第三巻はその根拠となる文書を掲載した史料集である。第四巻は強制収容所で亡くなったすべてのユダヤ人の子供たちの名前を記載した名簿であるが、これはクラルスフェルト自身が第二次世界大戦期当時に 10 代のユダヤ人で、迫害を命からがら生き延びた経験があったためであり、同世代のユダヤ人に対する追悼の意がこめられている。加えて、アメリカで制作されたテレビ・ドラマ『ホロコースト』やクロード・ランズマン監督の映画『ショアー』は研究者のみならず、多くの人々のあいだでホロコーストに対する関心を高めた²¹⁾。

このようにホロコーストの実態が明らかになる一方で、この時期のフランスは修正主義が台頭した時代でもあった。歴史家の武井は当時のフランスを「ホロコースト否定の中心地」と評したが、リヨン大学の歴史学者ロベール・フォーリンソン、政治家では国民戦線のフランソワ・デュブラヤジャン＝マリ・ルペンらが否定論者の代表に挙げられる²²⁾。彼らの否定論の特徴はホロコースト自体の否定ではなく、根拠となるテキストや史料の歪曲によるホロコーストの矮小化にある²³⁾。このような修正主義には次の 2 つの対抗策が講じられた。第一は、ユダヤ人生存者や生還者の証言の聞き取りおよびホロコースト研究の深化による対抗である。パクストンが指摘するように、1970 年代以降、ユダヤ人生存者たちは「語り伝えることがあまりに遅くなって、自分たちの記憶が孫に伝わらなくなることを恐れ、フランスのホロコーストについて急いで語ろうと望むようになった」²⁴⁾。そうした証言は上述のような映画やドラマ、小説だけでなく、インタビュー調査としてショアー記念館やイスラエル・ホロコースト記念館（通称ヤド・ヴァシェム）に保管されている²⁵⁾。またホロコースト研究については、ナチでもヴィシーの官僚でもないフランスの「ふつうの人々」によるホロコースト加担の実態を叙述する「下からの歴史」を重視した研究が増加した²⁶⁾。こうした研究は、迫害の加害者であるフラン

ス警察やヴィシー政府の行政史料に加え、回想録や証言集などの様々なエゴ・ドキュメントを用いて占領下のユダヤ人の境遇を描く「ユダヤ人の社会史」として発展していく²⁷⁾。第二は、法令や「記憶」に関する政策による抵抗である。1990 年、ホロコーストの否定を処罰する法令である「人種差別・反ユダヤ主義・排外主義行為抑止法（通称ゲソ法）」が公布された²⁸⁾。また 1995 年 7 月 16 日、フランス最大規模のユダヤ人検挙であったヴェル・ディヴ事件のコメモラシオン（記念行事）において、ジャック・シラク大統領はヴィシーが主導で実施したユダヤ人迫害を国家犯罪として認め、その責任を負うことを表明した²⁹⁾。

以上みてきたように 1970 年以降、ヴィシー政府に関するそれまでの研究の欠陥が指摘され、フランス政府が主体的にユダヤ人迫害を行ったことが明らかにされた。またそのような研究に呼応するかたちでホロコースト否定論も台頭したが、1990 年代以降、現在まで続く歴史研究や記憶に関する政策によってホロコースト加担の事実は多くのフランス人のあいだで認識されることとなった。他方で 2000 年代以降、フランス社会における戦争やユダヤ人迫害に対する関心や記憶の変化も相まって、ホロコーストに関する歴史研究の動向は変化していく。

1-3. 「レジスタンス主義」に即したホロコースト研究

上述のクラルスフェルトのユダヤ人被害者に関する調査はその後も継続して行われ、2000 年代頃にはナチ占領下のフランスを生き延びたユダヤ人生存者の数は 24 万人であると正確に判定することができるようになった。この頃から、ユダヤ人生存者に関心を抱く人々が増える。自らもユダヤ人生存者であり、また政治家として著名なシモーヌ・ヴェイユは、2008 年にパリ政治学院（シアンスポ）において開催された、とあるシンポジウムの終了後に、ホロコースト研究者に対して次のようなことを尋ねたという。

なぜ、あなたはユダヤ人の救援に関する研究を行わないのですか？ [...] 私はいつも考えることがあります。それは、ヴィシー政府が統治したにもかかわらず、またナチに占領されたにもかかわらず、どうして多くのユダヤ人がフランスで生き残ることができたのかということです。[...] 彼ら [フランスにおいて生き延びることができたユダヤ人] は 75 パーセントにあたると、セルジュ・クラルスフェルトは示しました。[しかし、] 私はこの問題に関する歴史研究を知りません³⁰⁾。

続けて、ヴェイユはユダヤ人生存者の存在を当時の「フランス人の行動」に基づいて説明すべきだといい、彼女はユダヤ人の子供を助けたフランス人やカトリック教徒の話題を挙げたという³¹⁾。このようなヴェイユの問いや関心に付随するかのようになり、2000 年代にはホロコーストに関する記憶政策に変化がみられるようになる。例えば 2007 年、ジャック・シラク大統領はナチス・ドイツ占領下においてユダヤ人を守った人々——いわゆる「正義の人」の存在に目を向けるように、記念行事に関する法律に修正を施した³²⁾。つづく、ニコラ・サルコジ大統領

は、森や山岳地帯を主たる活動拠点としたレジスタンス組織である「マキ」の少年で、占領下に処刑されたギ・モケの遺書を教材として高校で読ませることを義務付ける³³⁾。またフランソワ・オランド大統領の時代には「レジスタンスの国民記念日」を制定する法案が可決されるとともに、ユダヤ人迫害に関するフランス公権力への複数の補償要求が国務院の判決によって退けられた³⁴⁾。これらの動きはユダヤ人迫害に加担した歴史を忘却させる試みでは決してないが、ユダヤ人犠牲者に主として向けられていた占領期フランスの関心や記憶が、2000年代にレジスタンスの英雄的な記憶へシフトチェンジしたと捉えることができる。

こうした状況下で、レジスタンスの視座からのホロコースト研究の見直しが一部の歴史家たちの間でも主張されるようになる。歴史家ピエール・ラボリは『悲しみと憎しみ』にてパクストンの著作をレジスタンスの悪いイメージを広めたとして批判するとともに、レジスタンス神話が醸成されたところに忘れ去られた、民間人やレジスタンス組織によるユダヤ人の救援活動の実態を検証する必要があると主張した³⁵⁾。この点に賛同したのが歴史家ジャック・セメランである。シモヌ・ヴェイユの上述の話にも感化されたセメランは、「ユダヤ人の 75 パーセント」が迫害から逃れることができた要因を分析し、パリ市民のような「ふつうの人々」によるユダヤ人救援活動を挙げている³⁶⁾。また歴史家オリヴィエ・ヴィヴィオルカは、フランス共産党や自由フランスらによってユダヤ人住民をかくまうレジスタンスが行われたと指摘する。そして彼は、このレジスタンスによって「フランス在住ユダヤ人の 75 パーセントが死を免れたのだ」と結論付けた³⁷⁾。しかし歴史家アンリ・ルソーはこのような動きを「レジスタンス主義」と呼び、ヴィヴィオルカの主張について「レジスタンスとは、[ユダヤ人救助のための] システムとしては、大した意味を持たなかった」ため、「全く同意できない」として退けている³⁸⁾。またルソーは、セメランの研究では「占領期フランスのユダヤ人の死亡率の低さの主たる理由として、ユダヤ人抵抗者の存在を過大評価」していると指摘し、それによりセメランは「過ちを犯して信頼を失った」と批判している³⁹⁾。加えてパクストンも、反ユダヤ主義に同調していた当時のフランスの世論を矮小化する恐れがあるとしてセメランの上述の研究を批判した⁴⁰⁾。

以上、ホロコースト研究の動向を整理してきた。「なぜ約 24 万人のユダヤ人が占領下のフランスを生き残ることができたのか」という問いは、ホロコーストに関する記憶のシフトチェンジが行われる 2000 年代頃のフランス社会の中で生まれた。この問いは当時のフランス史学にも影響を与え、一部の歴史家はレジスタンス運動にその答えを見出そうとした。こうした政治における力学や歴史学における研究動向の変化が相まって、迫害によって亡くなった約 7 万 4150 人のユダヤ人から約 24 万人のユダヤ人生存者へ関心が移行し、後者のユダヤ人をヴィシー政府が救ったとする「ヴィシー擁護論」が復活していくこととなる。この点については次章で分析しよう。

第2章 ヴィシー擁護論の復活——「ヴィシーはユダヤ人に良い影響を与えた」

2-1. 「フランスのパラドクス」と「ドクサ」——歴史家アラン・ミシェルと政治家エリック・ゼムール

まず、ヴィシー擁護論復活のきっかけとなった歴史家アラン・ミシェルの主張を検討する。彼はイスラエルに住むラビでありながら、イスラエル・ホロコースト記念館の元研究員であった。彼は2012年に『ヴィシーとショアー フランスのパラドクスに関する調査』を出版したが、本書の主題にもある「フランスのパラドクス」とはミシェル自身が提唱した概念である⁴¹⁾。まず彼は強制収容所で殺害された約7万4150人のユダヤ人たちの国籍を調査し、逮捕された外国籍のユダヤ人は86パーセントにあたることを指摘する⁴²⁾。このことからミシェルは、ユダヤ人迫害にヴィシー政府が加担したのは確かに事実であるが、それはフランス国籍のユダヤ人を助けるためであり、それゆえ約4分の3のユダヤ人が強制収容を逃れることができたと考えた⁴³⁾。そして彼は逮捕されたユダヤ人の人数を年代別に分類した。彼は1943年6月から終戦にかけてユダヤ人逮捕者数が減ったと主張し、その要因にはピエール・ラヴァルがヴィシー政府のトップになったことが関係しており、ラヴァルがユダヤ人を救ったと結論づけた。加えて彼はヴィシーの統治がユダヤ人に良い影響を与えたと証明するために、他国のユダヤ人生存者の数と割合を引き合いに出し、比較している。具体的には、彼は「類似した地域であり、戦前の政治体制や政治文化に多くの共通点があり、かつ迫害が同時並行で進行した」ベルギーやオランダのユダヤ人生存者の数や割合を比較した⁴⁴⁾。彼はベルギーでは40パーセント、オランダでは75パーセントのユダヤ人が殺害された一方で、フランスでは殺害されたユダヤ人の割合は25パーセントのみであると指摘する⁴⁵⁾。そしてミシェルは、「フランスではヴィシー政権の高官のコラボレーションが抑制する効果をもたらした」のに対し、ベルギーやオランダでは「ドイツ当局が自由に行動できたことが、強制収容の侵攻を加速度的に進行させた」と結論付けた⁴⁶⁾。また彼はこれをヴィシー政府の策略として捉え、コラボレーションを積極的に実行し外国籍のユダヤ人の引き渡しに加担したが、その結果多くのユダヤ人が助かったという「フランスのパラドクス」があると主張した⁴⁷⁾。

そして本書では、これまでのホロコースト研究の研究史整理が行われる。この分析のなかで、彼はパクストンとマラスの『ヴィシーとユダヤ人』がヴィシーを悪く描こうとする先入観を作り上げ、こうした善悪の二元論的な「ドクサ (doxa)」がフランスのホロコースト研究を支配していると批判した⁴⁸⁾。他方でクラルスフェルトを「ヴィシー政府の理解あるいは発見に重要な役割を果たした」と部分的に肯定しつつも、その一方で反ユダヤ主義的政策の実施の責任がヴィシー政府にあるとクラルスフェルトも考えていたため、パクストンの「ドクサ」が歴史家たちのあいだで固着化したと非難する⁴⁹⁾。このようにアラン・ミシェルは統計分析によって「ヴィシー政府の統治がフランスのユダヤ人に […] いい影響を与えた」ことを証明しようと

試みた一方で、ヴィシーの「良い面」を考慮しない現代の歴史学には「ドクサ」があると指摘した⁵⁰⁾。

アラン・ミシエルのこの主張を取り入れ、「ヴィシー擁護論」をテレビやラジオなどのメディアで大いに吹聴したのが政治家のエリック・ゼムールであった。次に、彼のヴィシー擁護論の特徴を整理しよう。エリック・ゼムールはアルジェリア系ユダヤ人で、パリ政治学院出身の元ジャーナリストとして、TV フランス 2 やラジオ・ルクセンブルクなどに出演し、歯に衣着せぬ物言いで差別的発言を繰り返し、人気を得た人物であり、また政治スタイルの穏健化を狙う「国民戦線」に失望した人々から支持を得た人物である⁵¹⁾。ゼムールは排外主義や伝統的なナショナリズムに基づく発言を繰り返すとともに、積極的にヴィシー擁護論を主張し続けた。例えば、彼は『フランスの自滅』という著作を 2014 年に出版したが、同書においてゼムールは、ペタン元帥がユダヤ人迫害からフランス国籍のユダヤ人を救った人物であると主張する⁵²⁾。また上述のヴィヴィオルカは、レジスタンスやユダヤ人の救援活動がフランスのユダヤ人を救ったと考えたが、ゼムールはそうした活動には限界があり、「実質不可能である」と指摘する⁵³⁾。そして彼は、仮にユダヤ人をこうした活動が救ったとしても、それは人々の「強力な連帯」ではなく、ヴィシー政府の統治のおかげであると結論付けたのである⁵⁴⁾。

またゼムールは、アラン・ミシエルのように現在のホロコースト研究を偏向的であると非難する。彼はパクストンとマラスの著作である『ヴィシーとショアー』以降の歴史学研究を「パクストンのドクサ」と非難し、アラン・ミシエルの主張を支持する。ゼムールによれば、パクストンに影響を受けた「現代史家たち」は、ナチス・ドイツからかけられた圧力を考慮せず、ヴィシー政府の主導者が反ユダヤ主義的政策を実行したと指摘しているが、「私たちの唯一の歴史家」、つまりアラン・ミシエルはその占領下の圧力を考慮してヴィシー政府の実態を捉えることができている唯一の人物であるという⁵⁵⁾。したがってゼムールは、フランス現代史学には「ドクサ」が支配しているというアラン・ミシエルの主張を継承し、主張することで、歴史家ではない人々を取り込み、これまでの歴史研究の成果をなし崩しにしようとしたのだ。

2-2. 「ユダヤ人生存者」をめぐる二つの問題

以上、ヴィシー政府がユダヤ人を救ったとするヴィシー擁護論の代表的論者の主張を整理してきた。クラルスフェルトの研究以降、正確に割り出せるようになったユダヤ人生存者の人数と彼らの割合を根拠として、ユダヤ人に対して「ヴィシー政府は良い影響を与えた」と主張している点に第一の特徴があるだろう。こうしたエリック・ゼムールやアラン・ミシエルの試みについて、当初、歴史家たちは対処しなかったという。というのも、ヴィシー政府のユダヤ人迫害への加担を明らかにしたこれまでの歴史研究の積み重ねをもって、改めて歴史家が反証する必要がないとも考えられたためである⁵⁶⁾。

しかし、この二人のヴィシー擁護論者による「歴史の歪曲」の試みは、放置されてはならない二つの問題点を孕んでいた。第一の問題は排外的な移民政策の導入の正当化に利用されたこ

とである。先述のようにゼムールはペタン元帥がユダヤ人を救った人物として考えたが、この主張にはペタン元帥を肯定的に評価したいというねらいがあった。2014年の10月8日のBFMテレビでは「ナチの政策だと即座に見なされない真の移民政策を私たちが行うことができることを、私はペタンをとおして知ろうとしている。これが私の目的である。」と語っている⁵⁷⁾。つまり、ペタン元帥を評価することで、ヴィシー政権期の排外主義的な移民政策を肯定的に受けとめ、現代のフランスにも適応したいという思惑が政治家ゼムールにはあったのである。2021年に大統領選に出馬した彼は、「ホロコーストに対してヴィシー政府が良い影響を与えた」ことを認めない「エリートたちの歴史観」を否定し、支持者を獲得していく⁵⁸⁾。そしてこのゼムールの試みは極右あるいはポピュリスト系統のメディアに共有されるようになる。このように、ゼムールはホロコースト史家によって積み重ねられてきた歴史像を無視したが、この試みは彼の支持者たちにも共有されていくことで、排外主義の正当化がなされており、歴史研究者が無視できない状況になった。

第二に、歴史家たちのあいだでユダヤ人生存者の生存要因について見解が分かれていたという研究史上の問題が挙げられる。例えば、先述のヴィヴィオルカのようにフランス共産党や自由フランスが行ったようなレジスタンス活動がユダヤ人の生存者を増加させたと考える歴史家がいれば、ヴィシー政府の統治を肯定的に受け入れる歴史家もいた。その一例がラウル・ヒルバークである。彼はホロコーストの先駆的研究である『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅（上）（下）』を著したドイツ史の大家である⁵⁹⁾。この著作は膨大な資料と文献も用い、またホロコーストを一国史としてではなくヨーロッパ規模で初めて検討した金字塔である。本著の初版はヴィシー政府の神話やレジスタンス神話が依然として支配的であった1967年であるが、その後、1997年の改訂版においてもフランスのホロコーストは次のように記されている。

1942年にドイツの圧力が強まったとき、ヴィシー政府は「…」外国籍ユダヤ人と亡命者を放棄し、自国のユダヤ人を保護しようとした。ヴィシーの戦略はかなり成功した。一部を放棄することで、大部分が救われたのである⁶⁰⁾。

加えてユダヤ人生存者の生存要因について、ヴィシーの加害の実態を明らかにした二人の大家のあいだでも見解が揺れていたことは特筆すべきであろう。ロバート・O・パクストンとマイケル・マラスは、フランスのユダヤ人生存者の生存要因をナチス・ドイツが実施した検挙や逮捕に係る措置によって説明を試みた⁶¹⁾。他方でセルジュ・クラルスフェルトはユダヤ人生存者が増えた要因に、ヴィシーという国家と相反して存在していたフランス社会のおかげだと考えている⁶²⁾。このように、ユダヤ人生存者に対する関心が高まる2000年代頃からヴィシー擁護論が拡散された2010年代前半にかけて、歴史家たちはユダヤ人生存者の生存要因について一致した答えを出すことができなかった。

ただこれには、ユダヤ人生存者の実態にせまることがそもそも困難であるという問題がある。先ほどから何度も触れている「約24万人のユダヤ人生存者」とは、1940年時点で居住してい

たユダヤ人の数（約 32 万人）からホロコーストの犠牲者となったユダヤ人の数（約 7 万 4150 人）を引いただけの単純計算で導き出された人数である。彼らひとりひとりの名前を行政記録から確認することはできても、彼らの占領下の境遇を得るための史料が少なく、加えて彼ら全員に共通する生存要因を論じることはかなり煩雑な作業である。また「ユダヤ人を生存させるに至った要因あるいは事柄」そのものが定義しづらい。例えば、1942 年 7 月 16 日から 17 日にかけてパリでは大規模ユダヤ人検挙（通称ヴェル・ディヴ事件）が起きたが、一部のパリ市警察はその検挙の情報を事前にユダヤ人に流し、逃がそうとした。ある警視は電話で幼馴染のユダヤ人に検挙の予告をし、また検挙当日、ある警察官はユダヤ人に身支度のための準備として 1 時間の猶予をあたえて彼らの逃亡を黙認したという⁹³。しかしこのような事実から、パリ市警察の行動がユダヤ人の生存要因とみなすことができるだろうか。パリ市警察の行動はユダヤ人の救援活動だったとみなすことができるかもしれないが、そのユダヤ人が「占領下を生き延びることができた要因」だとは判断し難い。またこの事実から、ヴィシー政権下の役人がユダヤ人にいい影響を与えたと結論付けることも難しい。というのも、こうしたパリ市警の働きかけによってヴェル・ディヴ事件当日の検挙を逃れ、生き延びることができたとしても、その後の占領下の日々をこのユダヤ人が生き延びることができるかどうかは、また別の生存要因がかかわってくるためである。つまり、上記の警察の行動が一概に生存要因と判断することはできないのである。このように史料上の制約と定義づけの問題がユダヤ人生存者の生存要因を分析することを困難にしている。しかし、こうした論点を無視するかたちでヴィシー政府擁護論が提唱されているのであり、アラン・ミシェルやエリック・ゼムールの主張は根拠が薄弱であると言わざるを得ない。その点でレジスタンス主義に即した歴史研究も同様の問題があるが、移民排斥の正当化のために利用されているヴィシー擁護論を否定することは、歴史家たちにとってより喫緊の課題となった。だが、善悪の二元論的な「ドクサ」に歴史家たちが支配されていると主張したゼムールの著書『フランスの自殺』はベストセラーになり、彼の言説はテレビやラジオ、ソーシャル・メディアで広く拡散され、歴史研究が硬直化しているとみなされる現状が 2010 年代ごろにはあった。では、フランスのホロコーストを専門とする歴史家たちはこのような「歴史の歪曲」にどのように対応し、ユダヤ人生存者の実証をどのように進めたのだろうか。この点は次章で検討する。

第 3 章 ヴィシー擁護論への応答

3-1. 歴史家たちの応答

2010 年代前半に興隆した「ヴィシー擁護論」に対して、2010 年代後半から 2020 年代にかけて多くの歴史家が応答し、批判した。彼らの批判の内容は大きく二つに要約することができる。第一に歴史家たちが非難したのは、数や割合を過度に強調してしまう危険性である。この点を指摘したのはヴィシー擁護論者の論敵にされたロバート・O・パクストンとマイケル・マラス

である。彼らは共著『ヴィシーとユダヤ人』の第二版を出版するかたちで、ヴィシー擁護論に応えた⁶⁴⁾。パクストンとマラスは、そもそも「フランスは他国に比べて多くのユダヤ人が逃れることができたという問いそのものがミスリーディング」だと指摘する⁶⁵⁾。そして彼はフランスよりユダヤ人生存者の割合が多い国として、デンマーク（98.7 パーセント）やフィンランド（97.2 パーセント）、ブルガリア（86 パーセント）、そしてイタリア（84 パーセント）を挙げており、数や割合に過度に着目しすぎる危険性を指摘している⁶⁶⁾。

第二は、ユダヤ人生存者の生存要因を単一の事柄で説明しようとする試みへの批判である。第1章でみたように、アンリ・ルソーは様々な「要素を考慮することなく」、「ユダヤ人の死亡率の低さの主たる理由」を判断することの危険性を指摘している。彼の批判はレジスタンス主義に主として向けられていたが、この批判はヴィシー擁護論にも向けることができるだろう。また、ジャック・セメランもユダヤ人生存者の生存要因の複雑さを自らの政治的理念に基づいて無視しているとエリック・ゼムールの見解を批判している⁶⁷⁾。

そして、歴史家たちの第三の批判は、そもそも「ヴィシーはユダヤ人に良い影響を与えた」という主張は正しいのかという指摘である。この代表的論者がローラン・ジョリーである。彼はフランスのホロコーストに関して数多くの著書を出版しているが、主たるテーマとして彼が取り組んだのは、フランスの政治家や「ふつうの人々」のコラボレーションである。2023 年、彼はそのほか多くの歴史家たちとコラボレーションの実態を再度検証し、ヴィシー擁護論のテーゼを検証した。それが『フランスとショアー』である⁶⁸⁾。同書は総勢 16 名、計 14 報の「フランスのショアーに関するフランス国内と国外の最新の研究を紹介する」ことで、本当にヴィシーが多くユダヤ人を救ったのかという点を追究している⁶⁹⁾。そして本書は、ヴィシーの官僚が外国籍のユダヤ人だけでなく、フランス国籍のユダヤ人に対しても、反ユダヤ主義的措置をナチス・ドイツ以上に積極的に採用とした点を明示し、ヴィシー政府のコラボレーションの実態を再確認することで、ヴィシー擁護論の欠陥を指摘した⁷⁰⁾。また歴史家ジョリーは『歴史の歪曲』という本で、ゼムールが自らの政治思想を正当化するために歴史の歪曲を図ったこと、そしてミシェルがラヴァルの甥と交友を深めたころからヴィシー擁護論を提唱するようになったと指摘している⁷¹⁾。

以上、これまでみてきた歴史家たちは、ヴィシー擁護論がユダヤ人生存者の「数」や「割合」に着目しすぎている点、またヴィシー政府の統治のみでユダヤ人の生存要因を説明することの危険性を指摘し、加えてコラボレーションの実態を再検討することで、同政府がユダヤ人を守ったという主張の根拠が薄弱であることを示す。加えてヴィシー政府を擁護する彼らの思惑には、排外主義かつ国家主義的な言説の正当化という政治的思惑が隠れており、そのために都合のいい解釈がなされたことを批判している。こうした歴史家たちの応答を踏まえ、ユダヤ人生存者に関する叙述を実証研究の水準にまで引きあげたのが、先述の歴史家ジャック・セメランである。

3-2.ユダヤ人生存者の歴史研究の実践——ジャック・セメラン

ジャック・セメランは当初、ユダヤ人の生存要因をレジスタンス活動によって説明していたが、第1章で触れたように、パクストンやルソーから当該活動のみでユダヤ人の生存要因を語ることはできないと批判されていた。彼はこうした批判を受け、2018年に『フランスのユダヤ人の生存』を出版し、ユダヤ人生存者の生存要因を改めて論じる⁷⁹⁾。本研究の特色は、ユダヤ人生存者の生存要因は単一的な要素で語れるものではないとし、より複合的な視座からユダヤ人の生存要因を検証した点にある⁷⁹⁾。まず彼は、フランスのユダヤ人生存者数が多い要因を次の3つの視点から説明する。

第一は、「地理的要因」である⁷⁹⁾。フランスは占領下の各国に比べ、領土が広く、なおかつ南部にはナチス・ドイツが直接統治していない「自由地域」があった。またこの「自由地域」は南部にスペイン、東部にはスイスという、ナチス・ドイツの占領を受けていない国と隣接している。したがって、比較的容易に他国へ逃亡できるこの地理的条件がユダヤ人生存者の増加につながったとセメランは指摘する。第二は彼が「文化的要因」と呼ぶものであり、具体的にはユダヤ人の救出活動やフランス社会へのユダヤ人たちの同化、そしてユダヤ人たちのソシアビリテなどを指す⁷⁹⁾。まずセメランは、フランスのユダヤ人救援活動は他国に比べて大規模であったと指摘する。「ユダヤ人をかくまう」ないしは「ユダヤ人を逃がす」といった活動はキリスト教団体や愛国者らを中心に行われており、なかには反ユダヤ主義的感情を持った人もいたようだが、反ドイツ感情やフランスに対する愛国感情に突き動かされ、実践されたという。またユダヤ人が他国に比べて同化していたことも彼らの生存要因の一つとして挙げている。ポーランドなどの東欧諸国に比べ、フランスでは長い歴史のなかで社会に同化したユダヤ人が多く、フランス人とのソシアビリテを持っていた彼らは、ナチス・ドイツやフランス警察から逃れることが容易であったという。したがってセメランは、外国籍のユダヤ人に比べ、フランス系ユダヤ人の生存者数が多いのはこのためだと考えている。またセメランは、ユダヤ人の身柄を保証するための賄賂として、財産や金銭を有していることがユダヤ人の生存を左右したとも指摘している。第三は「構造的要因」であり、ナチス・ドイツと被占領国の間でみられた国際的な統治体制のことを指している⁷⁹⁾。ヴィシー擁護論者が指摘したように、1943年から1944年にかけて、フランスではユダヤ人検挙の数が低下し、逮捕されるユダヤ人の数も減る。しかしこれは、ペタンやラヴァルが交渉したおかげではなく、当時のナチス・ドイツがベルギーやオランダでユダヤ人検挙を行うよう指令を出していたためだと指摘する。つまり1943年から翌年にかけては、ナチス・ドイツがフランスでのユダヤ人検挙の実施を控えており、このナチス・ドイツ側の政策の変更がユダヤ人の生存者の増加に与えた影響が大きいとセメランは考える。

このようにセメランは地理的要因、文化的要因、構造的要因の3つがユダヤ人の生存の機会につながったことを明らかにしたが、彼の主張の第二の特筆すべき点はこうした要素を獲得しつつ、迫害を逃れようとしたユダヤ人自身の逃亡戦略が最大の生存要因であったと指摘する点

である。迫害から逃れようとするユダヤ人自身の意志や戦略が彼らの生き延びる最大の理由になったという指摘は至極当然のように聞こえるだろう。しかし、多くのユダヤ人の証言を史料として用いて、このことを実証し、ヴィシー擁護論を真っ向から反証した点にこの研究の最大の特徴がある。なおセメランの指摘する生存戦略とは、主として身分証明書の偽装、ユダヤ人検挙の対象外となるユダヤ人扶助組織で活動すること、警察に申請した住居とは他の場所に隠れること、「自由地域」ないしは他国（スペイン、スイス）への逃走することの4点である。

おわりに 今後のユダヤ人生存者研究——ミクロストリア、都市史研究へ

以上、本稿を整理しよう。フランスのホロコースト研究は 1970 年代のパクストン革命をきっかけに本格化する。1970 年代から 1990 年代にかけては、フランス政府によるユダヤ人迫害への加担に焦点を当てた研究が増加した。それゆえ、迫害によって亡くなったユダヤ人 7 万 5000 人の境遇が明らかになったが、約 24 万人のユダヤ人生存者の存在も同様に明確化する。2000 年代頃から、ホロコーストに対するフランス社会の関心の変化に伴ってユダヤ人生存者への関心が高まり、「なぜ約 24 万人のユダヤ人が占領下のフランスを生き延びることができたのか」という問いが生まれた。そしてこうした問題に取り組むなかで、ユダヤ人の救援活動にその答えを見出すレジスタンス主義とヴィシー政府がユダヤ人を救ったとするヴィシー擁護論が出現する。レジスタンス主義にせよ、ヴィシー擁護論にせよ、単一の事象によってユダヤ人生存者全員の生存要因を論じている点に限界がある。ただ、ヴィシー擁護論については排外主義的な移民政策の導入のために歴史を利用し歪曲していたこと、また歴史研究の成果を「パクストン的なドクサ」に支配されていると批判することでなし崩しにしようとしたことから、レジスタンス主義以上に、実証的な批判が喫緊の課題とされた。そして、ローラン・ジョリーやアンリ・ルソー、ロバート・O・パクストンといった歴史家たちは、生存者の数や割合を過度に強調し、生存者数の多さを政府の統治体制のみで説明することは、ヴィシー政府によるコラボラシオンの実態を矮小化するとしてヴィシー擁護論を批判した。

ただこうした歴史の歪曲の試みが拡散された要因のひとつに、占領下のユダヤ人生存者の生存要因について歴史家たちの見解が揺れており、一致した答えを提示できなかったことが関係していた。それゆえ 2010 年代後半から、歴史家たちのなかでこの問題は実証的に取り組まれるようになる。ジャック・セメランは、約 24 万人のユダヤ人生存者の生存要因として、フランス特有の地理的要因・文化的要因・政治的要因、そしてユダヤ人たち自身の生存戦略を挙げた。「なぜ約 24 万人のユダヤ人がナチ占領下のフランスを生き延びたのか」という問いについては、セメランの提示したこのモデルでおおよそ説明がつくであろう。それゆえヴィシー政府の統治という要素のみがユダヤ人にいい影響を与えたとするヴィシー擁護論は現在では完全に否定されている。なお 2025 年 4 月、エリック・ゼムールには排外主義のためにホロコーストの史実を修正したとして罰金刑の判決が下されている⁷⁷⁾。

他方で、ユダヤ人生存者に関する歴史研究に全く課題がないわけではない。セメランが示し

た生存要因は依然として曖昧であり、地域や集団によってそれぞれ異なる傾向がみられることが推測される。またセメラン自身も指摘するように、今後はこれらの生存要因の複雑なつながりを解明したり、これらの要因のみでは説明できない事例を検討したりする必要があるだろう⁷⁸⁾。このようにホロコースト研究はユダヤ人生存者の存在に視座を据えた第4の潮流を迎えており、ユダヤ人生存者に関する歴史研究は次の二つの手法を取り入れ、進展している。第一は、ユダヤ人生存者の対象を絞って、彼らの生存要因の複雑な実態を明らかにするミクロストリア研究である⁷⁹⁾。これらの研究は、セメランの提示したそれぞれの生存要因の複雑なつながり、具体的にはユダヤ人の救援行為や当時の政治的状況や統治体制がどのように相互的に作用し、いかにしてユダヤ人生存者たちに生存機会を与えたのかを詳細に明らかにすることができるだろう。第二は、ユダヤ人生存者の存在や生存要因を通じて、占領期の都市およびフランス社会の状況を明らかにする都市史研究である⁸⁰⁾。この研究は都市に分析対象を限定することで、ユダヤ人生存者の境遇を明らかにできるだけでなく、第2章で言及したように、パクストンとクラルスフェルトのあいだで議論になったナチ占領下の複雑な統治構造や世論の実態を解明にする手がかりになると考えられる。というのも、対象地域においてユダヤ人生存者と身近な存在であった「ふつうの人々」の思惑や戦略、具体的には反ユダヤ主義への加担、適応、抵抗の過程を明らかにすることができるためである。このようにユダヤ人生存者に視座を置くことは、強制収容所で亡くなったユダヤ人に対する分析ではみえてこなかった占領下および迫害の実態を叙述することができると期待できるが、この点においてはフランスに限らずナチ占領下の各国の歴史研究にいえることであろう。最後に、本稿でみてきたユダヤ人生存者をめぐる歴史否認主義の隆盛とそれに対する歴史家たちの応答は、現代の日本においてソーシャル・メディアを中心に拡散されている修正主義への対策を考えるうえで貴重な事例である。今後はこうしたフランス史家たちの実践を追いつつ、否認主義と歴史認識をめぐる問題に取り組みたい。

Notes

- 1) Serge Klarsfeld, *La Shoah en France 1. Vichy-Auschwitz la « solution finale » de la question juive en France*, Paris, Fayard, 2001.
- 2) 「フランスの特殊性」ないしは「フランスの例外」とは、ヴィシー政府による統治がフランスでは認められたという観点から、当時のフランスにはドイツやその他の被占領国とは異なる状況があったのではないかと考える概念であり、占領下のフランスに関する研究のなかでよく用いられる語である。
- 3) 一例に、次のような研究がある。副島美由紀「ドイツの『歴史家論争 2.0』と『コロニアル・ターン 2.0』 『想起の文化』の継続と記憶の連帯に向けて」、『小樽商科大学 人文研究』第 148 号、2025 年、9-31 ページ。渡辺和行『ホロコーストのフランス—歴史と記憶』人文書院、1998 年。
- 4) 「イスラエルと“ホロコースト生還者（サバイバー）” 殺りくはなぜ止まないのか」、『クローズアップ現代』NHK、2024 年 1 月 29 日放送。 <https://www.nhk.jp/p/gendai/ts/R7Y6NGLJ6G/episode/te/RP187K9K92/> 「アウシュヴィッツの生還者たち」、『映像の世紀 バタフライエフェクト』NHK、2025 年 4 月 14 日放送。（2025 年 8 月 31 日確認）
- 5) Jacques Semelin, Laurent Larcher, *Une énigme française. Pourquoi les trois quarts des Juifs en France n'ont pas été déportés*, Paris, Albin Michel, p. 47.
- 6) ロバート・O・パクストン「2001 年版序文」、渡辺和行・剣持久木訳『ヴィシー時代のフランス』柏書房、2004 年、14 ページ。
- 7) アンリ・ルソー『過去と向き合う 現代の記憶についての試論』剣持久木・末次圭介・南祐三訳、吉田書店、2020 年、20 ページ。
- 8) Géo London, *Le Procès Laval*, Lyon, Roger Bonnefon, 1946.
- 9) Raymond Aron, « Apres l'événement, avant l'histoire. A propos du procès Petin », *Les Temps Modernes*, 1, octobre, 1945, p. 159.
- 10) Robert Aron, *Histoire de Vichy*, Paris, Fayard, 1954, p. 528.
- 11) 渡辺和行『ホロコーストのフランス』28 ページ。
- 12) 渡辺和行『ナチ占領下のフランス 沈黙・抵抗・協力』講談社、1994 年、16 ページ。
- 13) Renée Poznanski, “Rescue of the Jews and the Resistance in France: From History to Historiography”, *French Politics, Culture & Society*, Summer 2012, vol. 30, no. 2, Special issue: The rescue of Jews in France and its empire during World War II: History and memory (Summer 2012), *Berghahn Books*, p. 19-20.
- 14) Robert O. Paxton, *Vichy France. Old guard and new order*, Columbia University Press, 1972.
- 15) 川上勉『ヴィシー政府と「国民革命」 ドイツ占領下フランスのナショナル・アイデンティティ』藤原書店、2001 年、226 ページ。
- 16) Robert O. Paxton, Michel Marrus, *Vichy et les Juifs*, Paris, Calmann-Levy, 1981.
- 17) ロバート・O・パクストン、前掲書、16 ページ。
- 18) Jean-Pierre Azéma, « La révolution paxtonienne », Fishman Sarah (dir.), *La France sous Vichy. Autour de Robert O. Paxton*, Bruxelles, Complexe, 2004, p. 23-25.
- 19) Serge Klarsfeld, *Le Mémorial de la Déportation des Juifs de France*, Paris, Fayard, 1978.
- 20) Serge Klarsfeld, *La Shoah en France*, Paris, Fayard, 2001. なお本書は 1980 年代から 1990 年代にかけて出版された著作で再構成されている。Tome 1. *Vichy-Auschwitz la « solution finale » de la question juive en France*, Fayard, 1983. Tome 2. *Le calendrier de la persécution des Juifs de France. juillet 1940 - août 1942*, F.F.D.J.F, Fayard, 1993. Tome 3. *Le calendrier de la persécution des Juifs de France. septembre 1942 - août 1944*, F.F.D.J.F, Fayard, 1993. Tome 4. *Le mémorial des enfants juifs déportés de France*, F.F.D.J.F, Fayard, 1993.
- 21) アンリ・ルソー、前掲書、82 ページ。
- 22) 武井彩佳『歴史修正主義 ヒトラー賛美、ホロコースト否定論から法規制まで』中公新書、2021 年、94 ページ。
- 23) 同上、98-99 ページ。
- 24) ロバート・O・パクストン、前掲書、14 ページ。

25) ショアー記念館については次のサイトを参照。

<https://www.memorialdelashoah.org/archives-et-documentation/quest-ce-que-la-shoah.html> (2025年8月31日確認) また
イスラエル・ホロコースト記念館(ヤド・ヴァシェム)については次を参照。

<https://www.yadvashem.org/collections.html> (2025年8月31日確認)

26) 一例に、次の研究がある。Laurent Joly, *Dénoncer les juifs sous l'Occupation. Paris, 1940-1944*, Paris, CNRS Editions, 2017.

27) 一例に、次の研究がある。Renée Poznanski, *Les Juifs en France pendant la Seconde Guerre mondiale*, Paris, Hachette, 1994.

28) 武井彩佳、前掲書、200-206 ページ。ちなみに、ゲソ法で最初に処罰されたのは上述のフォーリンソンである。

29) アンリ・ルソー、前掲書、87-90 ページ。

30) Jacques Semelin, Laurent Larcher, *op. cit.*, p. 8.

31) *Ibid.*

32) アンリ・ルソー、前掲書、90 ページ。

33) 同上、91-92 ページ。

34) 同上、93-95 ページ。

35) Pierre Laborie, *Le Chagrin et le Venin. La France sous l'Occupation, mémoire et idées reçues*, Paris, Bayard, 2011, p. 255.

36) Jacques Semelin, *Persécutions et entraides dans la France occupée. Comment 75% des Juifs en France ont échappé à la mort.*, Paris, Le Seuil-Les Arenes, 2013.

37) Oliver Wiewiorka, *Histoire de la Résistance(1940-1945)*, Paris, Perlin, p. 466.

38) アンリ・ルソー、前掲書、143-144 ページ。

39) 同上、143、293 ページ。

40) Robert O. Paxton, Jean-François Sené, « Comment Vichy aggrava le sort des juifs en France », *Le Début*, no. 183, janvier-février 2015, p. 173-181.

41) Alain Michel, *Vichy et la Shoah. Enquête sur le paradoxe français*, Paris, CLD éditions, 2012.

42) *Ibid.*, p. 47.

43) *Ibid.*, p. 46.

44) *Ibid.*, p. 113.

45) *Ibid.*

46) *Ibid.*, p. 117.

47) *Ibid.*

48) *Ibid.*, p. 90.

49) *Ibid.*, p. 97-100.

50) *Ibid.*, p. 369.

51) 渡邊啓貴『ルベンと極右ポピュリズムの時代 〈ヤヌス〉の二つの顔』白水社、2025年、212 ページ。

52) Éric Zemmour, *Le Suicide français*, Paris, Albin Michel, 2014.

53) *Ibid.*, p. 89.

54) *Ibid.*, p. 385.

55) *Ibid.*, p. 528.

56) Laurent Joly, « Vichy et la Déportation des Juifs. Essai historiographique autour du livre d'Alain Michel, *Vichy et la Shoah. Enquête sur le paradoxe français* (Paris, Éditions CLD, 2012, 407 p.) », PHDN, 2013-2020.

<https://phdn.org/histgen/vichy/joly-michel-2013.html> (2025年8月31日確認) Laurent Joly, *Zemmour contre l'histoire*, collection Tracts no. 34, Paris, Gallimard, p. 3.

57) Éric Zemmour, *op. cit.*, p. 93-94. Propos d'Éric Zemmour sur BFMTV, 8 octobre 2014.

58) Laurent Joly, *Zemmour contre l'histoire*, p. 4.

59) Raul Hillberg, *The destruction of the European jews*, Raines, New York, 1997 (望田幸男・原田一美・井上茂子訳『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』柏書房、2016年)。

60) 同上、461 ページ。

61) Robert O. Paxton, Michel Marrus, *op. cit.*, p. 355.

- 62) Serge Klarsfeld, *Vichy-Auschwitz*, tome 2, p. 190-191.
- 63) 渡辺和行『ナチ占領下のフランス 沈黙・抵抗・協力』133 ページ。
- 64) Robert O. Paxton, Michel Marrus, *Vichy France and the Jews*, Stanford university press, 2019.
- 65) Robert O. Paxton, *op. cit.*, p. xii.
- 66) *Ibid.*
- 67) Jacques Semelin, Laurent Larcher, *op. cit.*, p. 192.
- 68) Laurent Joly(dir.), *La France et la shoah*, Paris, Calmann-Lévy, 2023.
- 69) *Ibid.*, p. 17.
- 70) *Ibid.*, p. 549-550.
- 71) Laurent Joly, *La falsification de l'Histoire :Éric Zemmour, l'extrême droite, vichy et les Juifs*, Paris, Grasset, 2022.
- 72) Jacque Semelin, *La suivie des juifs en france*, Paris, CNRS éditions, 2018.
- 73) *Ibid.*, p. 377.
- 74) *Ibid.*, p. 377-378.
- 75) *Ibid.*, p. 378-389.
- 76) *Ibid.*, p. 389-400.
- 77) “French far-right politician Éric Zemmour fined for contesting crimes against humanity.”, *Le Monde*, 2 April 2025.
- 78) *Ibid.*
- 79) 一例に、次の研究がある。Ivan Jablonka, *Histoire des grands-parents que je n'ai pas eus. Une enquête*, Paris, Seuil, 2012 (田所光男訳『私にはいなかった祖父母の歴史 ある調査』名古屋大学出版会、2017 年) . Ruth Zylberman, *209 rue Saint-Maur; Paris Xe. Autobiographie d'un immeuble*, Paris, Seuil, 2020 (塩塚秀一郎訳『パリ十区サン=モール通り二〇九番地 ある集合住宅の自伝』作品社、2024 年) .
- 80) 一例に、次の研究がある。拙稿「20 世紀前半のパリにおける公衆衛生と反ユダヤ主義 サン・ジェルヴェ地区を例に」『年報地域文化研究』第 28 号、2025 年、1-19 ページ。Isabelle Backouche, Sarah Gensburger, Eric Le Bourhis(dir.), « Persécution des Juifs et espace urbain Paris, 1940-1946 », *Histoire Urbaine*, 2022, no. 62. 後者の研究はパリを研究対象とする都市史研究者らによって組まれたユダヤ人迫害に関する特集である。本特集の内容の詳細については次の拙稿（書評）を参照。拙稿「特集 « Persécution des Juifs et espace urbain Paris, 1940-1946 » , *Histoire Urbaine*, 2022, no. 62.」『神戸大学史学年報』第 38 号、2023 年、22-30 ページ。

La controverse historique sur les « survivants juifs » en France. Pourquoi environ 240000 Juifs en France ont-ils survécu sous l'Occupation ?

Kazuki KOJO

Sur les 320 000 Juifs habitant en France durant la Seconde Guerre mondiale, environ 240 000 ont pu survivre pendant l'Occupation. Au cours des dernières années, les recherches sur la Shoah se sont intéressées aux quelque 240 000 « survivants juifs ». Cette étude a pour objectif de résumer la « controverse » autour de ces survivants, de mettre en lumière les facteurs qui, selon les historiens, ont contribué à leur survie, et de souligner l'importance de l'analyse des survivants dans les recherches sur la Shoah.

Nous commencerons par faire le point sur les tendances des recherches sur la Shoah en France. Ces recherches se sont intensifiées à partir des années 1970, à la suite de « la révolution Paxtonienne ». Entre 1970 et 1990, les recherches se sont concentrées sur la Collaboration du gouvernement de Vichy dans la persécution des Juifs. Cela a permis de mettre en lumière le sort des 75 000 Juifs déportés. Mais, à partir des années 2000, l'existence d'environ 240 000 survivants juifs a également été révélée. Dans les années 2010, l'argument selon lequel le régime de Vichy aurait protégé les Juifs a refait surface, car environ « trois quarts » des Juifs en France pendant l'Occupation ont pu être sauvés. Alain Michel et Éric Zemmour attribuent ce nombre élevé de survivants au régime de Vichy. Cette falsification de l'Histoire a notamment été reprise par des politiciens d'extrême droite, qui l'ont utilisée pour justifier l'exclusion des immigrés.

Enfin, nous examinerons la manière dont les historiens ont répondu à cette réécriture. Laurent Joly, Henry Rousso et Robert O. Paxton critiquent l'attribution de la survie des Juifs au Régime de Vichy. Une telle approche risque en effet de minimiser la collaboration sous l'Occupation. Jacques Semelin souligne que les facteurs ayant permis aux Juifs de survivre ne se résument pas aux actions du gouvernement de Vichy, mais relèvent plutôt de facteurs géographiques et culturels, ainsi que de stratégies de survie des Juifs eux-mêmes. Dans les futures recherches sur la Shoah, il sera important d'analyser des survivants juifs au sein de groupes ou de villes spécifiques, afin de mettre en évidence les « liens complexes » entre ces facteurs et de clarifier la structure sociale de la France sous l'Occupation à travers leur existence.

死にゆく身体と超越

——初期から中期レヴィナスにおける
超越の内的条件としての身体について——

高井実奈

『Résonances』第16号

2025年11月発行

19-34 ページ

ISSN 2435-8371

死にゆく身体と超越

——初期から中期レヴィナスにおける超越の内的条件としての身体について——

高井実奈

はじめに

現在では、独自の他者論を打ち立てた哲学者として知られている、エマニュエル・レヴィナス（Emmanuel Levinas, 1906-1995）は、実は自身の思想を《ままならない身体》¹⁾の哲学的分析から展開させていた。ままならない身体とは、私たちが意のままに動かすことのできる身体のことではなく、物質として、重圧や障害となる身体のことである。

さらにレヴィナスの哲学において、自分とは異なるものとの関係へ向かう動きの第一の源泉も、いわゆる「他者（Autre）」ではなく、重圧や身体的苦しみといった、主体に内在する他者性やままならなさから、抜け出そうとする欲求にあったと言える。

それに対し、中期思想を代表する『全体性と無限』（1961）²⁾では、他者の他者性が強調され、主体に関しては、その自己同一性の方が強く打ち出されている（cf. TI, 26/46-47）。

本稿はこの変化に着目して、他者と関係し、その関係に開かれている状態を、《超越》として問題化し³⁾、初期レヴィナス思想において論じられていた、身体のままならなさを通じた超越の問題が、いかに彼の中期思想を代表する『全体性と無限』において位置付けられているのかを分析することを目的とする。そして、本稿はこの分析から、中期レヴィナスの倫理思想を主体の具体的な一人称的観点から捉え直すこともまた目的としている。これは、以下の背景からである。

『全体性と無限』は、レヴィナスの主著である一方、その議論には、現象学の発想や用語を利用しつつも、結局は独断的かつ神学的な他者論となっているという批判⁴⁾や、他者関係を抽象化して、人種やジェンダーを介した具体的な社会関係を隠蔽していると、その理論の応用不可能性などについて批判⁵⁾がなされてきた。後者の指摘を行ったサラ・アーメッドによれば、本来、他者への倫理的な応答責任は、レヴィナスが論じているような、特殊性の削ぎ落とされた他者の普遍的な他者性によってではなく、主体と他者の身体的で感情的な出会いや、意思疎通を通じて生起する⁶⁾。

確かに、『全体性と無限』には次のような特徴がある。同書は、主体と他者が絶対的に分離しつつも関係しあっているという、形而上学的関係を記述することを主題とするが（TI, 32/56）、しかしその定義が非常に抽象的であり、かつ、私たちがいかなる段階を経てその関係を持てるのかということが明確ではない。そのために、そこでは独断的に（他者と言ってしまえばそれ以上の論証はいらないかのように）、他者と、他者との関係である形而上学的関係なるものが、絶対的なものとして措定されているように見受けられるのである。

それに対して初期思想では、主体の身体という非常に具体的な場から超越の問題が語られていた。さらに、既に成立している形而上学的関係を記述する中期思想の姿勢とは異なり、初期思想では「孤独がいかなる点で乗り越えられるかを理解する」(TA, 19/6)という、主体から他者へ、という流れへの注目が掲げられている。そのために、主体がいかに他者と関係することが可能となっており、そしていかに両者が関係し始めるのかが、レヴィナスの著作の中でも明示的なのだ。

そこで、初期思想のように《一人称の私がいかに他者との出会いを果たすのか》という観点をもって、レヴィナス哲学の核をなす『全体性と無限』を捉え直すならば、レヴィナスの思想に対する従来の批判への応答や、更なる発展可能性を考えることもできるかもしれない。その鍵となるのが、『身体のままならなさ』という論点である。初期思想で提出された、超越の内的条件としての身体の他者性が、『全体性と無限』においてどのような位置付けにあるのかを分析することは、レヴィナスの倫理思想を、主体の内的で具体的な水準から読み解くことに寄与するだろう。

そこで、本稿は次の流れで論述を進める。まず、初期レヴィナスが、いかに身体に基づき超越を語っていたのかを確認し(第1節)、次に、その初期思想と中期思想の前提の違いを示したうえで、「欲望(désir)」概念を、中期思想における超越を分析するための鍵概念として提示し(第2節)、最後に、欲望の条件と言われる死に関する議論が、いかなるものかを分析して(第3節)、以上の初期から中期思想の分析から見える、私たちの具体的な《死にゆく身体》が、超越を可能にしているという議論の内容をまとめる(おわりに)。

1. 初期思想における超越の問題

1.1 「逃走について」における超越の動向の芽生え

レヴィナス哲学において、最初に本格的に主題とされた超越の問題、それは「逃走について」(1935)⁷⁾での身体を基礎とした「欲求(besoin)」に関する議論であろう。「ヒトラー主義哲学に関する若干の考察」(1934)⁸⁾では、主体と身体の同一性、そして、私は私以外ではありえないというような、人間存在の分割不可能な同一性が問題となっていた⁹⁾のに対し「逃走について」では、その同一性の中の「二重性/二元性(dualité)」に付随する超越の動向が主題となっている。

この頃のレヴィナスは、マルティン・ハイデガーの『存在と時間』(1927)における、主体の実存から存在を分析するという、存在論的分析の発想を採用しつつも、そもそも存在者が身体によって生きている限りで、存在は「内在する矛盾」を抱えている(DE, 90/169)のだと、身体という論点から持論を展開させている¹⁰⁾。ハイデガーは、「実存(Existenz)」を、主体が自分自身をどのように了解し、そしてその都度どのように実現させるかという、固定的でない、動詞的な身分から捉えていた。ここには、自分の実存は自分が何を為すかによって決定さ

れ、統合されるという前提が見てとれる。

それに対し、のちのレヴィナスは、「純粹で真っ直ぐでもありえた実存の動きは、屈折し、その動きのうちでぬかるみにはまるに違いな」いと論じている¹¹⁾。主体は、それ自体が身体である限りで、「存在はその根底において自分自身にとっての重みであ」(DE, 88/167)り、矛盾なのである。例えば、靈魂など精神的な存在者であれば、精神的な内容それ自体が、その存在の全体であり矛盾は生じない。しかしながら、私たち身体的存在者にとって、基礎である身体そのものが、主体の完全な統制の行き届かない物質である限り、主体には常に内的な他者性があり、自分自身を自分では完全に支配できない。確かに、意識や思考、記憶など、精神的なものによってこそ、その人の性格など自己同一性は保たれているが、身体を土台としていることで、主体のうちでは精神的なものと身体的なものの軋轢があり、それに付随して、主体には二重性が生じているのである。

「自己自身への準拠において人間は一種の二重性を見分ける」(DE, 73/151)と言われるように、主体に内在する二重的な自己存在をレヴィナスは区別している。自分自身に密着した自己存在は、より精神的な「自我(moi)」、そして、ある程度主体自身によって対象化され、他者性やずれを伴って感じられる自己存在は、より身体的な「自己(soi)」と呼ばれる。

他なるものと関係する以前の孤独な主体の様態は、このように、自分自身との苦痛を伴った関係に閉じてしまうことである。のちの著作によれば、「自己同一性の関係は、自己による自我の閉塞であり[…]、つまり、物質性(matérialité)」(TA, 51/51)である。この時、主体は自分自身に「繫縛(enchaînement)」され、「釘付け(rivé)」にされているが、同時に主体はそこから逃走したいという欲求を持つとされる。

逃走の欲求が最も純粹に表れているのが「吐き気(nausée)」という身体的現象である。吐き気は、外力ではなく、主体の内側の引力に引きずられるようにして生じる。吐き気に支配された主体は自分以外との関係を持たないが、しかしそれ自体は自分自身から逃れようとする内的運動である(DE, 89-90/167-168)。

自分自身を否定し、自分自身から逃れようとする吐き気における欲求は、身体という自己存在の基礎が、それ自体として主体内部にもたらす二重性から湧き出る動向といえる。しかし、逃走の欲求の動きは、主体が他のものに到達している・関係していることではないために、超越そのものではない。そこで、欲求はあくまでも第一の超越の動向の芽生えと言えるだろう。

「逃走について」では、以上のように、身体が、主体の内的感覚において同一性を内破させていることで、可視的でも論理的な意味とも異なる形で、主体の内的感覚において超越の動向が欲求として生じていることが確認できた。

1.2 『時間と他者』における主体の死と他者関係

『時間と他者』（1948）¹²⁾では「孤独がいかなる点で乗り越えられるかを理解する」（TA, 19/6）という意図が示されているように、孤独な主体が実際に他者と出会うまでの過程が、ある種、弁証法的に描かれている。

まず主体が最初に結ぶ関係は、世界の物質との関係である「享受（jouissance）」であり、その対象である物質は、食べ物などを代表とする「糧（nourriture）」である。この時に主体は「他なるもの（autre）」¹³⁾との関係によって、自己忘却できることで「世界による救済」（TA, 45/42）を得る。「欲求の超越の瞬間において、主体は糧の前、糧としての世界の前におかれ、物質性は主体に自分自身からの解放を与える」（TA, 51/52）のだ。この次元は『全体性と無限』第Ⅱ部において、幸福な生を生きる段階として発展されているように、主体にとって肯定的なものである。しかし糧は、空間や光という共通性を通じて認識により把握されるものであることから、それは完全な他者ではなく、また、結局は私のものとして消費されてしまう限り、主体を孤独から解放はしない（TA, 53-54/53-54）。

この主体にとって第一の他者性の経験が、主体自身に内在する身体の他者性、つまり苦痛や死の現象である。主体における死の接近、それは「主体のうちに純然たる孤独への回帰に尽くされることはないような関係を垣間見る」（TA, 20/7）ことである。

しかし、レヴィナスにとって死は主体のうちにあると言っても、ハイデガー的な先駆、何らかの構えの対象ではない¹⁴⁾。私が死んでいる時に私は存在しないのであって、主体は急に死に襲われるものであり、死に対して厳密な意味ではどのような準備も予測もできない。何かとして問題にできない以上、死は「神秘（mystère）」と呼ぶこともできる（TA, 56/57）。

死は予測の不可能性であるからこそ、死であり、他者性である。しかし、死に対していかなる形によっても接近できないというわけではない。それは、予測を放棄し、死の接近の中で苦痛を被ることである。レヴィナスによれば、苦痛には、被る者にその際限のなさを実感させることに特徴がある。例えば、浅い擦り傷の痛みは、さらに深い痛みや、その先の死がもたらされうることを予感させるように、苦痛はその絶頂としての死を含んでいる（TA, 56/56-57）。苦痛の感覚によって、存在者は死の接近を、予測ではなく内的に実感する。

これは、具体的には、「雄々しさ＝男らしさ（virilité）」を棄て、まるで子どものように嗚咽の状態に至ること、このような受動性の状態である（TA, 59-60/61）。そして、クリスチャン・シオカンが指摘するように、この第1の他者性が、第2の他者性の出来事を可能にする¹⁵⁾。レヴィナスはそのつながりについて明言している。

苦痛を通じて孤独の痙攣と、死との関係へ至った者だけが、他者との関係が可能となった場所に位置している（TA, 64/66）。

彼がここで強調するのは、主体の雄々しさや、支配力の終焉である。例えば、世界との関係に

閉ざされた主体は、自分とは異なるすべてのものを主体の支配下にあるものとして捉えており、他者をも対象であるモノとして認識するかもしれない。これが同一性の次元であるが、しかし自分に対する自分の支配の終焉は、主体に二元性を与え、自分には引き受けられないものが生起しうることを主体に示す（TA, 62/65）。このことによって主体は、他者と出会うことが可能になる。

簡単にまとめよう。糧との関係までは、レヴィナスにとって同一性の次元である。それは、自分とは異なる他者が現れていない状態であり、他者の不在は主体の権能の充満と同じである。しかし、私の死は、私に内在してはいるものの、私の権能や支配は行き届かない。このことが、それまでの主体の同一性を最初に破壊する。この破壊とはつまり、支配の終焉であり、支配の終焉は、支配とは異なる態度によって自分とは異なる何ものかと出会うことへと主体を導く。

死が、苦痛を通じて他者性たるものを内的に実感させることによって、実際の他者の他者性を受け取れることを、主体に可能にするとも言えるだろう。このように、他者と出会う第一の条件として、『時間と他者』においても、主体のままならない身体、しかし特に《死にゆく身体》が提示されている。

2. 『全体性と無限』における〈同〉と〈他〉の形而上学的関係と欲望

2.1 自我の他者性の否定

それでは初期思想までの姿勢は、他者概念が明確に押し出された中期思想において、どのように変化しているのだろうか。おそらく、すでに指摘されている通り、初期思想における分析は、『全体性と無限』（1961）や『存在するとは別の仕方』（1974）などの、のちの一切の思索の前提であると思われる¹⁶⁾。なぜならば、レヴィナスの中期以降の思想では、初期思想で論じられていた、主体の原理的な生成については明示的に展開されなくなるからである。

一方で、『全体性と無限』においてレヴィナスは、初期思想で提示していた孤独な主体と、その他者性の議論に対し否定的に言及している。

嫌悪として生きられる自己を拒絶する自我、倦怠として生きられる自己に釘付け（rivé）にされた自我、それらは自己意識の諸様態であり、自我と自己の引き裂けない同一性に基づいている。1人の他人と思い込んでいる私の他者性は、それが〈同〉の戯れでしかないからこそ、詩人の想像力を鼓舞することができるのだ。自己による自我の否定とは、正確に言えば、自我の同一性の諸様態の一つなのである（TI, 26/46-47）。

中期レヴィナスによれば、私の他者性は自己同一性の一つの様態にすぎない。さらにそれは「戯れ」とされるほどに、低く見積もられていると思われる。自己同一性があるからこそ、その他者性なるものも問題化できるのであり、より本質的なのはこの私の同一性の方である。

そして、その同一性を考えるためには、「自我と世界との間の具体的関係から出発しなければならない」(ibid.)とされる。つまり、孤独そのものではなく、世界との関係にこそ、主体の同一性の根源がある。これらの姿勢の変化はいかなる事情に起因するのであろうか。

2.2 〈同〉と〈他〉の形而上学的関係

主体に内在する他者性への否定的言及の理由として、〈同〉と〈他〉の形而上学的関係という構造の導入が考えられる。そこで、その関係の概要を以下に簡潔に示したい。

冒頭に確認した通り、他者との関係である形而上学的関係を記述することが、『全体性と無限』における研究の主題であった(TI, 32/56)。レヴィナスによれば、その第I部は、一連の研究の地平を示していることで予備的な性格を持っており(TI, 16/30)、形而上学的関係の概要が簡潔に語られているため、ここを参照する。

形而上学的関係とは、端的に言えば〈同〉と〈他〉が完全に分離しながらも、関係を有している状態である。それは、同じものと異なるものが、混ざり合うことで同一のものとなることなく、また、第三者の視点から比較可能ではない状態で関係している状態のことである。そのために、自我は自我として自らを自己同一化する存在であり、同じものとしてとどまっている必要がある(TI, 25/45)。

この自己同一化を達成するのが、主体と世界(糧)との関係(享受)である。この糧という、自分とは「他なるもの」との関係を経由して、主体は初めて自己同一化の運動を達成する¹⁷⁾。世界の介在しない完全な孤独を認めていた、「逃走について」などの初期思想とは異なり、『全体性と無限』において自己同一性は、世界との関係がなくては形成されないと捉えられているのである。

そして、他者とはその〈同〉としてとどまる自我に対して、〈他〉である存在者のことを指す。他であることとは、単に自我の否定という形式的なものではなく、共通性を持たず、その内実そのものが他者性であるという意味で、他であることを指す(TI, 28/50)。共通性を持ち、比較可能であれば、それは同じものになってしまう。

そこで、これらの定義に当てはまる〈同〉と〈他〉の関係は、俯瞰的に捉えられた二者関係ではなく、自我の一人称的視点において、〈他〉として現れる他者との関係ということになる。他者はまず客観的に主体から独立して存在するのではなく、自我に他者性(無限性)をもって現れてくるのが他者である(TI, 12/24)。そこでレヴィナスは、あくまでも『全体性と無限』は(一人称的な)現象学的手法に依拠していると述べている(TI, 13/27)¹⁸⁾。

この形而上学的関係を記述するという目的のために、中期レヴィナスは主体自身の他者性なるものについて、否定的に言及するほかなかったと考えられる。世界との関係を通じて、〈同〉が保たれていない限り、〈他〉はありえないからだ。

2.3 主体に内在する超越の動向 —— 欲望

『全体性と無限』において問題と思われるのが、以上のような形而上学的関係の厳密な定義によっては、〈同〉と〈他〉の出会いが、いかに可能となっているのかが明白ではないということだ。〈同〉は〈同〉として自己同定することにその本質があるならば、いかにそのエゴイズムから離脱し、他者と出会うに至ったのだろうか。おそらく、この点を説明するために、『時間と他者』では、主体に内在する他者性としての苦痛や死が必要とされていたのである。

従来、この問題に対しては、他者に開かれた構造が既に主体に存在するという立場（空間・構造論観点）¹⁹⁾や、後期思想をそれより以前の著作にも読みこみ、他者は既に主体の生成に先行するとする立場（他者の先行性）²⁰⁾、そして主体の生の生成と、他者との社会的関係は既に重なりあっているとする立場（生の多層性）²¹⁾などによって説明がなされてきた。これらの解釈はいずれもレヴィナスの哲学体系に沿い、適切な解釈ではある。

しかしながら、超越の条件を考えるとときに、扉や窓のようにすでに他者への通路を有する主体の構造論的説明²²⁾を用いることも可能ではあるが、外へ出られる構造が存在することは、実際に外へ出ることを意味はしない。他者と出会うのは、この具体的な《私》なのだから、具体的な《私》が具体的な他者と出会うための内的条件を、レヴィナスのテキストから探ることも必要であろう。《一人称の私がいかに他者との出会いを果たすのか》を探る本稿の問題意識に沿えば、やはり、主体から他者へという実際の内的な動きを捉える必要がある。

その分析の鍵となる概念が、「欲望 (désir)」である。これは主体の動きではあるが、他者を起点とすることにその特徴があり、欲求とは区別されている。中期思想において欲求は、主体を起点とし、主体の満足や幸福に向けて「他なるもの」を消費する営みである享受の推進力である²³⁾。レヴィナスによれば、欲望は欲求とは異なり、主体を起点として能動的に働かせられるものではなくて、「〈他なるもの〉の隔たり、他者性、外部性を聞き取る」(TI, 23/42、強調はレヴィナス)ものとして、その他者性を受け取るような動きに近い。他者が現れるとき、私はその他者の他者性を自分自身の思惑などを介さずに、受け取る段階が存在する。

しかし、この現象自体は私自身のうちで生じており、私は他者に欲望を抱いているともいえる。他者性を受け取るということと、他者へと向かうことが矛盾しないものとして両立する動きが、欲望である。そして、私は欲望を持つことで、その存在を無視できないという形で他者との関係へと向かってゆく。「絶対的欲望を介して〈同〉は他者との関わりに入る」(TI, 187/303)のである。

欲望を介して参入する主体と他者との実際の関係が、『全体性と無限』第Ⅲ部の第B章「顔と倫理」で詳細に論じられている、言語を介した関係であり、レヴィナスの思想の中でも特によく知られた議論である。しかしながら、本稿の主眼は、関係を形成するきっかけとなるような主体に内在する超越の動きにあるために、この欲望自体の条件を探ることとする²⁴⁾。

レヴィナスは次のように述べている。

遠隔が徹底的なものとなるのは、[...] 欲望が欲望をそそのものに当てもなく向かう場合、つまり、予期不可能な絶対的他者性に対して人が死へ赴くように向かう場合においてのみである。欲望は、欲望する存在が死をまぬがれず、そして欲望されたものが不可視の場合に、絶対的なものとなるのだ (TI, 22/41)。

欲望が絶対的なものとなることとは、ここでは主体と他者の遠隔が徹底的になることを意味する。つまり上の引用箇所からは、欲望が主体から明確に隔絶された他者に対するものであるという、欲望の前提条件には、欲望する主体が「死をまぬがれない (mortel)」ことと、欲望の対象が不可視であることという、2つの条件があると分かる。

確かに、欲望は他者を起点とする限りにおいて他者の条件も必要ではあるが、しかし同時に、欲望する主体に内在する条件も存在する。そして、それは初期思想と同じく、死が訪れることという身体の他者性、つまり《死にゆく身体》が関係するのであり、特に絶対的な他者に対して「死へ赴くようにして向かってゆく」ことが重要となっている。それでは、これはいかなる事態を示すのか。

3. 『全体性と無限』におけるままならない身体のゆくえ

3.1 死をまぬがれない者たちの形而上学的関係

本節では、欲望の条件として提示された「死をまぬがれないこと (形容詞 *mortel* ; 名詞 *mortalité*)」の議論を分析し、中期レヴィナス思想にも維持されている《身体のままならなさ》と、他者への超越の問題を整理する。しかしながら、2.1 で確認したように、この身体のままならなさは初期思想のように、主体の同一性を破壊する要素としては機能していないと推測される。

「死をまぬがれないこと」の概念は、『全体性と無限』第Ⅲ部の第 C 章「倫理的関係と時間」において詳細に論じられているため、この章を具体的な分析対象とする。

本章は、従来の研究においてもあまり定まった解釈は提出されていない章ではあるが、倫理的関係を、有限な時間性を備えた身体の間在する水準から捉え直す箇所といえる。特に、倫理的な言語的関係を問題にしていた第Ⅲ部第 B 章とは対比をなすようにして、身体的存在者同士による「戦争 (*guerre*)」も射程に入れ、形而上学的関係が単なる形式的・論理的意味に限定されないための具体的条件が探究されている。本節では、その一連の議論の概要を示す。

レヴィナスによれば、他者関係が形式的構造に尽きるなら、それは他者との分離が保たれた多元性や多様性を可能にはしない (TI, 242/393)。このとき、「多元性 (*pluralisme*)」や「多様性 (*multiplicité*)」は、主体と他者の絶対的な分離が保たれている様態そのもの、または、その分離した諸関係から成る社会全体などを指すと考えられ²⁵⁾、形而上学的関係を有する諸個人は、その多元性の諸項とも言い換えられている。

つまり、ここで問題となっているのは、形而上学的関係は〈同〉と〈他〉の分離の形式的・論理的意味によって示すだけでは、当の関係そのものの身分を裏切ってしまうということである。そこで、「分離した諸存在の間の関係が可能となるには、多様な諸項が部分的に独立しており、部分的に関係のうちに存在するのでなければならない」(TI, 246/399)とされる。ここから、他者関係は常に平和的なものではなく、戦争のように、互いが互いの影響下にある暴力的関係へと発展しうることが認められる(TI, 244/393)。〈同〉の形式的意味にこだわれば、多元性の諸項(諸個人)は内奥性(内面性)にとどまるだけだろう(*ibid.*)。

そして、互いに独立しつつも関係し合う諸存在が「時間的な存在」と呼ばれるものであり(TI, 247/400)、これが死をまぬがれない存在のことなのだ。死をまぬがれない存在とは、死を延期しながら生きている存在のことである。死からの延期が、その存在者の時間を成しているという意味で、死をまぬがれない存在は、時間的な存在でもある。

また、時間的な存在や、死をまぬがれない存在は「意志(*volonté*)」とも同義である。そして意志は意識とも言い換えられているが、『全体性と無限』第II部において意志や意識は、身体を基礎とするが身体のうちで身体性(物質性)から距離を取ったものであるという意味で「身体の身体性の延期」(TI, 179/292)と定義されていた。つまりレヴィナスにおいて、意志や意識など精神的なものは、それ自体が独立しているのではなく、身体を土台とする²⁰。そして、この意志が私の〈同〉性、自己同一性を確立している。本章でのレヴィナスの論点は、しかし、その〈同〉が既に他のものからの影響を被る、死をまぬがれない身体であるという点である。

意志は意志という身分を持ち、「自分のために」(*pour soi*)という身分を持つのであって、あらゆる攻撃に対して免疫を持っているべきであった[が、そうではなかった]。
[...] この意志の地位が、身体である(TI, 254/409)。

〈同〉の本質とも言える「自分のために」という意志のエゴイズムは、同時に意志が身体であることで、根源的に破壊されうる。そして、このことこそが本来の形而上学的関係を可能にするというのが、レヴィナスの主張である。

ここまで、形而上学的関係は、単に〈同〉と〈他〉が分離していることの形式的・論理的意味に回収されず、それは互いに関係し合う者同士の関係であることが論じられてきた。そして、そのような存在者は、具体的には物質という、始まりと終わり(有限性)を有する身体を基礎とした、時間的な存在、死をまぬがれない存在であることが分かった。

この主体の曖昧で矛盾したあり方が、他者関係における本来の多元性を可能にする。レヴィナスは結論部分で、多元性と平和を結びつけている(TI, 342/548)が、「戦争をすることが可能な者のみが、平和へと高まることができる」(TI, 245/397)と言われるように、互いに影響しあえる者同士のうちで、それでもその有限性に固執し傷つけ合うのではなく、分離しながら関係することが、平和な形而上学的関係なのである。

3.2 身体の物質的現実としての死

では、互いに物質的に関与しうる者同士の形而上学的関係はどのように成立しているのだろうか。ここで、より詳細に問題となっている要素を分類すると、(1) 身体の物質的現実（私は常に死にうること）、(2) そのことに他人が関係すること（他人が私を殺すこと）、そして(3) その他人のために死ぬこと、という、身体を基礎とした 3 つの点に分けられると思われる²⁷⁾。以下でまず(1)の点を確認する。(2)と(3)については、3.3で確認する。

意志において、自己への忠実さと、裏切りのうちで〈同〉の同一性が発揮されている[……。意志はこの裏切りと忠実さの二元性を、その死をまぬがれないことのうちに含んでおり、死をまぬがれないことは、身体性のうちに生起し、発揮される。[……。そこにおいて、多様性が、全体の部分への単なる可分性を描くのではないような存在は、死をまぬがれないことと身体性を必要としており、それらがなければ、帝国主義的な意志は全てを復元するか、死をまぬがれないわけでも不死でもない、物理的な身体として一つの塊を形成するだろう。死をまぬがれない意志における死の延期——つまり時間——は、他人との関係のうちに入った分離的な存在の実存の様式であり、そして現実である(TI, 257-258/415)。

意志の核心には、自分自身への忠実（物質性を延期して、「自分のために」という主体の同一性をなす側面）と裏切り（物質を通じて破壊されうるという側面）があるが、確かに、後者の主体に内在する他者性は、初期思想で言われていたように主体の同一性を破壊させるものではない。しかしながら、「死をまぬがれないこと」というままならない身体性が、「他人との関係のうちに入った分離的な存在の実存の様式」とされているように、初期思想と同様に他者関係の根本に措定されていることが分かる。

「死をまぬがれないこと」という死からの延期の時間性は、生きる身体が独自に有する切迫の時間性である。『時間と他者』では、この抱えきれない時間性があるからこそ、主体が実際の他者との関係へ導かれることが可能になっていた。『全体性と無限』においても、この時間性が主体をエゴイズムの充足だけには閉じず、他者関係のうちに入ることをすでに可能にしている。なぜなら、「死をまぬがれないこと」の時間性や物質性がなければ、そもそも主体は永遠の精神として君臨するか、または単なる物質の塊となってしまうからである。やはり、絶対的な他者がいきなり現れるのではなく、主体には身体の有限性という綻びがあるからこそ、形而上学的関係は築かれるといえる。

確かに、ここでは世界との具体的な関係を生きる主体が想定されているために、孤独な身体や、同一性の破壊は問題とはなっていない。しかしながら、「身体は健康と病気の間にある」(TI, 254/410)と、享受の次元のうちの健康で肯定的な生も、すでに身体の物質性に引き裂かれていることが示されている。『時間と他者』では、死の可能性に気づく前と、その後という、

死の自覚の有無の段階があったが、中期思想では生があらかじめ死との揺れの間にある点において、その哲学的主体は常にすでに他者関係へ開かれているといえる²⁸⁾。

一方で、『時間と他者』、『全体性と無限』両者における死、そして《死にゆく身体》の役割は、単なるエゴイズムにとどまらない有限性を主体に生起させているという点で共通している。ここにレヴィナスの身体の他者性に関する一貫した議論を見出せる。

3.3 私を殺しうる他者と、その他者のために死ぬこと

身体が物質であり、既に自分とは異なるものから影響をもたらされうる様態であることは、そこに他者が介入しうることを意味している。この、(2)の点が、すでに指摘されているように²⁹⁾『時間と他者』とは異なった、新たな論点である。死は主体にとって全くの他者性だが、その死の他者性と実際の他者の存在が重ね合わせられるようになるのだ。

死との関係である私の存在を心配する恐怖は、無の恐怖ではなく、暴力の恐怖なのだ（そしてまたその恐怖は〈他人〉の恐怖、絶対的に予見不可能なものへの恐怖へと延長される）（TI, 262/422）。

予測不可能な死は、それが事故や病気と同じく、「敵（ennemi）」としての他人によってもたらされる可能性があることから、私の死の恐怖は、その敵や殺人者としての他人へと延長される。

つまりレヴィナスはここで、物質的様態にとらわれて自分の死を案じ、恐怖する主体はまず私を殺しうる敵として他人と出会うとしている。確かに死は既に、主体がエゴイズムに閉じるのを防ぐ限界性を主体に与えてはいる。しかし、実際の主体と死の関係である、死への恐怖は、主体がまだ自分自身のみを軸として生きていることを意味するのであり、そのような状態では、他人は敵として出会われるのだ。

次に(3)の点である。この敵は私を一方的に狙う存在であり私の権能は及ばないが、しかし私と関係しており、私とその相手に向かって何かを成そうと「意欲すること（vouloir）」も可能である。

しかし、その意欲はエゴイズム的なものではなく、その重心の中心が欲求の自我とは一致しないような、欲望の本質へと流れてゆくような意欲であり、それはつまり〈他人〉のため（pour Autrui）欲望なのである（TI, 263/423、強調は引用者）。

ここでは、主体の「自分のため」の意欲や欲求から、「他人のため」の欲望への変化が記述されている。私を殺しうるものとして出会われた他人に対して、逆にその「他人のため」に意欲するとき、その意欲は欲望といえるのだ。

2.3 で、他者性を受け取ると同時に、他者へ向かうことが両立する動きが欲望であることを確認した。ここで論じられている欲望も、この定義に当てはまっている。この時の主体は「エゴイズムの重力」から解放され、その重力が他者の方へと移動していると表現されている（cf. TI, 263/423；267/430）。レヴィナスは、存在者の重心が他者の方にある状態のことを「善性（bonté）」と呼んでおり、具体的に言えば、「善性とは、私自身よりも他人の方が重要であるという仕方、存在のうちに身を置くこと」（TI, 277/443）である。他者と出会うということは、このような主体自身の根本的な変容を伴わずしてはありえない。主体が他者と出会い、その重心が他者の方にあるとき、主体の意欲は「他者のために」として生起する。上の引用では、このように他者との出会いの証となる、主体から他者への欲望の生起が示されているのだ。

主体の経験的世界においては、自身の物質的な有限性を通じて、物理的に私の死に関与する敵としての他者と出会う。しかし、そのように出会われた他者に、自分の死をものともせず、相手のために死ぬ可能性さえ有して相手と向き合うとき、欲望は生起していると言える。そうであるからこそ、レヴィナスにとって、主体の死は欲望の条件なのである。

しかし、そもそも主体はいかにして、敵としての他者のために欲望することができたのか。この点に関しては未だ飛躍があるだろう。そしてこれはおそらく、レヴィナスが、他者から主体に対する第一の言葉だと論じる「殺人を犯してはならない」という、他者の「顔（visage）」の呼び声（TI, 217/352）とも関係する。この言葉は今までの議論に沿えば、主体が、他者を主体として考える（重力が他者にある）ことで、自分自身をその他者にとっての殺人者だと考えていることを意味しているのではないだろうか。しかし、主体はいかにそのことに目覚めたのだろうか。つまり、「死の恐怖が殺人を犯すことの恐怖へと反転するとき」（TI, 273/439）は具体的にはどのように生起したのだろうか。共感とは区別されるが、主体と他者の死という比較不能な限界性を通じた倫理³⁰⁾なるものがそこにはあるのか。このことについては、今後の課題としたい。

おわりに

孤独から超越への流れを有するレヴィナスの初期思想において、超越の内的条件であった身体（body）の死や苦痛は、中期思想でも同様の位置を有している。しかしながら、中期思想では、完全な孤独状態の想定は放棄されており、主体は、常に既に単なる精神でも単なる塊でもなく、死にうる存在であるということを内的に感じ、生きていとされる。これは、主体に内在する矛盾や限界が、主体を孤独には閉じさせず、常に主体とは異なるものへと切り開いていることを意味する。

さらに、中期思想では新たな論点として、この物質の有限性を介して出会う、実際の敵としての他者に対し、しかしその「他者のために」死ぬようにして存在することが、倫理的関係の根本にあることが示された。初期から中期を通じて、存在者が《ままならない身体》のうちに生きており、それが特に、死へと向かいゆく、《死にゆく身体》であることが超越の条件

といえる。

本稿ではあえて、《一人称の私がいかに他者との出会いを果たすのか》という具体的な視点から、初期思想の議論を参照して、抽象度の増した中期思想を捉えなおすことで、レヴィナスによる倫理的関係の具体的な様相を確認することができたと思われる。

レヴィナスの倫理は、形而上の論理によってのみ完遂されるものではなく、肉体を有する人間のその物質性や暴力性に起因して駆動する。そして、その人間とは、今を生きる私たちであるとも言える。レヴィナスによれば1人の主体は、常に暴力と倫理的応答を他者になしうるのであるが、本稿からみえてくるのは、それらが矛盾ではなく、互いが互いの条件をなしている可能性である。

現代においてあらゆる暴力は、一般に、身体を有して傷つきうる存在にめがけてなされるが、その際には、互いの身体的特性（肌や髪の色、性的な特徴、障害の有無など）による、敵と味方の判断や、支配の対象としてよいかどうかなどの判断が介入することが多い。身体は常に具体的なものであり、特有の形象を有するのなら、レヴィナスの身体を介した他者との出会いの議論にも、これらの身体的特性が介入する余地はあるかもしれない。

そう考えるならば、殺人や、物理的・精神的・性的暴力が平然と行使される現代社会の中で、レヴィナスの哲学は、互いの身体性に基礎を置きつつも、その身体性に固執しない倫理的関係の生起について示唆を与えてくれるだろう。暴力は、確かにあらゆる文化的・歴史的要素抜きには語れない。しかし、その被害に対して倫理的な応答が果たされることを目指すなら、当の暴力の要因である、歴史や表象によって固定化された反応を突き崩すような、何か別の論理が必要となりうる。そこにこそ、レヴィナスの語る形而上学的な倫理の意義が見出されるのではないだろうか。本論では、特にその倫理的関係の成立において、主体自身の身体的な綻びが条件となっていることが示された。暴力がなされうるからこそ生起するとされる、レヴィナスによる倫理的応答の議論の現代的な発展可能性について、残された課題を含めて、さらなる分析を行いたい。

Notes

- 1) 本文では、レヴィナスの文章の引用や用語には「」を用いて示しているが、レヴィナスが頭文字を大文字にしている用語にのみ、原則的に〈〉の山括弧をつけている。そして、レヴィナス自身が使用しているわけではないが、本稿におけるキーワードや、括弧の中に入れる方が分かりやすい一文などは、二重山括弧《》とともに示している。
- 2) Emmanuel Levinas, *Totalité et infini. Essai sur l'extériorité* [1961], La Haye, Martinus Nijhoff, « Livre de Poche », 1990 (『全体性と無限』藤岡俊博訳、講談社学術文庫、2020年)。本文中には、丸括弧内に略号である TI とともに、原文のページ、翻訳のページの順に参考箇所を示している。なお、これ以降の本文中における訳文は、既存の邦訳を参照しつつ、原則的に拙訳を記載している。
- 3) レヴィナス哲学において「超越 (transcendence)」の語にはさまざまな哲学的意味が含意されている。例えば、小林嶺「エマニュエル・レヴィナスにおける『超越』の諸相」『早稲田大学大学院研究科紀要』第 67 号、2022 年、349-365 ページを参照のこと。しかし、本稿では、レヴィナスの用語法にこだわらず、主体が自分とは異なるもの、つまり他者と関係しているという至極単純な事態を表すものとして使用することとする。
- 4) Dominique Janicaud, *Le Tournant théologique de la phénoménologie française*, Paris, Éditions de l'Éclat, 1991 (『現代フランス現象学 その神学的転回』北村晋、本郷均、阿部文彦訳、文化書房博文社、1994年)。
- 5) Sara Ahmed, *Strange Encounters: Embodied Others in Post-Coloniality*, London; New York, Routledge, 2000, p. 137-160.
- 6) *Ibid.*
- 7) Emmanuel Levinas, *De l'évasion* [1935], Montpeiller, Fata Morgana, 1962 (『逃走論』『レヴィナス・コレクション』所収、合田正人編訳、ちくま学芸文庫、1999年、143-178 ページ)。本文中には、丸括弧内に略号である DE とともに、原文のページ、翻訳のページの順に参考箇所を示している。
- 8) Emmanuel Levinas, *Quelques réflexions sur la philosophie de l'hitlérisme* [1934], suivi d'un essai de Miguel Abensour, Paris, Payot & Rivages, « Livre de Poche », 1997 (『ヒトラー主義哲学に関する若干の考察』『レヴィナス・コレクション』所収、合田正人編訳、ちくま学芸文庫、1999年、91-107 ページ)。
- 9) *Ibid.*, p. 17 (同上、101 ページ)。
- 10) ディディエ・フランクは、ハイデガーの存在論的差異を、レヴィナスが身体の生起によって読み替えていると指摘しており、そのような意味の負荷がかかったレヴィナスによる身体概念を、「差異の身体」と呼んでいる。Didier Franck, *Dramatique des phénomènes*, Paris, PUF, 2001, p. 96 (『現象学を超えて』本郷均・米虫正日・河合孝昭・久保田淳訳、萌書房、2003年、103 ページ)。
- 11) Emmanuel Levinas, *De l'existence à l'existant* [1947], Paris, Vrin, « Livre de poche », 2004, p. 38 (『実存から実存者へ』西谷修訳、ちくま学芸文庫、2005年、53 ページ)。
- 12) Emmanuel Levinas, *Le temps et l'autre* [1948], Paris, PUF, onzième édition, « Livre de Poche », 2014 (『時間と他者』原田佳彦訳、法政大学出版局、1986年)。本文には丸括弧内に略号である TA とともに、原文のページ、翻訳のページの順に参考箇所を示している。
- 13) レヴィナスは、主体が取り込むことのできない、原則的に人間存在としての他者を示す「他者 (Autre)」や「他人 (Autrui ; autrui)」と、主体の消費の対象となる、世界の物質としての「他なるもの (autre)」を区別する。そのために、後者の他なるものを本文では「他なるもの」として記載する。
- 14) 本論では紙幅の都合上主題化できないが、レヴィナスにおける死の議論は、ハイデガーの『存在と時間』における死の議論を下地とし、それを深化させたことによって形成されているとも言える。マルク・クレボンによれば、レヴィナスは自身の死に関する思索に、身体的苦痛、死が他者からもたらされる可能性、そして他者のために死ぬ可能性、という3つの点を採用することで、ハイデガーの議論を深化させつつ、そこから差別化している。このいずれも本稿に関わる論点であり、のちに本論で触れている。Marc Creapon, « Vaincre la mort », Jacques Taminiaux (éd.), *Études phénoménologique*, n° 43-44, Belgique, Éditions Ousia, 2006, p. 43.
他に、レヴィナスとハイデガーの死の議論を比較分析する研究として、Cristian Ciocan, « Les repères d'une symétrie renversée: La phénoménologie de la mort entre Heidegger et Lévinas », *Emmanuel Levinas 100*, Zeta Books, 2007, p. 241-278、

高野浩之「レヴィナス『全体性と無限』における『私の死』について」『大学院研究年報』（中央大学文学研究科）第53号、2024年、343-352ページを参照のこと。本稿はこれらの分析に多くを負っている。

- 15) Cristian Ciocan, p. 261.
- 16) François-David Sebbah, *L'épreuve de la limite. Derrida, Henry, Levinas et la phénoménologie*, Paris, PUF, 2001, p. 184（『限界の試練 デリダ、アンリ、レヴィナスと現象学』合田正人訳、法政大学出版局、2013年、218ページ）。
- 17) この具体的な営為が、1.2でも触れた「享受」である。『全体性と無限』において享受は、飲食に代表されるように、生において「幸福（bonheur）」という状態を志向する主体が、欠乏や空腹をきっかけとして欲求を抱き、物質を主体のうちに取り込むという営みである。つまり享受は、基本的に主体を起点として、「他なるもの」へと向かい、さらに主体に巻き戻るといった動きである。
- 18) 『全体性と無限』で採用されている現象学的手法については、小手川正二郎『甦るレヴィナス 『全体性と無限』読解』水声社、2015年、43-52ページや、渡名喜庸哲『レヴィナスの企て 『全体性と無限』と「人間」の多層性』勁草書房、2021年、282-289ページを参照。
- 19) 例えば、藤岡俊博『レヴィナスと「場所」の倫理』東京大学出版局、2014年、174ページ以降、板部泰之「閉ざされた窓、開かれうる窓 〈自己閉塞〉論としてのレヴィナス読解」『レヴィナス研究』第6号、2024年、108-120ページを参照。
- 20) François-David Sebbah, *op. cit.*, p. 184-185（前掲書、218-219ページ）。
- 21) 例えば、石井雅巳・高井寛「倫理は分離を前提とする 『全体性と無限』における自我論と他者論の関係について」『レヴィナス研究』第1号、2019年、65-75ページや、渡名喜庸哲、前掲書、329ページ以降を参照。
- 22) 板部泰之、前掲論文、113-114ページ。
- 23) 欲求と欲望の違いに関して、以下の論考が簡潔に解説している。小手川正二郎「欲求（besoin）と欲望（désir）」レヴィナス協会編『レヴィナス読本』所収、法政大学出版局、2022年、48-50ページ。
- 24) 身体論からレヴィナスの哲学を捉え直す方針を採用している伊原木大祐も、そもそもなぜ倫理的関係において言語が必要となるのかを、身体的次元から捉え直す必要について言及している。伊原木大祐『レヴィナス 犠牲の身体』創文社、2010年、79ページ。
- 25) 他所で多元性は、俯瞰的眼差しから把握される数的多様性から区別されている（TI, 242/393）。数的な問題とは区別される形で、互いに分離した存在同士による社会関係のあり方を、レヴィナスは「社会の多元的様態」（TI, 229/370）と呼んでいる。
- 26) レヴィナスの哲学における、肉を通じた意識や時間の生成については、ベルンハルト・カスパーの論考に詳しい。Bernhard Casper, « La temporalisation de la chair », J.-L. Marion (éd.), *Positivité et transcendance : Emmanuel Lévinas. suivi de, Lévinas et la phénoménologie*, Paris, Presses universitaires de France, 2000, p. 165-180.
- 27) (2)と(3)の点に関しては、すでにクレボンが指摘していた。注14を参照。
- 28) ただし、それは既存の先行研究とは異なる意味においてである。従来の多くの先行研究では、主体の「自分のために」という自己形成と、他者との出会いや関係が直接的に結びつけられていた。そこでは、他者の現れと、その平和な関係の生起は自己同一的な主体にとって常に可能であることになるだろう。しかしながら本稿では、主体に対する他者の現れをそのまま両者の平和的な他者関係の成立に結びつけるのではなく、主体に内在する他者性がその関係の条件になるのだと分析を進めている。
- 29) Marc Creapon, *art. cit.*, p. 49.
- 30) Agata Zielinski, « Le visage, « corps expressif » ? Merleau-Ponty et Levinas interprètes du corps », Philippe Fontaine et Ari Simhon (éd.), *Emmanuel Levinas : phénoménologie, éthique, esthétique, herméneutique*, Argenteuil, Cercle herméneutique, 2007, p. 101.

本稿は日本学術振興会・特別研究員奨励費（研究課題番号：25KJ0869）の助成を受けたものである。

Le corps mortel et la transcendance

Du corps en tant que condition intérieure de la transcendance chez Lévinas de ses débuts à sa période intermédiaire

Mina TAKAI

Lévinas, aujourd'hui connu pour sa pensée de l'Autre, a thématisé l'altérité du corps dans les années 1930-1940. L'altérité du corps implique le corps comme matière, poids et obstacle qui fait souffrir le sujet. Selon le jeune Lévinas, elle est le début et la condition de la transcendance de soi : c'est par la perte de sa maîtrise, de sa virilité et de son héroïsme (égoïsme) face à l'approche de la mort dans la souffrance qu'il devient possible pour l'altérité de l'Autre d'apparaître au sujet (*Le temps et l'autre*, 1948).

Néanmoins, dans *Totalité et Infini*, Lévinas manifeste une attitude négative à l'égard de l'altérité du soi. La question est ici plutôt celle de l'altérité du l'Autre plutôt que l'altérité de soi et de son corps. Il faut donc que le sujet soit défini comme un être dont l'essence consiste à s'identifier soi-même, comme le « Même » en face de l'Autre. Cependant, l'altérité du corps y joue également un rôle spécifique.

Lévinas indique que le « désir » pour l'Autre devient absolu si l'être désirant est « mortel ». Bref, le désir, qui est le premier mouvement vers l'Autre, est lié à la mort du sujet. Selon Lévinas, l'existence humaine vit dans un corps qui possède la temporalité en tant qu'ajournement de la mort. De ce fait, il est déjà impossible pour le sujet de s'enfermer dans son égoïsme, « pour soi ». Sans la mortalité, la volonté serait impérialiste, et le corps physique, ni mortel ni immortel, ne serait qu'un simple bloc. De plus, la matérialité vulnérable du sujet implique qu'il peut avoir un rapport avec l'Autre à travers les attaques physiques. Il s'agit là de l'Autre en tant qu'ennemi. Mais en désirant « pour l'Autre », le sujet se transforme en sujet éthique. Autrement dit, la transcendance est possible si l'on va vers l'Autre en bravant la mort. Même dans sa pensée de la période intermédiaire, c'est l'altérité du corps qui constitue la condition de la transcendance chez Lévinas. L'analyse de l'altérité du corps chez ce penseur nous permet de redécouvrir l'éthique lévinassienne à partir d'un niveau concret.

Absence de politique, politique de l'absence

**essai sur les *Chroniques littéraires* de Maurice Blanchot
pendant la Seconde Guerre mondiale**

Ryotaro NAKATA

Résonances, n° 16

2025/11

pp. 35-46

ISSN 2435-8371

Absence de politique, politique de l'absence

essai sur les *Chroniques littéraires* de Maurice Blanchot pendant la Seconde Guerre mondiale

Ryotaro NAKATA

0. Introduction

Durant la Seconde Guerre mondiale, Maurice Blanchot (1907-2003) ne cesse d'écrire des chroniques littéraires dans le *Journal des débats politiques et littéraires*, d'avril 1941 à août 1944, tout en publiant ses deux premiers romans, *Thomas l'Obscur* (1941) et *Aminadab* (1942)¹. Après s'être engagé dans le journalisme politique d'extrême droite dans les années 1930 — notamment au sein de la « Jeune Droite », issue de l'*Action Française* — Blanchot se détourne de cette sphère et se consacre exclusivement à la littérature. Il ne publiera plus de texte politique jusqu'en 1958, lorsqu'il manifeste, aux côtés de Dionys Mascolo, un refus catégorique face à la politique du général de Gaulle.

Les chroniques littéraires de Blanchot publiées sous l'Occupation dans une rubrique intitulée *Chronique de la vie intellectuelle* ont suscité, ces dernières années, plusieurs lectures critiques, témoignant d'une diversité d'interprétations quant à leur portée². Si des divergences de vues existent, un consensus semble toutefois émerger : on y lit souvent l'affirmation d'une indifférence apparente à la situation politique. Ses articles se concentrent exclusivement sur des œuvres contemporaines sans jamais faire mention explicite du contexte historique ni soumettre ces œuvres à une évaluation idéologique, au sein d'un journal corrompu par l'idéologie de Vichy et même par celle des Nazis³. On y discerne également l'idée d'une évolution progressive du chroniqueur vers l'auteur que nous connaissons⁴ : ainsi, l'année 1941 serait encore marqué par une certaine distance, tandis que l'année 1944 porterait déjà les signes d'une posture plus affirmée⁵.

Toutefois, une telle lecture appelle des réserves. En premier lieu, l'idée d'une stricte indifférence politique mérite d'être nuancée : dans ses deux premiers articles d'avril 1941, Blanchot laisse échapper des allusions à la guerre. Ensuite, en décembre 1943, lors de la publication de *Faux pas*, Blanchot n'a jamais relégué son article d'avril 1941 à une simple chronique de circonstance, mais l'a élevé au rang de texte fondateur. Car l'un des articles les plus précoces de sa *Chronique*, publié le 23 avril 1941⁶ et consacré à *Vie de Mallarmé* d'Henri Mondor⁷, sera repris dans le recueil critique, où il inaugure la section « Digression sur la poésie ». Ce texte, intitulé « Le Silence de Mallarmé »⁸, y apparaît comme une pièce essentielle, au même titre que « Mallarmé et l'art du roman », publié en octobre 1943 et placé en ouverture de la section « Digression sur le roman ».

À partir de cette observation, il convient de revenir aux chroniques littéraires

d'avril 1941. Nous examinerons d'abord la manière dont Blanchot inaugure sa *Chronique* en formulant une stratégie de lecture. Nous verrons ensuite comment cette stratégie se manifeste dans son approche des œuvres contemporaines, en particulier dans sa lecture de *Vie de Mallarmé* (1941-1942). Et enfin, nous finirons en commentant sa conception de la critique cristallisée dans une prière d'insérer de *Faux pas* (1943). À travers ces trois moments de lecture, nous chercherons à mettre en évidence une forme critique cohérente, que nous proposons de nommer : politique de l'absence.

1. Stratégie de *Chronique de la vie intellectuelle*

Les peuples meurtris qui ne peuvent exprimer les sentiments qui les agitent se rejettent dans la lecture. Ils cherchent notamment dans les livres, même difficiles, une explication de ce qu'ils sont⁹).

C'est par ces mots que Blanchot inaugure, le 16 avril 1941, sa *Chronique de la vie intellectuelle*, suggérant d'emblée une corrélation entre l'expérience historique de la défaite et un surcroît d'intérêt pour la lecture. Il évoque une « étrange fièvre de connaissance » qui s'empare de la France après la débâcle, portée par les efforts des éditeurs désireux de répondre à cette soif de livres. En cela, Blanchot fait implicitement allusion à la situation du *Journal des débats* lui-même, contraint de se replier de Paris à Clermont-Ferrand dès le 15 juin 1940 pour survivre grâce à un financement du gouvernement Vichy. Dans les paragraphes suivants, il dresse un inventaire des publications récentes : récits de guerre, romans, biographies, anthologies poétiques, cahiers et traductions, offrant ainsi un panorama de la production littéraire contemporaine.

De prime abord, Blanchot s'inscrit dans le rôle traditionnel du chroniqueur. Cependant, après cinq paragraphes consacrés à cette revue d'ouvrages, la dernière partie du texte marque une rupture. Blanchot y dépasse le cadre d'une simple chronique littéraire, opérant un geste que l'on pourrait qualifier d'auto-référence, de négation de soi ou encore de rétraction.

Cette rapide revue laisse ignorer le vrai mouvement des esprits pendant ces mois si étranges. [...] Beaucoup d'écrivains, c'est un fait, se sont condamnés au silence, moins à cause des difficultés extérieures qu'ils pouvaient rencontrer qu'en raison d'une véritable épreuve de stérilité. Ils se sont tus et ils continuent à se taire parce qu'ils croient qu'ils n'ont plus rien à dire. Une nuit aride est tombée sur eux. Après de nombreuses années où ils s'agitent vainement, ils ont enfin entendu leur propre silence¹⁰).

Par ces lignes, Blanchot affirme que l'énumération des livres publiés ne suffit pas à rendre compte du véritable état de la vie intellectuelle. Il introduit ainsi une autre dimension

critique, qui ne se limite pas à opposer les œuvres publiées à une situation historique plus ou moins défavorable, mais qui engage une réflexion plus profonde : il ne s'agit pas tant de la censure ou des obstacles politiques extérieurs que d'une conscience intime de l'impuissance du langage après le désastre¹¹).

Cette réflexion trouve un écho dans le compte rendu, bref mais particulièrement élogieux, que Blanchot vient de consacrer à *Vie de Mallarmé* dans ce même article. Par un détour, il semble y faire allusion à l'état d'impuissance des écrivains contemporains. Il écrit ainsi :

C'est aujourd'hui pour l'esprit une facile mais agréable revanche que de contempler un homme qui, dans une complète et obscure solitude, sut dominer le monde par l'exercice pur d'un pouvoir d'expression absolu¹²).

L'interprétation du terme « revanche » demeure certes délicate, mais une chose apparaît clairement : Blanchot met en lumière une distance infranchissable entre le langage des écrivains après la défaite et celui de Mallarmé, tel que le révèle l'ouvrage de Mondor. Loin de pouvoir s'élever à la hauteur du « pouvoir d'expression absolu » qu'incarne Mallarmé, la parole littéraire sous l'Occupation semble marquée par une vacuité presque irrémédiable. La grandeur du poète ne fait que rendre plus sensible l'épuisement du langage contemporain¹³).

Cette question du silence prend une résonance particulière si l'on considère l'évolution de Blanchot lui-même. Dans les années trente, engagé dans le journalisme politique d'extrême droite, il croyait possible d'agir sur le monde par le langage, en particulier par le mot privilégié « révolution »¹⁴). Or, dans ce texte du 16 avril 1941, la posture a changé : l'idée d'une parole impuissante traverse ses premières chroniques. Cette réflexion s'affirme encore davantage dans l'article publié trois jours plus tard, le 19 avril 1941, sous le titre « Silence des écrivains ». Là encore, Blanchot médite sur « ces saisons au cours desquelles les livres n'ont paru que la frange d'un laborieux silence », et évoque l'artiste qui a « à toutes les époques difficiles, éprouvé des doutes sur lui-même qui le conduisent à la manifestation de son impuissance »¹⁵).

Pourtant, cette attitude ne relève ni de la résignation ni d'un pathos mélancolique. Elle s'inscrit plutôt dans une exigence intransigeante qui constitue, en soi, un véritable geste critique. Dès son premier article, Blanchot instaure un double discours : d'une part, rendre compte des œuvres contemporaines ; d'autre part, faire entendre un silence qui devient d'autant plus perceptible que les mots s'accumulent. Il ne s'agit pas seulement d'exposer des livres, mais de les accompagner dans leur propre retrait et de leur faire dire plus qu'ils ne disent¹⁶).

Cette stratégie critique se retrouvera dans toute l'œuvre future de Blanchot. On en percevra la structure dans sa lecture des *Fleurs de Tarbes* de Jean Paulhan, et elle s'affirmera

avec force dans la prière d'insérer de *Faux pas*¹⁷⁾. Mais pour mieux saisir son fonctionnement à ce stade initial, il convient d'examiner de plus près un texte clé de cette période : la lecture que Blanchot propose de *Vie de Mallarmé*.

2. Radicalisation de l'absence : du « génie » au « silence »

Le 14 juin 1940, quand l'on vit les régiments allemands occuper Paris, quelques-uns des hommes qui étaient restés, [...] cherchèrent à quel opium ils demanderaient l'atténuation, sans doute illusoire, de leur douleur.

Nous choisîmes d'étudier une existence que nul n'avait encore entrepris de conter et où l'on trouve, pour se réconcilier avec la vie et certains prestiges français, d'extraordinaires vertus¹⁸⁾.

Ainsi s'ouvre le premier volume de *Vie de Mallarmé*. Plus de 300 pages plus loin, au moment d'interrompre son récit par les dates : « Paris 15 juin — 15 décembre 1940 », Henri Mondor évoque une autre arrivée à Paris de Mallarmé en 1871, soulignant qu'« il n'a rien du héros résolu de Balzac qui défie la ville ou de l'un de ces avides conquérants »¹⁹⁾. Cette prudence oblique, presque audacieuse, témoigne d'une double posture : maintenir une indifférence presque complète à la politique tout en préservant une sphère indépendante et intransigeante de la pensée, au cœur même de l'Occupation. Il n'est pas difficile d'imaginer que cette attitude ait profondément impressionné Blanchot en 1941.

Dès le 23 avril 1941, Blanchot présente à ses lecteurs le premier volume de *Vie de Mallarmé*, tout juste paru, dans un article intitulé : « Le biographe connaît le "génie" et ignore l'"homme" ». Il y salue l'approche de Mondor, qui ne s'attarde pas sur des détails anecdotiques de l'existence du poète. Car selon Blanchot, la biographie traditionnelle tend trop souvent à masquer l'œuvre elle-même, en ramenant les poèmes à de simples repères biographiques à partir desquels le lecteur en vient à ne plus voir dans le sujet de la biographie qu'un homme quelconque. À l'inverse, la démarche de Mondor est saluée précisément parce qu'elle échappe à cette tentation : mobilisant des documents jusqu'alors inédits, elle donne accès à ce que Blanchot appelle le « génie » du poète, entendu comme « une merveilleuse vie intellectuelle »²⁰⁾. Blanchot l'exprime ainsi :

On admire les fruits visibles de son art, mais on ne cesse de songer aux opérations qui n'ont abouti à rien de visible et dont tout l'acte a été dans une absence impénétrable et pure. Là le poète a vraiment saisi l'absolu et il a espéré l'exprimer en quelques mots par un prodige de combinaisons soustraites au hasard²¹⁾.

Ce passage prolonge, tout en le déplaçant, le propos du premier article de la *Chronique*, dans lequel Blanchot évoquait déjà Mallarmé comme « un homme qui [...] sut dominer le monde

par l'exercice pur d'un pouvoir d'expression absolu ». Ici, toutefois, la réflexion gagne en profondeur : il ne s'agit plus seulement d'exalter la maîtrise du langage, mais de souligner le décalage entre l'œuvre visible et une opération poétique invisible, plus essentielle encore.

Lorsqu'il écrit que l'intérêt du livre de Mondor est « de nous laisser rêver à une sorte de biographie intellectuelle de Stéphane Mallarmé »²²⁾, c'est bien sûr Blanchot lui-même qui l'esquisse, à travers son commentaire²³⁾. On retrouve ici son geste critique, déjà esquissé dans sa première *Chronique* : celui d'un double discours, qui consiste à accompagner les paroles des autres pour faire entendre ce qu'elles ne disent pas explicitement — une absence, une dimension cachée de l'œuvre²⁴⁾.

Cependant, cette opération ne va pas sans susciter quelques doutes. Le passage de *Vie de Mallarmé* à la « vie intellectuelle » n'est-il pas trop rapide ? Cette lecture, aussi inventive soit-elle, n'est-elle pas aussi fragile ? Peut-on retrouver dans les lettres du poète, un « génie » insaisissable, une source invisible de l'œuvre ? Ces interrogations semblent d'autant plus légitimes que Blanchot lui-même, un an plus tard, dans un second article consacré à l'ouvrage de Mondor, infléchira cette lecture.

Le 1^{er} avril 1942, Blanchot annonce la parution du second volume de *Vie de Mallarmé*. Pourtant, le ton adopté diffère sensiblement de celui de l'année précédente. Certes, il se félicite que Mondor ait enfin achevé sa biographie, mais dès les premières lignes — qui ne figurent plus dans la version intégrale de *Faux pas* — transparait une forme de réserve²⁵⁾. Le lecteur attentif s'étonnera de lire que, face à cette biographie désormais complète, Blanchot affirme : « Hélas ! le livre est complet et l'essentiel lui manque. »²⁶⁾

Par cette formule, Blanchot semble revenir sur l'éloge qu'il avait formulé un an plus tôt²⁷⁾. Certes, la découverte du « silence de Mallarmé » repose sur une référence nouvelle : le second volume de *Vie de Mallarmé*, qui traite de la période postérieure à *Igitur* (1869), moment à partir duquel le poète parle moins directement de sa propre poésie. Dans cet article, Blanchot ne cite d'ailleurs plus qu'une seule lettre de Mallarmé datée d'après *Igitur*²⁸⁾ ; en revanche, il accorde une place notable aux témoignages rapportés par les proches du poète.

Mais il ne s'agit pas simplement d'une interruption de la parole mallarméenne (le second volume contient, en réalité, de nombreux propos du poète). L'achèvement de la biographie contraint plutôt Blanchot à infléchir sa lecture précédente, qui croyait percevoir la manifestation du « génie » de Mallarmé, et à reformuler cette intuition sous une modalité plus radicale : celle du retrait. Ainsi écrit-il :

Si le silence de Mallarmé ne pouvait d'aucune manière être rompu, s'il était naturel et raisonnable que l'homme qui avait le plus clairement organisé et suivi le cheminement de son esprit ne laissât de son effort qu'un témoignage énigmatique, couronné par quelques œuvres inimitables, il n'est pas moins important que ce silence, ce fait d'être resté silencieux au milieu de tant de paroles puisse apparaître comme le secret même

dont l'existence ne devait pas nous être révélée²⁹⁾.

Blanchot explicite ici ce qu'il entend par « silence de Mallarmé » : non pas une simple absence de discours, mais une manière singulière d'être d'un secret toujours retiré au cœur même de la profusion verbale. Ce silence désigne une structure où l'on est sans cesse attiré vers une présence de l'absence. Ce que Blanchot nommait auparavant « génie » — un travail réflexif, poétique et préparatoire qui rend possible l'œuvre — se voit désormais reconduit, mais sous la forme plus radicale du silence. Ces deux notions désignent, au fond, une même absence originaire, une même source invisible, constitutive de l'acte poétique³⁰⁾.

On retrouve ici un geste critique fondamental de Blanchot : accompagner les paroles jusque dans leur propre retrait, et prolonger leur mouvement jusqu'au point où elles laissent transparaître ce qu'elles ne peuvent dire. Ce mouvement critique entre en résonance avec une fameuse lecture déjà développée dans son premier recueil critique : *Comment la littérature est-elle possible ?* publié en février 1942. A partir de l'observation des « quelques mots de rétraction » de *Fleurs de Tarbes*³¹⁾, Blanchot en vient à discerner dans l'œuvre une « machine infernale » qui risque de mettre en question la littérature elle-même³²⁾ : il transforme radicalement une histoire des lettres décrite par Paulhan en un problème théorique de langage propre à la littérature, mais toujours en suivant la question mallarméenne : « Quelque chose comme les Lettres existe-t-il »³³⁾ ?

3. En guise de conclusion : pour un politique de l'absence

Chaque livre, un peu important, cache un secret qui le rend supérieur à ce qu'il peut être. C'est vers ce secret que le critique se dirige et c'est de lui qu'il s'éloigne, entraîné par le devoir de faire connaître à des lecteurs les ouvrages qui paraissent. Aussi sa marche est-elle piétinement et lourdeur. Et si elle se rapproche quelquefois du but, ce n'est que par un faux pas³⁴⁾.

Pour conclure notre étude, nous ajoutons quelques commentaires à ce passage tiré de la prière d'insérer de *Faux pas*. Pour comprendre sa conception de la critique, il faudrait revenir à ses premières chroniques littéraires : ainsi remonterons-nous de décembre 1943 à avril 1942, puis à avril 1941, voire jusqu'à janvier 1937. Ce texte peut être réduit à trois éléments fondamentaux : 1) un livre qui apparaît, porteur d'un secret caché ; 2) ce secret, qui rend un livre supérieur à ce qu'il manifeste ; 3) l'accès à ce secret par un faux pas.

1. Dès sa première *Chronique*, Blanchot s'était détourné d'une lecture immédiate des œuvres contemporaines pour chercher en elles un secret silencieux. Cette stratégie de lecture s'affirme sur une distinction entre livre et secret, homme et génie, être et absence. Comme nous l'avons vu, il tente de se rapprocher d'une vie intellectuelle qui demeure

radicalement absente, irréductible à toute formulation, mais qui se laisse deviner comme le centre même de l'œuvre.

2. Il serait vain de se limiter à ce qu'un livre donne à lire sans percevoir ce qui le dépasse, en particulier après le désastre qui a mis en péril non seulement la vie matérielle, mais aussi la vie intellectuelle. Blanchot ne se contente pas de répéter les paroles des autres : il les trahit, les infléchit, pour les orienter vers un nouvel horizon. Mais c'est une œuvre elle-même qui contient ce secret : en ce sens, le secret devient un critère de la critique³⁵). Cette exigence se retrouve dans l'article intitulé « Le jeune roman » (14 mai 1941) : « Les livres ne valent que par le livre supérieur qu'ils nous conduisent à imaginer »³⁶) ; mais aussi, plus tôt encore, dans « De la révolution à la littérature » (13 janvier 1937), où il affirmait que « la force d'opposition qui s'est exprimée dans l'œuvre même » se mesure à « son pouvoir d'appeler à l'existence de nouvelles œuvres, aussi fortes, plus fortes qu'elle, ou de déterminer une réalité supérieure »³⁷).

3. La logique du faux pas n'est pas difficile à comprendre, car sa lecture n'est pas toujours fidèle au texte lu. Mais il est important de préciser que cet accès à un secret se présente comme une erreur. Ce geste critique, qui se proclame faux, marque sa volonté de franchir les bornes du commentaire traditionnel, sa propre responsabilité de lecture ou même sa fierté comme critique. En outre il préfigure déjà ce que Blanchot développera plus tard dans *L'Espace littéraire* autour du regard d'Orphée : un regard qui tente de saisir l'invisible par l'« impatience » vouée à l'échec³⁸). Mais ce mouvement orphique est déjà esquissé, sous la figure de la « distraction », dans une scène centrale de *Thomas l'Obscur*, où l'héroïne révèle un secret à travers une vision inattendue³⁹).

C'est un fait que Blanchot a poursuivi son travail d'écriture, jusqu'aux abords de la Libération⁴⁰), au sein d'un journal vichyste⁴¹). On pourrait, comme l'a fait l'historien Philippe Burrin⁴²), y voir un « accommodement », opposé à la figure mythique d'une résistance silencieuse telle que la propose *Le Silence de la mer* de Vercors. Pourtant, comme nous l'avons vu, ce que Blanchot accomplit pendant la Seconde Guerre mondiale, c'est l'invention, en son nom propre, d'un espace critique silencieux, intransigeant et indépendant, à travers même ce que l'on nomme « accommodement ». Dans un journal vichyste, sa *Chronique* se fait lieu d'accompagnement des écritures contemporaines jusqu'à leurs secrets — un espace véritablement utopique : une digue pour préserver la vie intellectuelle. Ainsi, ce que l'on appelle trop facilement « absence de politique » dans ses chroniques mérite d'être requalifié. Il s'agit d'un politique de l'absence : une manière d'intervenir dans le monde par un détour de l'écriture où l'effacement devient l'ultime forme d'exigence critique face à l'Histoire.

Notes

- 1) Blanchot y a publié au total 173 articles et on retrouve 55 articles de *Journal des débats* dans le recueil critique nommé *Faux pas* publié en décembre 1943. Il est désormais devenu facile d'accéder aux autres textes seulement publiés dans le journal mais abandonnés, grâce à l'édition par Christophe Bident (*Chroniques littéraires du Journal des débats. Avril 1941-août 1944*, Christophe Bident (éd.), Paris, Gallimard, « NRF », 2007).
- 2) En ce qui concerne un article du 15 janvier 1942 traitant des *Notes pour comprendre le siècle* de Drieu La Rochelle, un article que Christophe Bident avait qualifié « de pure compromission » (Christophe Bident, *Maurice Blanchot-partenaire invisible*, Seyssel, Champ Vallon, 1998, p. 221), Leslie Hill a émis des réserves à ce jugement, voyant plus précisément l'attitude complexe de Blanchot contre l'œuvre de Drieu La Rochelle (Leslie Hill, « Le monde en ruines », *Cahiers Maurice Blanchot*, n° 1, mars 2011, p. 56-58).
- 3) En 1998, en commentant la *Chronique de la vie intellectuelle* jusqu'alors presque inconnue, Christophe Bident a mentionné tout d'abord cette indifférence : « Il faut voir l'élégance des chroniques de Blanchot côtoyer, avec une indifférence superbe, des articles ou des publicités propagandistes intolérables. » (Christophe Bident, *Maurice Blanchot-partenaire invisible*, op. cit., p. 181).
- 4) Cf. Michael Holland, « Blanchot et la sortie du nihilisme », *Cahiers Maurice Blanchot*, n° 1, op. cit., p. 65-78 (Michael Holland, *Avant dire. Essais sur Blanchot*, Paris, Hermann, « Le Bel Aujourd'hui », 2015, p. 223-248).
- 5) Par exemple, Gisèle Berkman écrit : « Le Blanchot de 1944, qui salue Michaux, n'est plus celui de 1941, qui manifestait une sorte d'élitisme littéraire dédaigneux et se réclamait, à mots couverts, d'une forme de nationalisme. » (Gisèle Berkman, « L'invention d'un geste critique », *Cahiers Maurice Blanchot*, n° 1, op. cit., p. 37). Dans une analyse globale et précise de Christophe Bident qui s'attache à l'utilisation du mot « orgueil », le même changement progressif de Blanchot est retracé. Pourtant en ce qui concerne l'article nommé « L'écrivain et le public » où Berkman retrouve « une sorte d'élitisme littéraire dédaigneux » et même « une forme de nationalisme », Christophe Bident conclut presque le contraire : s'est déjà esquissé le mouvement de pensée vers sa théorie littéraire qui consiste en « solitude » mais pas en « orgueil », au point que s'y lit « une position de résistance » (Christophe Bident, « De la chronique à la théorisation », *Associations des amis de Maurice Blanchot* (éd.), *Blanchot dans son siècle*, Lyon, Parangon/Vs, « Colloque de Cerisy », 2009, p. 104-117).
- 6) « Le Biographe connaît le "génie" et ignore l'"homme" », *Journal des débats*, 23 avril 1941, p. 3. Dans *Faux pas*, on retrouve aussi un article publié dans *Revue française des idées et des œuvres* en 1940, et des articles publiés dans *L'Insurgé* en 1937.
- 7) Henri Mondor, *Vie de Mallarmé*, t. I, Paris, Gallimard, 1941.
- 8) « Le Silence de Mallarmé » de *Faux pas* se compose de deux chroniques sur *Vie de Mallarmé* d'Henri Mondor (« Le Biographe connaît le "génie" et ignore l'"homme" », *Journal des débats*, art. cit. ; « Le Silence de Mallarmé », *Journal des débats*, 1^{er} avril 1942, p. 3).
- 9) *Chroniques littéraires du Journal des débats*, op. cit., p. 11.
- 10) *Ibid.*, p. 14-15.
- 11) On sait aujourd'hui qu'il y avait double censure dès l'autonomie 1940 : censure allemande et autocensure ; « Liste Otto » qui recense les livres interdits par la censure allemande, et « Convention de censure » qui « permet aux éditeurs de publier sous leur propre responsabilité », à l'exception « d'ouvrages qui pourraient déplaire à l'administration allemande » (Pascal Fouché, *L'Édition française sous l'Occupation*, Paris, Bibliothèque de Littérature française contemporaine de l'Université Paris 7, 1987, vol. I, p. 49). Ce que Blanchot a indiqué ici par ces mots « véritable épreuve de stérilité », nous semble proche de ce que l'on connaît comme « autocensure » : impuissance d'un discours privé de liberté.
- 12) *Chroniques littéraires du Journal des débats*, op. cit., p. 14.
- 13) Selon Leslie Hill, son admiration de l'ouvrage de Mondor et des poèmes de Mallarmé était à ce moment-là loin d'être neutre sur le plan politique, car le poète était attaqué par la droite vichyste et collaborationniste qui l'avait

- accusé d'« une déchéance animale, “onaniste”, “féminine”, ou “étrangère” (c'est-à-dire, encore une fois : juive) » (Leslie Hill, *Blanchot politique : Sur une réflexion jamais interrompue*, Genève, Furor, 2020, p. 310).
- 14) Comme l'a noté Laurent Jenny, dans un discours politique de Blanchot des années trente, « la révolution est inconcevable et imprévisible avant d'exister. Rien ne saurait l'expliquer ni la laisser pressentir. Elle est l'“impossible”. » En ce sens, « la révolution est une fiction pure » (Laurent Jenny, « La révolution selon Blanchot », *Je suis la révolution*, Paris, Belin, 2008, p. 120 et p. 127). Mais on peut dire aussi que tout son discours consistait en une croyance à une force absolue de langage contre le monde matériel.
 - 15) *Chroniques littéraires du Journal des débats*, op. cit., p. 16 et p. 17.
 - 16) À propos de l'importance du premier article qui inaugure sa chronique littéraire et manifeste son propre point de vue, souvenons-nous aussi de deux premiers articles très connus de Blanchot : « De la révolution à la littérature » du 13 janvier 1937 qui inaugure « Les lectures de *L'Insurgé* » dans *L'Insurgé* ; « La solitude essentielle » du janvier 1953 qui manifeste l'essentiel de sa « Recherche » dans *La Nouvelle NRF*.
 - 17) Il ne serait pas inexact d'entendre un lointain écho de cette stratégie critique dans un passage de « L'Absence de livre », son dernier texte consacré à Mallarmé : « Lire, ce serait lire dans le livre l'absence de livre, en conséquence la produire [...] » (Maurice Blanchot, *L'Entretien infini*, Paris, Gallimard, 1969, p. 626).
 - 18) Henri Mondor, *Vie de Mallarmé*, t. I, op. cit., p. 7.
 - 19) *Ibid.*, p. 318. On peut lire encore aux mêmes pages dans *Vie de Mallarmé. Édition complète en un volume* publiée en 1942, les dates et les phrases citées ici qui ont conclu le premier volume.
 - 20) Maurice Blanchot, *Faux pas*, Paris, Gallimard, 1943, p. 118.
 - 21) *Ibid.*
 - 22) *Ibid.*
 - 23) Nous ajoutons ici un témoignage éclairant de Roger Laporte sur le commentaire de Blanchot qui nous laisse rêver à « une sorte de biographie intellectuelle de Stéphane Mallarmé » : « L'ouvrage de Henri Mondor justifie-t-il une telle méditation ? Ce n'est pas sûr, et plus d'une fois on éprouve une certaine déception lorsqu'on passe d'un commentaire de Blanchot au livre lui-même [...]. Lorsque Blanchot commente un livre ne pense-t-il pas à un autre livre, encore non écrit ? », Roger Laporte, « Une passion », Roger Laporte et Bernard Noël, *Deux lectures de Maurice Blanchot*, Saint Clément de Rivière, Fata morgana, 1973, p. 67.
 - 24) Que dès le début de sa carrière Blanchot s'intéressait à la biographie de Mallarmé, n'est pas anecdotique, d'autant que, pour lui, la littérature ne cesse de se doubler de la vie : comme l'a dit clairement Christophe Bident dans son essai récent, « Elle [littérature] joue le double jeu déjà décrit par Blanchot dans *L'Espace littéraire*, qui récusait l'auteur dès son préambule pour ne s'intéresser qu'à l'écrivain (la « solitude essentielle » n'est même pas celle de l'auteur : elle qualifie l'œuvre) mais qui, à chaque page, faisait revenir la vie, car ce qui était commenté, c'était le journal de Kafka, non ses romans, la correspondance de Mallarmé et l'autofiction de Rilke, non leurs poésies. » Christophe Bident, *La vie versée dans les récits (vers le nom de Blanchot)*, Genève, Furor, 2021, p. 12.
 - 25) « Jusqu'à la publication de son livre, on ne possédait pas de biographie véritable de Mallarmé et l'on était presque heureux de n'en pas connaître. Il semblait que le vrai destin d'un tel poète fût de ne pas exister en dehors de sa poésie [...]. Le travail de M. Henri Mondor met fin à cette rêverie. [...] M. Henri Mondor aurait peut-être pu écrire la biographie de Mallarmé avec rien. » Maurice Blanchot, « Le Silence de Mallarmé », *Journal des débats*, art. cit., p. 3.
 - 26) Maurice Blanchot, *Faux pas*, op. cit., p. 121.
 - 27) Yun Sun Limet formule ainsi ce changement, sinon un approfondissement : « D'un article à l'autre, on passe du témoignage par le génie sur son entreprise poétique au silence qui se fait sur elle. Et ce silence crée le secret même d'une œuvre. » Yun Sun Limet, *Maurice Blanchot Critique*, Paris, Éditions de la Différence, 2010, p. 55.
 - 28) « Lettre à Paul Verlaine, 16 Novembre 1885 », Henri Mondor, *Vie de Mallarmé*, op. cit., p. 469-470. Nous reverrons cette lettre au début de l'article intitulé « Mallarmé et l'art du roman » (Maurice Blanchot, *Faux pas*, op. cit., p. 189-196).
 - 29) Maurice Blanchot, *Faux pas*, op. cit., p. 125.

- 30) Après la guerre, on reverra plus développé ce thème de « silence » au cœur de l'écriture dans l'article intitulé « Le Paradoxe d'Aytré » (Maurice Blanchot, *La Part du feu*, Paris, Gallimard, 1949, p. 66-78).
- 31) Maurice Blanchot, *Comment la littérature est-elle possible ?* Paris, José Corti, 1942, p. 17 (Maurice Blanchot, *Faux pas*, *op. cit.*, p. 94).
- 32) « Ne parle-t-il [Paulhan] pas d'autre chose que ce qu'il était censé dire ? Y aurait-il, cachée dans ses réfutations et ses arguments, une sorte de machine infernale qui, invisible aujourd'hui, éclatera un jour, bouleversant les lettres et en rendant l'usage impossible ? » Maurice Blanchot, *Comment la littérature est-elle possible ? op. cit.*, p. 10. On ne voit plus ce passage dans la version de *Faux pas*. En ce qui concerne sa lecture de *Fleurs de Tarbes*, voir, entre autres, Gisèle Berkman « L'expérience-Paulhan : un art d'écrire en temps de guerre », *La question juive de Maurice Blanchot*, Bordeaux, Le Bord de l'eau, 2023, p. 63-83.
- 33) Stéphane Mallarmé, « La Musique et les Lettres », *Œuvres complètes*, t. II, Bertrand Marchal (éd.), Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la pléiade », 2003, p. 65.
- 34) Prière d'insérer de *Faux pas* (1943), reproduite dans *Cahiers de l'Herne Blanchot*, L'Herne, septembre, 2014, p. 247.
- 35) Comme l'a noté Leslie Hill, Blanchot dit le contraire au sujet de *Notes pour comprendre le siècle* de Drieu La Rochelle : l'auteur « ne semble pas avoir voulu glisser sous son livre un livre secret qui en serait tout différent et qui garderait la clé de sa pensée véritable ; il ne répugne pas à exprimer en quelques mots faciles l'explication difficile de l'histoire » *Chroniques littéraires du Journal des débats*, *op. cit.*, p. 122 (Leslie Hill, « Le monde en ruines », *art. cit.*, p. 59).
- 36) Maurice Blanchot, *Faux pas*, *op. cit.*, p. 212.
- 37) Maurice Blanchot, « De la révolution à la littérature », *L'Insurgé*, n° 1, 13 janvier 1937, p. 3.
- 38) Maurice Blanchot, *L'Espace littéraire*, Paris, Gallimard, [1955], « Folio essais », 1988, p. 225-232.
- 39) Maurice Blanchot, *Thomas l'Obscur*, Paris, Gallimard, [1941], réédition, 2005, p. 287-288. On peut retrouver la même scène dans une version précédente écrite dans les années trente (Maurice Blanchot, *Thomas le solitaire*, Leslie Hill et Philippe Lynes (éd.), Paris, Kimé, « Corpus Blanchot », 2022, p. 229-230).
- 40) La dernière chronique littéraire de Blanchot est publiée 17 août 1944, c'est-à-dire, la veille de la disparition de *Journal des débats*, une semaine avant la Libération de Paris.
- 41) Michel Surya a repris récemment « des articles ou des publicités propagandistes intolérables » dans lesquels ses chroniques littéraires étaient publiés comme l'a dit déjà Christophe Bident en 1998 (Michel Surya, *À plus forte raison Maurice Blanchot, 1940-1944*, Paris, Hermann, 2021). On a mis aussi en doute l'attitude politique de Blanchot quand on a retrouvé son nom comme directeur d'*Aux écoutes* au mois de juillet 1940, alors que l'hebdomadaire est favorable à l'instauration du régime de Vichy (David Uhrig, « Blanchot, du « non-conformisme » au maréchalisme », *Lignes*, n° 43, « Les politiques de Maurice Blanchot 1930-1993 », mars 2014, p. 122-139).
- 42) Philippe Burrin, *La France à l'heure allemande 1940-1944*, Paris, Seuil, 1995, p. 329-345.

Cette recherche a été menée avec le soutien de la Japan Society for the Promotion of Science (JSPS), dans le cadre du programme KAKENHI — Grant-in-Aid for JSPS Fellows (numéro de projet JP24KJ0845).

政治の不在、不在の政治

第二次世界大戦下のモーリス・ブランショの文芸時評についての試論

中田峻太郎

モーリス・ブランショが第二次世界大戦中にヴィシー派の新聞『ジュルナル・デ・デバ』にて発表していた文芸時評が近年刊行されたことによって注目が集まったが、その読解はおおむね次の二点において同じことを述べていると言える。第一に、その時評には同時代の政治状況への言及が見られないということ、第二に、1941年から1944年にかけて徐々に、我々が知る批評家ブランショが形成されていく、言い換えれば、1941年はいまだ未発達であるが、1943年や1944年のテキストは戦後に比しても十分に成熟した批評である、という評価が下されるのである。

しかしながら、そうした見解に対しては留保をつける必要がある。というのも、まず1941年4月の文芸時評においては同時代の政治状況への言及が見られるからである。そしてさらに見逃せないのは、1941年4月23日に発表された文芸時評が、1943年12月に刊行された評論集『踏みはずし』のきわめて重要な部分に収録されているということである。こうした事実から、われわれは今一度1941年4月のテキストに立ち戻る必要があると考える。

1941年4月16日、連載の第一回目において、ブランショは敗戦後のフランスにおける旺盛な出版活動を紹介しているが、記事の最後でブランショは、そうした紹介だけでは同時代の知的状況を理解するには不十分であると宣言する。ブランショがそこで問題にするのは、実際に紡がれた言葉ではなく、敗戦後の言語活動を蝕む作家の内なる不毛さである。言葉が紡がれるほどに、そこでは逆に、深い無力感や沈黙が感知される、そのような状況こそブランショが証言する敗戦後のフランスの知的状況である。逆にそこでブランショが行なっている読解の戦略に注目するとすれば、それは、言葉のなかにその深い沈黙を読み取る戦略、存在から不在へと横滑りしていく読解の戦略である。

では、そのような状況で、いかなる言語活動を志向するのかという問題が出てくるが、そのときにブランショが参照するのがアンリ・モンドールによる伝記『マラルメの生涯』(1941-1942)である。ブランショは、この著作にはマラルメの「天才」、「知的生命」が現れているのだと読者に強く訴えかける。ブランショによれば、この伝記からは、詩人の実存的な人生でも実際の詩作品でもない、彼の知的活動の源泉となっているような、不可視で特権的な審級を感取できるという。このような読解は、連載の第一回目での、存在から不在への読解戦略に連なるものである。

しかし1年後に再びこの伝記を取り上げるとき、ブランショが述べるのは、そのような「天才」の不在である。しかしテキストを注意深く検討すると、ブランショは、伝記に現れる詩人の「天才」という考えを捨てたのではなく、それをより徹底的な不在の次元において捉え直していることがわかる。伝記に収録された数多の言葉の中でなお詩人が「沈黙」しているとブランショが書くとき、彼は、詩人の「天才」を、どんな言葉（存在）にも還元されない特権的な審級（不在）として肯定しているのである。

最後に、評論集『踏みはずし』の「乞御高評」に結実するブランショの批評理念を、1941年や30年代の時評テキストを参照しながら検討することで、ブランショがキャリアのかなり早い段階から、後年と同様の厳密な批評的姿勢を打ち出していたことを確認する。そうすることによって戦時下、プロパガンダに染まった新聞の中で、自律的で厳格な批評の空間を創出し、維持し続けたブランショの文芸時評の射程が理解できるだろう。

思考の試金石としての言語

シモーヌ・ヴェイユ『哲学 ル・ピュイ講義 1931-1932』書評

谷虹陽

『Résonances』第16号

2025年11月発行

47-52 ページ

ISSN 2435-8371

思考の試金石としての言語

シモーヌ・ヴェイユ『哲学 ル・ピュイ講義 1931-1932』書評

谷虹陽

フランスを拠点とする「国際シモーヌ・ヴェイユ学会 (Association pour l'étude de la pensée de Simone Weil)」は、創設から約半世紀に亘り、最新の研究動向を伝え合うコロックを実施してきた。会長を務めるロベール・シュナヴィエに招かれた筆者が 2024 年 10 月末に参加したコロックは、古代ローマの遺跡が残る南仏アルルにて開催された。その会場には書籍ブースが設置され、学会誌『カイエ・シモーヌ・ヴェイユ』を筆頭に関連図書が陳列されていたが、中でも印象深い一冊が目に入った。その表紙には、自信ありげな表情を浮かべながら腕組みをした一人の哲学者の姿と、「Philosophie. Les cours du Puy 1931-1932」という文字が映っていた。

昨年の秋に出版された『哲学 ル・ピュイ講義 1931-1932』¹⁾ (以下『ル・ピュイ講義』) は、哲学者シモーヌ・ヴェイユ (1909-1943) の生徒による講義ノートである。20 世紀の初頭にパリで生まれたこの哲学者は、^{エコール・ノルマル}高等師範学校を修了して^{アグレガシオン}哲学教授資格を取得後、いくつかのリセの哲学学級で授業を受け持つことになる。初年度の赴任地となったのは、フランス南東のル・ピュイの女子高等学校だった。初回の授業は 1931 年 10 月 2 日に始まり、この年度の生徒は 15 名だったという²⁾。そこにいた生徒の Yvette Argaud の講義ノートに、もう一人の生徒 Elisabeth Chanel の講義ノートを補完し、さらに校訂と注釈を加えることで生まれたのが本書である。

本稿では、この新たな講義ノートの内容を手短に紹介し (第一節)、シモーヌ・ヴェイユ研究史における刊行の意義を吟味するとともに (第二節)、哲学を教えるとはいかなる営みなのかを少しばかり考えてみたい (第三節)。

I

本書は三部から構成されている。第一部は「心理学」であり、最も多くの紙幅が割かれている箇所である。当時の心理学者たちの様々な学説が紹介されており、本能、意志、想像、記憶、注意といった多様なテーマが取り上げられている。心理学者のウィリアム・ジェイムズ、フランス反省哲学の文脈ではメヌ・ド・ビランやジュール・ラニョー、伝統的な哲学者としてはデカルトやスピノザ、ベルクソンへの言及が目立つ。

第二部は「論理学」であり、論理的思考とは何かが説かれている箇所だと言えるだろう。無矛盾律や因果律のような古典的テーマに加えて、幾何学から天文学、物理学なども扱われ、数学的思考や科学的思考が問われている。また人文科学として、オーギュスト・コントの実証主義やカール・マルクスの史的唯物論が解説されていることも興味深い。

第三部は「道徳」であり、その他と比較すると紙幅としては最も短い箇所である。現代社会

の分析が主題となっており、労働、国家、法権利、植民地、連帯、職業といった多岐に渡るテーマが取り上げられている。シモーヌ・ヴェイユがリセで生徒たちに哲学を教える傍らで、労働者たちと連帯して組合運動に身を捧げていたことを、ここで思い起こしてもよいだろう。

また本書に付された巻末付録には、少なからぬ貴重な資料が含まれている。例えば、シモーヌ・ヴェイユ自身による講義メモが所収されており、この新たな講義ノートと比較しながら読むことができる。さらに、ル・ピュイの四人の生徒たちが第二次世界大戦後に、夭折した哲学教師の姿を振り返った証言も再録されている。服装にはまったく無頓着だった「若き優秀な哲学教授資格者」（p. 252）は、失業者たちの支援に勤しみながら、生徒たちにも真摯に向き合っていたようだ。

II

本書の出版に至るまでの詳細は、シモーヌ・ヴェイユ研究の第一人者である Emmanuel Gabellieri と編纂者の Aviad Heifetz が説明しているが（p. 7-16）、それよりもここで問うてみたいのは、本書が 2024 年に刊行されたことの意義である。

そこで問題となってくるのが、すでに 1959 年に出版されていたシモーヌ・ヴェイユの講義ノート『哲学講義』（*Leçons de philosophie*）である。この哲学教師はル・ピュイで一年を過ごしたのち、何度も異動を繰り返しており、1933 年から 1934 年にはフランス中東部ロアンヌの女子高等学校に着任していた³⁾。この『哲学講義』は、ロアンヌの生徒の一人だったアンヌ・レーノーの講義ノートであり、哲学教師としてのシモーヌ・ヴェイユの姿を伝えるものとして読まれてきた。さらに言えば、どの年度の講義も、当時のフランス政府が指定したカリキュラムに沿って行われていたため、当然ながら新旧の講義ノートには重複する内容が少なくない。

以上の事実を踏まえながら二つの講義ノートと比較するとき、いくつかの重要な事柄が浮かび上がってくる。

第一に、アンヌ・レーノー自身が強調しているように⁴⁾、講義ノート『哲学講義』は厳密に言えば、シモーヌ・ヴェイユ自身の著作ではない。例えば、実際の講義では、声の抑揚などが断定を和らげたりすることがあるが、急いで筆記せざるを得ないノートでは細かいニュアンスが抜け落ちてしまう。要するに、シモーヌ・ヴェイユの意図がどこまで反映されているのかを判断するのは困難である。だが、二つの講義ノートと比較してその異同を調べることで、あるテーマをめぐってどんな説明や注釈が施されていたのかを、より正確に把握することが可能となった。

第二に、新たな講義ノートの方には、この数十年に及ぶシモーヌ・ヴェイユ研究の成果を大いに反映した、きわめて詳細な注記が施されている。この哲学教師は講義のなかで数多くの著述家たちに言及しているが、典拠となっているテキストを特定するのは容易ではない。だが新たな講義ノートの方は、旧講義録とは異なって、その出典の正確な跡付けにも取り組んでいる。この作業においては、とりわけ 1988 年に始まった『シモーヌ・ヴェイユ全集』（*Œuvres*

complètes de Simone Weil) の公刊が果たした寄与が少なくなかっただろう。このガリマール社による全集版は、これまで不明だった文献学的事実を次々と明らかにし、ほとんど出典を明記することのないシモーヌ・ヴェイユが参照していたテキストを特定した点で画期的であり、その成果は『ル・ピュイ講義』にも惜しみなく活かされている。

第三に、この講義ノートには「哲学」と題された序論に相当するテキストが所収されており、旧講義録には見当たらない記述も含まれている。そこにあるのは、哲学とは何かを、リセで学ぶ生徒たちに伝えようとする教師の姿である。シモーヌ・ヴェイユは自身の講義メモのなかで、簡潔な表現を用いて次のように定式化を試みている。すなわち、哲学によって私たちが学ぶのは「言語をうまく使うこと (*bien user du langage*)」 (p. 228) である。意外なことに、この哲学教師が言語そのものを主題的に論じたテキストは数少なく、この新たな資料を手掛かりに知りうることもあるはずである。

新たな講義ノートを読むための筋道はいくつもあるだろうが、以下では一つの方向を探ってみたい。すなわち、シモーヌ・ヴェイユにとって哲学を教えるとはいかなる営みだったのかを、言語という観点から考えるというものである。

III

哲学とは何かという問いに対して、シモーヌ・ヴェイユはこう答えている。「哲学は一般的な学問とはまったく異なるひとつの学問である」 (p. 19)。この哲学教師は「汝自身を知れ (*Connais-toi toi-même*)」という文言に立ち返りながら考察を進めてゆく。ソクラテスによって言い伝えられるこの古代ギリシアの碑文は、認識対象よりも認識主体の方に目を向けるという、一種の視点の転換を求めている——そこに哲学という学問の固有性がある。人間が「自分自身を知る」というのは、人間は何を望み、何をなすべきかを知ることであり、それは人間が何を目的として生きるのかという道徳的な問いにも通じてゆく。

また、この哲学教師はリセの生徒たちに対して、哲学的反省が目指すものを簡潔に説明していたようだ。それは一種の価値判断であり、「善い」や「悪い」といった言葉について思考することである。そこで問題となるのが、思考が形成されてゆく過程であり、人間の思考それ自体についての反省的思考である。さらに、そこには言語も関わってくる。というのも、「哲学は一例として、言語を上手く使えるよう規則づける」 (p. 27) からだ。

ある言葉を吟味することは、西洋哲学——少なくとも、プラトンの哲学——の出発点となってきた。人々が「正しい」と呼んでいるものは、実のところ何を表しているのか。それは本当に「正しいもの」なのか。そもそも「正しさ」とは何なのか。こうした哲学的な問いかけは、まさに『国家』といったプラトンの対話篇のなかで反復されてきた。いかにして言葉を用いるのかという問いは、古代より多くの哲学者たちが取り組んできたものであり、20 世紀の哲学教師シモーヌ・ヴェイユをそこに加えることもできるだろう。

だが、これまでの刊行著作を読むかぎり、言語とは何かという問いが正面から取り上げられ

ることはほとんどなく、例外的に『哲学講義』のなかで少し扱われている程度に過ぎなかった。この観点からすると、『ル・ピュイ講義』を参照することにはいかなる重要性があるのか。二つの講義ノートと比較するとき、この哲学教師がどのような言語論を展開していたのかがより精緻に把握できるようになる。

ロアンヌでの講義ノートによると、シモーヌ・ヴェイユは「言語とは優れて人間的なものである」と指摘しつつ、さらに言語を二つの類型に区別している⁵⁾。一方には、自然的・個体的な言語があり、それはある意味では動物的であり、諸々の情動を伝達するものだ。他方には、人為的・社会的な言語があり、思考の伝達を目的としている。例えば、間投詞や擬音語は自然的であり、書かれた言語は人為的である。

また続く箇所では、ある種の社会的な視点から、言語が思考に及ぼしうる影響が分析されている。この哲学教師はいくつかの語彙を例示しながら、言語はそれ自体がすでに思考を内包していると指摘する⁶⁾。例を挙げると、「頭」を意味する«tête»という語には、「思考力」や「司令塔」といった複数の意味があり、また「所有」を意味する«propriété»という語が、「ひとが所持しているもの」と「本質的な特性」という二つの意味を備えているように、ある語句は異なる事象に繋がりを持たせうる。さらに言えば、ある言葉には一つの社会の見方が映し出されており、こうした意味の結びつきを介して、私たちの思考は否応なしに言語から一定の影響を受けている。

このように旧講義ノートにおいては、言語は二つの類型によって整理されており、また言語の社会的性格が強調されている。だが、この『哲学講義』だけに依拠するかぎり、なぜシモーヌ・ヴェイユがそうした考えに至ったのか、より正確に言えば、どんな学説に立脚していたのかが判然としない。他方で、『ル・ピュイ講義』を読んでゆくと、似たような論点が取り上げられているだけでなく、どんな文献に基づいて講義が実施されていたのかが明白になってくる。

新たな講義ノートにおいて、シモーヌ・ヴェイユは言語の起源を問うなかで、やはり言語を二つの類型に区別している。一方には、自然な言語があり、それは叫びや身振りという形で現れてくる。例えば、子どもが泣くのはどこかが悪いということを表している。他方で、言語は自然的なものから意志的なものになるにつれて、より正確に思考を表現できるようになる。その典型となるのが「書かれた散文」(p. 148)である。

さらに問題となってくるのが言語の社会的特徴であり、言語には「本質的に集団的な性質(nature essentiellement collective)」(p. 149)がある。つまり、言語をつうじて社会は個人に影響を及ぼすのであり、言語には個人に還元されない固有の性質が備わっているということだ——デュルケームが「社会的事実」と呼ぶものをここで想起することもできるだろう⁷⁾。

シモーヌ・ヴェイユは複数の意味を持つ語句を挙げて、そこに人間精神が結晶化された固有の思考を見出している。例えば、「人間性」を意味する«humanité»という語には、「人間という種(espèce humaine)」の他に、「人徳(virtu)」や「教養(culture)」といった複数の意味がある。あるいは「人民」を意味する«peuple»という語には、「国民全体」と「国民のうちで労働する人々」という二つの意味が含まれる⁸⁾。そして、言語はそれ自体が人間の思考と

切り離すことができず、シモーヌ・ヴェイユの表現を用いるならば、「私たちは何世紀にも渡る人間の思考という型のなかに、私たちの思考を注ぎ込んでいる」(p. 150)。

以上のように、ある語には一つの社会の文化が反映されており、その語を使用するや否や、個人の思考は社会からの影響を免れえない。こうした言語の社会的特徴が示しているのは、シモーヌ・ヴェイユの表現を借りて言えば、「言語は思考に先立っている (le langage précède la pensée)」(p. 150)ということだ。言語はこのように社会的かつ人間的なものであり、また人間の思考を深く規定するものであるからこそ、それは「真の思考の試金石 (pierre de touche de la véritable pensée)」(p. 149)となるのである。

この哲学教師が講義のなかで示そうとしていたのは、真の思考を形づくるには言語をうまく使いこなさなければならないということだった。シモーヌ・ヴェイユにとって哲学を教えるとは、個別の対象——心理学における諸問題や、現代社会における諸課題——を媒介に、そして何よりも言語の使用をつうじて、思考それ自体を鍛え上げてゆくことにあったのだろう。

無論、このような言語論はシモーヌ・ヴェイユのまったくの独創だったわけではなく、他の著述家にも負うところが少なくなかったようだ。事実、この講義ノートではオーギュスト・コントが明確に参照されている。この社会学の創始者による『実証政治体系』(1851-1854 年)には言語を主題とする章があり、そこでは言語の形式が、音楽、詩から散文へと展開するという歴史観が提示されている他、ある言葉が異なる意味を結びつけるという事態が、「humanité」、「peuple」、「propriété」といった語句を例に指摘されている⁹⁾。言語の起源やその特徴をめぐって、20 世紀の哲学教師がこの箇所を紹介していた可能性も考えられるだろう。

このように新たな講義ノートに依拠することで、シモーヌ・ヴェイユがどんなテキストに基づいて哲学講義を行っていたのかが浮き彫りになってきた。すでに出版されていた旧講義ノートだけでは読みとりづらかった文献学的事実は、今後の研究によって益々明らかになってゆくはずだ。本稿で取り上げた問題の他にも、一例を挙げるならば、意志、記憶、注意といったテーマを介して、フランス反省哲学やベルクソン哲学、実験心理学がこの哲学教師に及ぼした影響を明らかにすることも可能だろう。

『哲学 ル・ピュイ講義 1931-1932』には、シモーヌ・ヴェイユ研究の数十年来の成果が反映されていると同時に、その分野の専門家だけに読み継がれるには惜しいほどの豊かさがある(詳細な注釈、かつての生徒たちの証言、当時の哲学カリキュラムなど)。そして講義ノートから浮かび上がってくるのは、哲学の果たすべき役割が何であるかを問い、真の思考とは何であり、言語をうまく扱うとはどういうことなのかを、リセの哲学学級の生徒たちに伝えようとする一人の哲学教師の姿である。

Notes

- 1) Simone Weil, *Philosophie. Les cours du Puy 1931-1932*, d'après les notes prises par Yvette Argaud, complétées par celles d'Elisabeth Chanel, établies et annotées par Elinore Darzi, Aviad Heifetz, Gabriël Maes, préface d'Emmanuel Gabellieri, Paris, Édition de l'éclat, 2024. 以下、この著作から引用する場合、本文中にページ数のみ表記する。
- 2) Simone Pétrement, *La vie de Simone Weil*, Paris, Fayard, 1973, p. 136-137 (シモーン・ベトルマン『詳伝シモーン・ヴェイユ I』杉山毅訳、勁草書房、1978 年、143-144 ページ)。
- 3) シモーン・ヴェイユは 1931 年から 1937 年の間に、ル・ピュイ、オセール、ロアンヌ、ブルジュ、サンカンタンへと渡り、五つのリセに勤務している。鈴木順子『シモーン・ヴェイユ 「歓び」の思想』藤原書店、2023 年、108-114 ページを参照。
- 4) *Leçons de philosophie*, transcrites et présentées par Anne Reynaud-Guérithault, Paris, Plon, 1959, p. 9 (『ヴェーユの哲学講義』渡辺一民・川村孝則訳、ちくま学芸文庫、13 ページ)。
- 5) *Ibid.*, p. 66-67 (同書、85-86 ページ)。
- 6) *Ibid.*, p. 80 (同書、103 ページ)。
- 7) *Les règles de la méthode sociologique*, Paris, PUF, « Quadrige », 1986 [1937] (『社会学的方法の規準』菊谷和宏訳、講談社、2018 年を参照)。デュルケームは『哲学講義』と『ル・ピュイ講義』のいずれにおいても取り上げられており、後者には「沸騰 (effervescence)」に関する言及があることから (p. 81)、『宗教生活の基本形態』は少なくとも参照されていたと思われる。「職業の道徳的機能」と題する学生時代に執筆された小論では、『社会分業論』と『自殺論』が扱われている。Cf. *Œuvres complètes de Simone Weil*, tome I, Paris, Gallimard, 1988, p. 263 (『シモーン・ヴェイユ選集 I』富原真弓訳、みすず書房、2012 年、229 ページ)。
- 8) ジョルジョ・アガンベンによると、「人民」という概念には両義性があり、政治的主体を表すと同時に、貧民や恵まれぬ者たち、政治的に排除された者たちも表している。例えば、「フランス人民」と言う政治体としての市民の総体を指し、「民衆出身の人間」という意味では下層階級の成員を指す。「人民と何か?」『目的のない手段 政治についての覚え書き』所収、高桑和巳訳、以文社、2024 年、35-43 ページを参照。
- 9) Auguste Comte, *Système de politique positive ou Traité de sociologie*, tome II, Édition présentée et annotée par Michel Bourdieu et Emmanuel d'Hombres, Paris, Hermann, 2022 [1852], p. 176-177, 191.

ある知られざる論争について

イヴ・シェムラ (Yves Chemla)
浅野千咲 訳

『Résonances』第16号
2025年11月発行
53-86 ページ
ISSN 2435-8371

ある知られざる論争について¹⁾

イヴ・シェムラ (Yves Chemla)

浅野千咲 訳

1958 年の早春、後に三十年間続く独裁政権として知られるようになるデュヴァリエ政権が誕生して約半年後、ハイチの日刊紙 *La Nouvelliste* 上にて類を見ない論争が展開した。ジャック・ステファン・アレクシ (Jacques Stephen Alexis, 1922-1961) とルネ・ドゥペストル (René Dépestre, 1926-) ²⁾ という、20 世紀中盤のハイチ文学を代表する二人の作家の間で交わされた苛烈な応酬は、当初の論点から徐々に肥大し、互いに互いをデマゴグと言い張り、相手の作品を文字って罵り合い、ついには人格を貶める中傷へと発展した。国内の左派系知識人と芸術家への信頼を失墜させたと評されるこの論争から三年後、秘密裏にハイチへ上陸したアレクシは、デュヴァリエ政権直轄の秘密警察に拘束され、そのまま帰らぬ人となる。

ハイチという国では〈文〉と〈政〉が密接に連動してきた。特に 20 世紀中盤には、ハイチ文学のなかで最も広く読まれている小説の一つ、『朝露の主たち』 (*Gouverneurs de la rosée*, 1944) ³⁾ の作者ジャック・ルーマンがハイチ共産党の創設者でもあったように、『おじさんはかく語りき』 (*Ainsi parla l'oncle*, 1928) の作者ジャン・プリスマルが大使や国務長官を歴任した政治家でもあったように、あるいはフランソワ・デュヴァリエが民族学者、文筆家でもあったように。いかなる評価が与えられるにせよ、筆を執る者には〈行動者〉や〈革命者〉の役割を担うことが期待され、その逆も然りであった。それが人々の〈灯台〉となるハイチの知識人像だったのである ⁴⁾。20 世紀後半になると武器ではなく、ペンのみを選択する世代が登場してくるが、本稿での中心人物アレクシとドゥペストルは、〈灯台〉となる知識人像を引き受けた最後の世代に属すると言えるだろう。だからこそ両者の間の舌戦には、あらゆる対抗勢力を退けて台頭する独裁政権を前にして、シュルレアリスムやネグリチュードを始めとする〈外〉の思想を前にして、ハイチの知識人に突きつけられた、政治的とも文学的とも言える問いが結晶化されている。

本稿で翻訳するのは、仏語圏文学はおろかハイチ文学史、運動史のなかでもほとんど言及されてこなかったこの論争を具に追った唯一の論考である。原文は 1995 年にヴェネツィア・カフスカリ大学のポストコロニアル理論家、批評家を中心に創刊され、現在でも主にフランス語圏、英語圏、ポルトガル語圏文学に関する論文が掲載される機関誌 *Il Tolomeo* に収められている。著者イヴ・シェムラ氏はパリ第五大学で教鞭をとった仏語圏文学者であり、1995 年以来更新されていなかったハイチ文学史を編み直した人物である。氏の日本語で読める論考として、渡邊芳敬氏により邦訳された「ハイチ文学、叫びの極限にあるエクリチュール」が『現代思想』のクレオール特集号 (1997 年) に掲載されている。

翻訳の詳細の要領は次の通りである。原文で現在時制が用いられている場合でも過去時制で

訳出するなど、時制については原文への忠実さよりも日本語にした際の分かりやすさを優先した。固有名詞等、訳者の判断で強調した箇所は一重山括弧〈〉、原文中で一重引用符が用いられている箇所は二重山括弧《》、原文で二重引用符が用いられている箇所は一重鍵括弧「」、訳者が補った部分は、原注においても一重角括弧[]で示す。原文中で二次資料として引用されている文献の著者名については、ファーストネームはアルファベット一文字で省略し、姓名のみをカタカナで表記する（例、M・セオネ）。本文中に割注として出典を示す場合には、アルファベット表記のままとする。原注には本文中の各該当箇所に通し番号を赤色で付し、訳注を付す場合には青色で付す。原文中、大文字で強調されている箇所には傍点を付した。

- 1) 本稿では以下を翻訳する。Yves Chemla, « D'une obscure polémique », *Il Tolomeo*, vol. 21, 2019, p. 69-101. なお原文冒頭頁にある論文概略は訳出しなかった。
- 2) ルネ・ドゥペストルという氏名の表記については、原注3および訳注2で説明している。
- 3) 2020年に松井裕史氏による邦訳が発表されている。ジャック・ルーマン、松井裕史訳『朝露の主たち』作品社、二〇二〇年。他方、プリズ=マルスの著作についてはまだ日本語に翻訳されていないため、ここでは訳者による訳題を付している。
- 4) アレクシやドゥペストルに後続する世代の詩人フランケチエンヌによる証言として、次の文献の130頁を参照されたい。Frankétienne et Bernard Hadjadj, *Frankétienne : l'universel haïtien : Entretiens*, Paris, Riveneuve, 2012.

はじめに

1958年のポルトープランス^{1*}において、ジャック・ステファン・アレクシとルネ・ドゥペストル^{2*}の間で激論が交わされ、それは互いの憎悪を露わにするような対立へと発展した。これは一見すると意外なことに思われる、というのも、二人は闘争を共にした盟友であり、1946年には時のレスコー政権に対する国民の不满を結晶化したような若者たちのグループに属し、抗議活動を通じてその政権を打倒した立役者だったのである。この闘争により彼らは名声を得て、若きリーダー（当時それぞれ24歳と22歳であった）として認められる存在となったものの、同志であるジェラルド・ブロンクールの国外追放に続く形で、ハイチをあとにすることとなる。亡命中の二人はそれぞれ異なる道を歩んだとはいえ、フランスの、そして各国の共産運動に寄り添う立場をとった。ここにつけ加えるなら、二人の激しい論争は書き言葉の文学史には記録されていない。にもかかわらず、この件について話を持ち出すと、複数の関係者が、論争は確かにあった、しかも苛烈なものであったと証言するのである。その出来事はL-F・ホフマン¹⁾の編んだ精緻な年表には記載されていない。M・セオネによるアレクシの伝記のなかでも触れられていない。ただしセオネはアレクシとドゥペストルの間に生じた確執については詳述しており、1961年のハイチ上陸の際アレクシが消息を絶ったことにまつわる陰惨な噂についても言及している。しかしその語り口ははっきりしたものではない。ソ連およびキューバの

政治機関は、数多くの対立が生じ、展望を共に打ち立てることが困難であるとして、ハイチ人亡命者全体に対してあまり良い印象を抱いていなかったようだ、というのである。他方で、ソ連と共産党統治下の中国が交戦寸前の緊張状態にあったとき、アレクシは主に中国の指導層に支持されていた。その中国側からの働きかけによって何かが起こった可能性も否定できない。さらにアレクシはキューバの政権とはあまり関係が良好でなく、特にエベルト・パディージャ裁判以降は関係が悪化していたため、キューバ当局が詩人アレクシのイメージを徹底的に傷つけようとして、こうした噂が広められたのだとしてもおかしくはない。

アレクシとドゥペストルの論争はその背景を踏まえて捉えるべきだろう。この論争はハイチの歴史に痕跡を残しており、数十年を経た今日でもなお、その反響が残っている。本稿執筆に際して、二つの資料に依拠して分析を行った。第一に、1956年から1958年にかけて日刊紙『ル・ヌヴェリスト』^{3*}に掲載された記事を保存したデジタルアーカイブ。これは〈カリブ海デジタルライブラリー〉(www.dloc.com)^{4*}で閲覧可能である。もっとも電子化の質が良くないため、ところどころに読みづらさがあることは否めない。それでもこの新聞を観察する、あるいはざっと目を通してみるだけでも、非常に強い印象を受けることがある。たとえば、数多く掲載されている広告にみられるように、ハイチの人々の外見上の特徴の多様さがきわめてよく映し出されていたりする。たとえば媒体自体と、ディスクール⁵の基盤となる世界の描き出し方と、個々の記事が伝えんとする現実との間にある乖離が印象的であり、奇妙にすら映るのである。これを初見の所感とした上で、問題となる1958年2月5日から3月22日にかけて掲載されていた記事を見ていくことにしよう。

第二のソースは、2007年に発表されたL.ペアンの著作『ハイチの歴史、腐敗の政治経済—マクートによる〈野蛮化〉とその帰結(1957-1990年)』²⁾の第四巻とする。

1. 論争の背景

論争の端緒は、1956年のあの会議で採られた決定にある。アリウン・ジョップが音頭をとった〈第一回黒人作家芸術家会議〉の際に創設された〈アフリカ文化協会〉(SAC)^{5*}は、1958年にユネスコから諮問機関として認定され、アフリカ、米国、ハイチの三か所に支部が置かれた。『プレザンス・アフリケーヌ』が事実上その連絡会となり、各支部は実験的試みの場であり、思索の場であり、交流の場と見なされた。SACは、1959年にローマで開催された〈第二回黒人作家・芸術家会議〉や、各国の独立後に行われた複数のフェスティバルを企画、運営した。たとえば、1966年にダカルで開かれた第一回黒人芸術祭や、同じ芸術祭の1969年アルジェ大会もSACの主催であった。こうしたイベントに併せて組織された討論会や継続的な活動を通じて、人権や経済的権利、女性の地位、開発途上国の問題への対策といった諸課題が議題にのぼり、話し合われていく。そして月日と世代が移り変わるなか、当時の社会が一党制を始めとする独立後の政治体制や、新たな形で残存してしまった植民地主義的支配のありを受けるとつれて、こうした議論には調整や修正が加えられていったのである。あたらしい

世界を見据え、構築するこのような試みにおいて、過去、先駆的に脱植民地化を果たし、勝利の身振りをとってみせたことから、ハイチの思想は重要な位置を占める可能性があったことは認めざるを得ない。しかしその仕掛けは国内の情勢不安のために動きを止めてしまった。加えて 1957 年、ハイチ当局が国を閉ざしたこともこの〈停止〉の大きな要因であった。[ハイチの] 知識人が生み出すものには[海外の情勢との] 乖離が生じるようになり、彼らの努力はデュヴァリエ政権への抵抗を模索し、そこにむけて行動することへと向けられていくのであった。

ポルトープランスでは、1958 年 2 月から 3 月末にかけての一か月間に、SAC ハイチ支部の設立をめぐる論争が激化していく。アレクシは組織設立の中心的人物になると期待されていたようである。しかし実際には、設立会議に招かれはしたものの、その会議を主導したのはドゥペストル³⁾だったのである。そこから両者は自身の正当性を主張するようになる。二人の争いは SAC の枠をはみ出し、政治的要素を孕みつつ、オピニオンリーダーたる者の社会的位置づけそのものに関わる問題へと発展していくのであった。

その結果は悲慘なものとなる。左派系知識人および芸術家への信用の大部分が、罵倒にまで発展していくこの応酬のなかで粉々に砕かれてしまうのである。しかし報道から、とりわけ『ル・ヌヴェリスト』紙から垣間見えるのは、この論争がまったく何も残さず終わるわけではないということだ。陰に隠れて、しかし目に見える形で、この論争は、ハイチの新たな権力者、フランソワ・デュヴァリエに利を生んでいたのである。

2. ヨーロッパ時代のアレクシ

論争のなかでは 1946 年から 1957 年までの出来事についても言及されているため、ここで一度その時代に立ち返ってみるのがよいだろう。この時期は失望の時代であった。アレクシのもとではその失望は時に穏やかな形をとるのだが、ドゥペストルにとっては非常に鋭いものであったようだ。論争が起こった時期は、自らのけじめをつける時期でもあったのである。

レスコー大統領が亡命してすぐ、アレクシを書記長とする〈公共救済委員会〉を有した〈統一民主戦線〉が結成されたものの、軍部が権力を掌握してしまった。その直後、アレクシはハイチ共産党に加入する。1946 年 5 月、デュマルセ・エスティメが大統領に選出される。アレクシはこれに抗議し、投獄された。しばらくして釈放されると、医学の最終試験を経て博士号を取得し、ヨーロッパへ渡った。アレクシ 24 歳のときである。パリでは複数の病院で研修を受けた。〈青年共産会〉にてフランソワーズ・モンテと出会い、1949 年に結婚。1951 年には娘フロランスが誕生する。アレクシは〈フランス共産党〉が主催、あるいは提携する会合に参加し、1949 年には〈第一回平和支持者会〉、1953 年にはブカレスト青年祭に出席した。徐々にアレクシは、先達であるジャック・ルーマンが成したような、ネットワークを構築していったのである。まず築かれたのは友人関係や政治方面での人間関係であり、このつながりはアレクシの政治的、地政学的な経歴において重要な役割を果たすこととなる。加えて左派の作家、共産党に近い、もしくは黨員である作家や、カリブ海や南米で名を馳せていた作家との出会いも

果たしている。たとえばエメ・セゼール、ニコラス・ギジェン、パブロ・ネルーダ、ジョルジュ・アマード、さらにレオポルド・セダール・サンゴールやルイ・アラゴンの名が挙がる。アレクシは1954年に小説『太陽将軍』^{6*}を書き上げ、同作は1955年にすぐさまガリマール社から出版された。しかし1954年末にアレクシがパリを離れる。キューバ、メキシコ、グアテマラを回った後、1955年2月にポルトープランスに帰還する。そこで『音楽家たる樹々』の執筆に取り掛かるのだった。また、ポルトープランス総合病院にも勤務した。しかし同病院で大臣職にある人物が死亡したことを受け投獄され⁴⁾（この事件から〈無遠慮な医者アレクシ〉の伝説が生まれた）、その後ハイチその後ハイチ医師会から圧力がかかったことにより釈放されるが、この一件により自身が監視対象となったことを知ることとなる。アレクシは18か月間ハイチに滞在したが、その間の活動は精力的であった。まず、ハイチらしい日常生活との再接続に努めた。M.セオネの引用する、1955年11月に発表された「ジャック・ルノワールへの公開書簡」においてアレクシは、ドゥペストルが現実のハイチとの関係を回復しようとしなかったことを咎めている。

私たちが、過酷な亡命生活によってルネ・ドゥペストル何某という人物を己の生き生きとした源泉から切り離されているのだと言うとき、実のところ念頭にあるのはまさにそのことなのだ。それによって彼は形式の問題に迷い込んでしまう。自分をハイチらしい日常生活と繋いでくれる「へその緒」が今や極めて細く、もはや切断されていると言っても過言ではないのだから……。 (Séonnet 1983 : 63)

アレクシは数多くの集会に参加しつつ、小説『音楽家たる樹々』の執筆を続ける。知識人としてのこの作業はハイチ文化の構造をなす敵対関係の諸相を問うものであり、同時にそれはこの小説の心臓部となっている。

1956年になるとアレクシはパリにおり、フランソワーズとの離婚手続きをとっていた。このパリ滞在の初期には、ソルボンヌ大学デカルト講堂で三日間に亘って開催された〈第一回黒人世界作家芸術家会議〉に参加している。同会議においてアレクシは『ハイチの民の驚異的^{レアリスム}ム・メルヴェイユへの緒言』を発表した。これは史上初めて現代ハイチ文化を理論化したものであり、その影響力は六十年以上経たなお保たれている。1957年5月までアレクシはフランスに滞在し、主にムーラン・ダンデ^{7*}に住まって執筆に励んだ。『音楽家たる樹々』が1957年に完成、出版されると、アレクシは小説『まばたきの間に』の執筆に取り掛かった。この原稿は恐らく、『星へのロマンセロ』と共にガリマール社に提出されたのだろう。3月16日付の『ル・ヌヴェリスト』紙には、『レ・レットル・フランセーズ』誌に掲載されたソフィ・ブリュイユへのインタビューが転載された。「ジャック・アレクシの近刊書」と題されたこの記事では、「1941年から1944年を描き出す一大物語」である『音楽家たる樹々』と、「ポルトープランスで《働く》娼婦の物語」である『両目に咲く薔薇の花』の刊行が告知されている。勿論『まばたきの間に』も言及されている。また、現在行方が分からなくなっている作品についても触れら

れている。失われた二つの戯曲、そのうち片方はクレオール語で書かれた『ロシニョールはトゲバンレイシを食った』^{8*}である。加えて、1929年の恐慌を米国の富豪一家の視点から描く小説も言及されている。

1957年5月25日、アレクシがポルトープランスに到着する。

アレクシはヨーロッパじゅうを巡ってきた。コミュニストやスターリニストの活動家と交流し、ハンガリーの動乱についてはアラゴンの側に立ち、唯物史観に基づいて自身の思想を築いてきたのである。5月25日、この日のポルトープランスは大混乱に陥っていた。ジェラルド・ピエール＝シャルルは次のように記録している。「残されていた課題は、《^{レアリスム・メルヴェイユ}驚異的レアリスム》と、実践からのみ生まれる、この国の物事や人々に対する真の認識の間に結びつきを作る困難な作業であった」（Séonnet 1983 : 139）。デュヴァリエを前にして、政治勢力は分散した。1957年9月22日、デュヴァリエがハイチ大統領に選出される。その後は多くの政治裁判が開かれた。1958年2月26日、アレクシは『ル・ヌヴェリスト』紙上に記事を発表し、友人ルネ・ドゥペストルに対する批判を述べている。[ここから]この苛烈な論争が始まり、辛辣な口調で展開されていくのである。この論争は1958年3月22日まで『ル・ヌヴェリスト』紙面上で続けられる。同年12月31日、アレクシはアンドレ・ルメルと結婚する。

1959年7月、ソビエト作家同盟第三十回大会への招待を受け、アレクシはモスクワへ向かう。

3. ドゥペストル最初の遍歴

アレクシ同様、1946年に軍事政権に脅かされ、投獄もされたルネ・ドゥペストルは、同年8月にデュマルセ・エスティメが大統領に選出された後、ハイチを後にする。ハイチ政府奨学生としてパリに渡り、文学と政治学を専攻する。1944年に邂逅を果たしていたセゼールにパリで迎えられ、彼の紹介でフランス共産党の幹部らと面会した。ドゥペストルはネグリチュードの運動や脱植民地化運動に関心を持つようになっていた。1949年にはハンガリー系のエディット・ゴンボスと結婚している。政治活動を理由にフランスから追放されたドゥペストルは、チェコスロヴァキアへと渡る。夫妻は、スターリニストによって牛耳られた国での現実を目の当たりにし、衝撃を受けた。とりわけ、エディット・ドゥペストルがイスラエルの手の者であると非難され、反ユダヤ主義の標的となったことが強烈であった。スラーンスキーとその同胞が裁かれた裁判は、社会主義諸国の現実、なかでも自らの子どもを食らうような体質を夫妻に突きつけた。ドゥペストルの自伝『優しさよこんばんは』^{9*}に収録されている『ユマニテ』紙の記者ピエール・クルタードとの1951年の対談は、このような現実はすでに周知のもの、共有されていたものであったことを物語っている。

ジョゼフ・ジサリオノヴィッチ・ジュガシヴリ、我々の知を導くあの最高指導者は、クレムリンの悪党中の大悪党だ！彼と最も親しい共犯者、ラヴレンチ・パヴロヴィッチ・ベリ

ヤは、斧を手にした海賊のような極悪人だ！揃いも揃って彼らは歴史上もっとも凶悪な海賊団の一味なのだよ。[…] 君たち夫妻が被った試練など、ヴェネツィアのカーニヴァルでの恋物語みたいなものさ。今この瞬間にも、シベリアの雪が、魂と肉体が絶望する冬の只中で、憎しみと軽蔑の吹雪となって、何万もの無実の人々の孤独と悲慘と嘆きの上に渦巻いていることに比べたら。(Dépestre 2018 : 66)

1951 年、ブラジル・バイア出身のジョルジュ・アマードがルネを秘書として雇う。1952 年には、キューバの詩人ニコラス・ギジェンの招待を受け、夫妻でキューバへの渡航を試みる。しかしハイチ当局によって共産党工作員と告発され、夫妻は逮捕、そして国外へと追放された。今度の追放先はイタリアであったが、ビザは発行されなかった。彼らはフランスへと密入国し、ジェラルド・ブロンクール⁵⁾の手引きで身を隠したものの、再び国外追放となり、その後は共産党の指示によりオーストリアへ渡り、同年 12 月に開催された〈世界平和会議〉の準備に参加することとなった。その後夫妻はアルゼンチンへと渡り、さらにジョルジュ・アマードの招きでサンパウロへ出向き、そこで約二年間、地下活動をつづけながら暮らす。その間、ルネは軍事訓練を受ける。1955 年、サンゴールが介入したことによりビザが下りたため、夫妻はフランスへと戻る。ちょうどその頃、ブラジルでは 1964 年のクーデターと軍事独裁へとつながる動きが始まりつつあり、ドゥペストル夫妻にも不安が押し寄せていた。この 1955 年という年は、〈国民詩〉をめぐるドゥペストルとエメ・セゼールの間で衝突が起こった年でもある (Douaire-Banny 2011 を参照せよ)。ドゥペストルはいくつもの要請と期待のはざまに身を置いた。『プレザンス・アフリケーヌ』誌に掲載された「エメ・セゼールへの返答」という文章は、自身が『レ・レットル・フランセーズ』誌に寄せたシャルル・ドブジンスキ宛の書簡に対して、セゼールが激しく反発したことを受けて書かれたものであり、その中でドゥペストルは、長らく否定されてきたハイチ詩を改めてハイチ国民の展望のなかに位置づけようとした。ドゥペストルの立場を要約するような一文が文章のなかにある。「クレオール語とは、民衆の創造的精神の復讐、フランス文化の生命力を封じ込めてきた封建的なエリートたちの蒙昧主義に対する復讐だ」。ドゥペストルこのテキストはまず文学に関する考察に特化している。第三部では宗教問題、特にハイチにおけるヴォドゥ^{10*)}の位置づけが論じられており、セゼールの書いた、民間信仰が無駄なものであるとでも言うかのような文章に対する反論が展開されている。しかしその後はネグリチュード運動をめぐる論争へと立ち戻り、アラゴンによるシュルレアリスム批判や、『レ・レットル・フランセーズ』誌におけるセゼールの意図的な不在が言及される。この考察はさらに、アラゴンがもたらした〈詩的閉鎖〉への批判へと続いていく。ドゥペストルによると、アラゴンは詩の韻律の長い歴史における、今日的な達成としての自由詩を否定しているという。ここで問題となっているのは、新規性と現代性を模索する、〈国民詩〉の定義そのものであるとすら言えるだろう。「新しい表現を通して、大衆の感受性が国民的感情を表すことはできないものか？」。ドゥペストルはそう問いかけている (Dépestre 1955 : 53)。だがこの問いかけによって、彼がセゼールを中心とした『プレザンス・アフリケーヌ』

誌のグループから信頼を得ることはなかった。この時点で何より重要なのは、反植民地主義の取り組みを、政治的なものであれ文化的なものであれ、あらゆる規定づけに対する抵抗として位置づけることであった。フランス共産党やアラゴンからのいかなる指示に対しても、聞き入れるわけにはいかなかったのだ。同時に、共産主義のうちにある権威主義への反抗も、ドゥペストルのなかで進行していることが見て取れるだろう。その反抗の道筋は、セゼールという問題を介しても表れている。

1956 年、ドゥペストルは『プレザンス・アフリケーヌ』の会議に出席する。その後しばらくはムーラン・ダンドに滞在し、数多くの作家と出会った。『レ・レットル・フランセーズ』誌には、スターリン主義との決別を表明する手紙を発表している。3 月以降に公表されたフルシチョフ報告、そしてハンガリー動乱での弾圧は、その後のドゥペストルのアンガジュマンを決定づける明確な分岐線となった。

ハイチでは新たな局面が、表面的にでも開かれようとしていた。1957 年、時のマグロワ政権の崩壊を受けて、ドゥペストル夫妻はハイチへの帰国を決意する。1957 年 1 月 18 年の『ル・ヌヴェリスト』紙にて、ドゥペストルは自身の帰郷を次のように告知している。

私は心から信じている。私たちの国の、あらゆる愛国者が共通してもつ関心を軸として、民主的な結集が可能であると。そこに、私たちの間に起こりうるちょっとした意見の相違は関係ないのだと。私は信じている。今私たちがすべきは、哲学的、あるいは宗教的な差異はひとまず脇に置き、自由な議論の精神のもとで、勇気をもって、ハイチの物質的、精神的な生の水準を高めるための具体的な手段を模索することであると。

3 月 23 日号の一面には、母リュック・ドゥペストルから臨時大統領フランク・シルヴァンに宛てた手紙が掲載されている。「息子ルネ・ドゥペストルは、家族や祖国との再会の喜びを見据えながらも、常に民主主義のために闘ってまいりました。祖国においても、海外においても、彼はポール・マグロワの忌むべき業績を打ち壊すことをやめたことはありません」。ドゥペストルの帰郷は 12 月 20 日に発表されている。帰国後すぐさま、ドゥペストルはヴェルティエール、シャリエ、バリエール・ブテイユといった旧跡を訪れ、祖国の歴史と建国の原点に「身を浸す」ようにして向き合うのだった。

1957 年 9 月 22 日に選出された大統領は、幼馴染で、かつての隣人で、トランプの遊び仲間であった。ドゥペストルはこれが最後の帰郷になると信じ、自身の蔵書をすべて持ち帰っていた。

4. 一次資料の不安定さ

1958 年 2 月 26 日から 3 月 22 日にかけて、二人の盟友の間で激しい論争が繰り広げられるわけだが、その内容は些末な側面にも及ぶ。とはいえこの論争の詳細に踏み入る前に、それが展

開かれた文脈を明確にしておく必要があるだろう。

1957 年の『ル・ヌヴェリスト』紙第一面からうかがえる出来事を簡単におさらいすることで、1958 年に勃発する論争の背景を知ることができる。しかしながら〈カリブ海デジタルライブラリー〉上で 1957 年 6 月から 10 月までのデータが欠落している点には注意が必要だ。また、電子化の質も十全ではない。コントラストが弱いために一部が読み取りづらくなっていたり、研究者にとっては歯がゆいことに、号ごとの分類にもいい加減なところがあったりする。このサーバーにはメンテナンスが必要だろう。

5. 1957 年—暴力的な空気の醸成

ポルトープランスにおいて 1957 年といえば大統領選挙の年である。司法の腐敗が広がり、特にデュヴァリエ自身が主導した、しばしば暴力を伴う暴動に関する政策評価の際には、腐敗は拡大の一途を辿っていた。腐敗という語の第一義は、分解や物理的な腐敗であるわけだが、この意味での腐敗が 1957 年の時点で増大段階にあったのである。これは 1946 年の革命の理念が道を踏み外していく過程の一端を担っている。ここで取り上げる二人の作家はいずれも、1946 年のその革命において最前線に立っていたのだった。L・ペアンは次のように補足している。

ここでいう腐敗とは、真実の歪曲である。1946 年の理念に関する誤った情報が広まり、その理念を実現するにはフランソワ・デュヴァリエと共に中産階級が再び権力を握ることが必要なのだとの見方が流布されることで、真実が捻じ曲げられる。だが腐敗とは日々着々と構築される力でもあり、被害者意識に基づくイデオロギーを利用して単なる思い付きを確信へと変えるものでもある。感情に訴えかけ、良心が咎めるようにすることで、ノワリスト運動^{11*}はハイチ人の主観性を腐敗させるという離れ業をやったのけたのであり、政治に関わる領域全体を黒人／ムラート^{12*}の二項対立へと還元してしまった。そしてこの腐敗によって、この運動はそれを受け入れることを余儀なくさせ、暴力が伴おうとなかろうと、権力を握るようになったのである。ノワリスト運動は、中産階級の権力欲を始点として、この欲を操ることによって社会を腐敗させた。構想の腐敗、構想する力の腐敗、権力欲の操作による終わりの見えない精神の腐敗である。そしてハイチにおける良心の腐敗と共に、ノワリスト運動は超越的な変貌を遂げた。腐敗が、所有、知識、権力、行動に関するところだけにとどまらず、存在そのものに関わるようになるのである。(Péan 2007: 164)

クレマン・シュメル、ルイ・デジョワ、ダニエル・フィニョレを始めとする他の大統領候補者たちは、共同の陣営を築く力がなかったことより、自分たちの知らぬ間に、デュヴァリエが絶対的権力を掌握するのを容易くさせてしまった。同時に、デュヴァリエはこの状況を利用して、

1957年8月に行われた有名な演説のなかで、[次の引用に示されているような] ポピュリスト的論法を展開する。もっとも、[ハイチ・クレオール語を母語とする、] フランス語に熟達していない大多数の国民には届かなかったのであるが。

彼ら[ほかの候補者]は一番人気の候補者デュヴァリエを、まるで罰せられた子どものように外の闇へと追いやろうとしている。彼らは常軌を逸している。

百の裕福な家族の名のもとに、つましい人間の貧窮に伝統的に無関心で、この国の真の民衆のすがたをバルコニーから見下ろすことでしか知らない一握りの人々の名のもとに、そしてまともに判断力を持たないルンペン・プロレタリアートからはぐれた数百人の哀れな者たちの名のもとに、常軌を逸したあの連合は、私や貴方がたが発言することは認めないと決めてしまった。彼らは全てを私たちの代わりに決めてしまう。彼らは選挙をでっち上げている。彼らが私たちに指導者を与えることになってしまうのだ。(Péan 2007: 168)

そこからはレトリックのようなテロリストのようなメカニズムが、まるで影芝居のようにうごめき始める。その一方で暴動や襲撃事件が激化した。たとえば1957年1月25日には下院議事堂が爆破され(『ル・ヌヴェリスト』1957年1月26日号)、年初にはベティオンヴィルの人気キャバレー、カバース・シュクーヌも放火の被害にあっている。デュヴァリエの候補者演説が宛先として想定しているとされた大多数の人間は、外にある社会の闇の中でもがいている。まさにハイチでよく言われる表現、〈外に立たされた国^{ベイエ・アン・ドール}〉が示すところである。[しかし]本当の宛先は候補者の支持者や、自分たちが慢性的危機状態にある国を統治できていると考える軍事政権のメンバーだったのだ。彼らの機構は、軍部を含む複数の派閥の間で引き裂かれていた。実際のところ、関係者のほとんどは利権のために行動していたのである。『ル・ヌヴェリスト』紙は国じゅうを覆うこの混乱を、第一面をまるごと使って、〈無力感〉という形で表現している。たとえば5月25日号、27日号、28日号の第一面では「1957年5月25日土曜日、悲劇の日」と題して、ポルトープランスの街頭で起こった暴力事件を、その歴史的な性格を強調するようにして報じている。これはハイチ軍の異なる派閥同士の衝突であり、この事件の暫定的な結末として、ダニエル・フィニョレが臨時大統領に任命されることとなった。これを契機として、将官ケブローの指令により実行される、民間人殺傷事件が起こることとなる。ジャック・ステファン・アレクシがポルトープランスに到着したのは[そのような状況下にある]5月25日のことである。動乱はその後も続き、6月下旬にその極点がきたと言えるだろう。というのも、1957年6月16日、すでに失脚したフィニョレの支持者たちが追われ、その多くが殺害されたのである。

大量虐殺とまではいかなくとも、それは下町におけるシステムティックな殺人とでも呼ぶべき出来事であった。どれだけの人々が6月16日の晩課の時間に、ケブロー指揮下の部隊に殺されたのか。公式の発表ではその数五十人、しかしモールパ・オーギュストによれ

ば五百人以上、ベルナール・ディドリッヒの資料に至っては千人に及ぶとしている。いずれにせよ、この夜まき散らされた死はアントニオ・Th.・ケブローという名を永遠に変えてしまうことになるだろう。「Th.」は元々〈トラシュビール〉を意味していたわけだが、この出来事により、数多くの命を刈り取ったあの機関銃の名前にちなんで〈トムソン〉を指すこととなるのだ。(Péan 2007 : 176)

〈カリブ海デジタルライブラリー〉で閲覧可能な 1957 年の『ル・ヌヴェリスト』紙には、この選挙戦の激しさや候補者の遊説の様子が示されている。特にデヨジョワ、シュメル、デュヴァリエの演説は繰り返し掲載される。選挙戦に散りばめられた、深刻な結果を残す事件のこともたびたび取り上げられる。たとえば 3 月 6 日号の第一面は次の通りである。「昨日午後、ポルトープランスで深刻な事件発生。警察の機動により数多くのデモ参加者が負傷」。『ル・ヌヴェリスト』が伝える、デュヴァリエの演説に通底するトーンは庇護者のそれである。たとえば 1957 年 3 月 18 日に行われた首都の西に位置する町ジェレミーでの演説は、デュマルセ・エスティメへの賛辞と 1946 年の革命の総括に始まり、自身の望みを訴えている。

親愛なる同胞の皆様へ

私は二十年以上もの間、いつの日か祖国の運命を導くという夢を抱いてきた。地方住みの医師^{13*}として、二十年以上に亘って、都市の後背地がもつ物質的、道徳的な悲慘と常に接するという貴重な機会を得た。

だからこそ私自身の運命を、気骨あるエリートたちのそれに、深い苦しみのなかにある大衆のそれに結びつけると決めた。知的、政治的、道徳的な形成に寄与しうる精神的ファクターを時の流れのなかを探し求めると決めた。果たすべき使命を見据えて、自らの能力を高めると決めたのだ。

このような動機づけは飽きるほど繰り返される。そうしてフランソワ・デュヴァリエは厳格かつ効果的な選挙運動を展開していくのであった。

この頃、暴動が頻発していた。軍将校数名を死に至らしめた 4 月初めの爆破事件により、臨時大統領フランク・シルヴァンが辞任に追い込まれ、その後の数週間、軍部により逮捕、投獄されている(1957 年 4 月 12 日『ル・ヌヴェリスト』の報道)。4 月 6 日には新たに政府の執行部が任命されるが、この組織も任務の遂行に苦しむこととなる。大統領選は 6 月 16 日に予定されていた。候補者同士の連帯を求める声も上がり始めていたが、デュヴァリエの存在感はもはや否定しようのないものになっていた。4 月 4 日の自由投稿欄には、ハイチ軍医兼少佐のエルマン・レモンによる次のような論説が掲載されている。「[デュヴァリエの台頭が意味するところは] 国家救済なのだ。どうしてデヨワとフィニョレの連帯など必要か」。

同年 9 月 22 日、フランソワ・デュヴァリエ医師が、混乱の蔓延するなか、大統領に選出された。もっとも当人と彼の腹心たちにとっては混乱など起こっていなかった。彼が権力を握る

のに力添えした人間が、自分が何に手を貸したかを思い知るのは、もはや手遅れとなってからのことだ。たとえば 1957 年 5 月 8 日の演説の原稿の大部分を書いた作家ロジェ・ドルサンヴィルがそうであったし、『証言 1946-1976 年—裏切られた希望』という意味深な題の自著において多くのことを明らかにしている、プレソワール・ピエールも同様であった。もはや止めようのない仕掛けが作動しており、摩耗によってそれが弱体化するのはほぼ 30 年先のこととなる。M・セオネの指摘するように、デュヴァリエの前に組織だった政治的対抗勢力はもう存在していなかった。選挙で競った他の候補者たちは追われて逃亡し、労働組合も、ポピュリズムに対抗しうる共産党も消失していた。残っていたのはばらばらに分散した反対派だけで、しばらくの間、それはジャーナリストと作家の役割になるのだった。

1957 年 11 月以降、『ル・ヌヴェリスト』紙が通常発行を再開したことが〈カリブ海デジタルライブラリー〉のサーバー上で確認できる。国内の危機はもう言及されなくなっている。たとえば 11 月 11 日号に載った次の文言のような、フランソワ・デュヴァリエから国民への呼びかけを発表するのに使われている。「この勝利に向かって前進しよう。禁欲と自己犠牲の名の元に」。目の肥えた観察者なら、この時役職の再配分が進んでいたことに気づくだろう。

『ル・ヌヴェリスト』紙は新たな任命について発表する一方で、時には解任や、唐突な罷免に対する当事者の抗議も報道している。たとえば 11 月 13 日にはアルフレッド・ドルセが郵政管理者に就任したと報じられているが、同号ではたばこ公団の新たな主席会計官が任命されたことも報じられている。L・ペアンによると、この公団こそ、あの腐敗の主な資金源の一つであったという。会計監査院への圧力もこの 11 月中に連続して報道されている出来事のひとつである。11 月 29 日には、大使の人事異動が報じられている。伝統的に、ハイチ政府はこのような任命によって、潜在的な対抗勢力を排除してきたのであった。こうしてフーシェ氏がワシントンに、プリヌ=マルス氏がパリに、先の大統領選の候補者であったオダン氏がメキシコに、サン=ロット氏がマドリッドに派遣される。また、ハイチ政府は国際的な承認を受けるための試みを重ね、ドミニカ共和国との関係も急速に強化されていった。たとえば将官ケブローはドミニカ共和国の独裁者^{14*}から勲章を受けたのだし、有効のメッセージや代表団の交流も行われたのであった。文化的な方面でも政府は一切手を抜かず、ソルボンヌ大学からの承認を獲得するほどであった。11 月 30 日号では、米州機構の文化委員会のハイチ代表、フィリップ・カンタヴ教授が、ソルボンヌ大学長フランソワ・サラユに迎え入れられたと報じられている。サラユ学長も「新たなハイチ大統領が自国とその国民の福祉の向上のために尽力していることを忘れてはならない」と述べたそうである。

1957 年 12 月になると、先の大統領候補であったデジョワとジュメル^{15*}の運命が決定づけられたように見受けられる。12 月 6 日第一面には、「L・デジョワおよび C・ジュメルの件に関して、内務大臣が重要な声明を発表」とある。同号では、制憲議会により議会在一院制へと縮小されたことも報じられている。そして 12 月 14 日、黒と赤のあの国旗^{15*}が採択されるのだった。しかしながら身体の拘束については〔紙面上で〕ほとんど言及されていない。最初にそれが言及されるのは、12 月 23 日号に掲載されたジャン・F・ブリエールによる「デュヴァリエ大

統領への公開書簡」においてである。「親愛なる大統領であり、親しい友である方へ […] かつて貴方が守っていたものを、今私に守らせてほしい。かつて貴方が立っていたその場所で、私に貴方の統治の手助けをさせてほしい。どうか言わせてほしい。牢獄で朽ち果てている人々がいる。国外へ追放された人々がいる」。

ブリエールは非常に直接的な形で、エチエンヌ・シャルリエや、ジャック・ルーマンの兄弟であるミシェル・ルーマンを始めとする、武闘派 коммуニストが自由を奪われていることに触れている。さらには、当選したことの重大さを理解せず、なおも候補者であるかのように振舞う人物としてデュヴァリエの姿を描写する一方で、「この国は疲弊し、平和と、食糧と、雇用と、尊厳を渴望しているのだ」とも述べている。最後には、国外追放とは「もはや時代遅れの概念であり、それを正当化しうるのは奴隷制だけなのだ」との駄目押しがある。この件の関係者は左派グループ〈民主同盟〉のメンバーであり、デュヴァリエ政治の最初の標的となった人物たちである。L・ペアンによると、彼らは「モスクワ派のグループを作り、共産主義のプロパガンダを作成とし、アナキズムを流布している」と非難されていた。そうした活動は主に発禁処分を受けた政治機関誌『解放されたハイチ人』上で行われていた (Péan 2007 : 371)。

12月25日の『ル・ヌヴェリスト』紙では彼らが釈放されたと報じられている。その一方で、12月初頭からほぼ毎日のように、不遇の子どもたちのために尽力するデュヴァリエ夫人の活動を称える記事が掲載されている。

6. 1957年の国際社会

1957年は世界的にも大きな出来事が続いた年であり、その影響はハイチでも如実に現われていた。それは1月時点の『ル・ヌヴェリスト』紙でも取り上げられている。たとえばハンガリー動乱の終結と裁判、そして処刑、スエズ危機、ポーランドでヴワディスワフ・ゴムウカが1954年に名誉回復して以来、初めて政界に復帰したことに表れる、脱スターリン化の影響などの報道が見受けられる。また、『ル・ヌヴェリスト』紙ではアルジェリア危機の進展も注視されている。ただしその視線はフランス政府の見解を踏襲したものである。1957年1月19日号見出しは「ギ・モレによるアルジェリア問題についての重要声明」となっている。2月21日には、大戦後、国外のニュースは最終面に追いやられていたにもかかわらず、次のような記事が第一面に掲載されている。「国連は、イスラエルに対してエジプトからの軍撤退を強制するほかないとアイゼンハワーが発表」。2月18日の第一面にはやはり隣国キューバに関する記事が掲載されている。「バティスタ政権の打倒を狙うキューバの革命家たちの計画」。同月26日には、「フィデル・カストロはいまだ生存しており、シエラ・マエストラ山中で交戦中」とある。3月2日の最終面では「カストロ勢力に危機か」と報じられると共に、スエズ危機とアイゼンハワー・プランに関する囲み記事が載っている。キューバの緊張状態は継続的に報じられている。たとえば3月14日号には「ハバナにて若者らが蜂起。国立宮殿および国会議事堂を襲撃し、40名が死亡」とある。同号最終面では、バティスタ大統領の辞任を求める呼び

かけが掲載されている。3月15日号には「〈動乱〉鎮圧後、ハバナに平穏戻る」とあり、蜂起の勢いは失われたものとして報じられている。この記事は同時に、カリブ海地域における独裁者とその体制の告発文ともなっている。しかし3月26日号にあるのは、キューバでの殺戮に対するハイチの学生の反応である。「ハイチ人大学生青年会、そしてキューバ人学生の犠牲」。

『ル・ヌヴェリスト』紙でさかんに取り上げられる出来事のなかには、被植民地国の独立も含まれている。ガーナやタンガニーカの独立が称えられ、大使マックス・ドルサンヴィルの国連での働きもこの流れに沿って報じられている。

しかし1957年4月になると、次第に紙面はハイチ国内の情報で埋めつくされるようになる。国際ニュースは徐々に、最終面からさえも姿を消していく。深刻な危機の最中にありながら、カジノ・アンテルナショナルで毎夜ショーを披露する歌手カルメン・トレスの肖像が掲載されているのは、まったく場違いのように見える。ペティオンヴィルのブルジョワ階級のたまり場、カバース・シュシュヌが放火されたと報道されている。定期的にこの地域で巡業していたゴスラン劇団が、一週間の公演の後、早々に立ち去っている。

1957年11月以降の『ル・ヌヴェリスト』紙では国際政治のニュースが再び取り上げられるようになる。アルジェリア戦争、冷戦下での米ソの宇宙開発競争、カメルーンの独立、キューバ革命などの報道である。12月27日には『ニューヨークタイムズ』の記事が転載され、「ニカラグア大統領ソモサ、キューバへの侵攻計画を告白。中米における共産主義活動の拡大について語る」と報じられている。しかしポルトープランスの状況にはどこか奇妙なところを感じられる。1957年末、マックス・ドルサンヴィルが国連の任務の合間に二週間ほどハイチに滞在したが、再出国の際に次のような不穏なコメントを残している。

私はデルマ、ボワ・パタット、モン・エルキュールを始めとする地区で、豪華な建物が並みいるように建設されていくなか、首都の思い出を持ち帰った。このとき、人々の表情には硬直が見られ、ある者の顔には傲慢さが、ある者にはある種の気まずさ、違和感がうかがえた。(Péan 2007 : 484)

1957年12月の『ル・ヌヴェリスト』紙第一面には、数日前の『ラ・ファランジュ』誌の記事評が掲載されている。そこにおいて神父サルガドにより、教会の描写にみられるその諷刺的性格を批判されているのがジャック・ステファン・アレクシの『音楽家たる樹々』である。神父はとりわけ「ヴォドゥの称揚」と、アレクシが「祖国の魂」と呼ぶものについての彼の一面的な捉え方に異議を唱えている。こうしてアンディジェニスト^{16*}の擁護として読まれるもののへの線引きがなされることにより、そこにある心理的な地理の輪郭を読み取ることができるようになっていく。

7. 論争の始まり

論争の端緒は 1958 年 1 月 31 日から 2 月 3 日号の『ル・ヌヴェリスト』に掲載された、「デュドネ・セドール、民衆の画家」と題されたアレクシの講演原稿にある。これはハイチ絵画をシュルレアリスムへ還元することに対する批判であり、1956 年 1 月に『ル・ヌヴェリスト』誌第 14-16 号で発表された「親愛なる画家たちへの手紙」の延長線上にある。アレクシはエクトール・イポリットとセドールを対比して、前者は人気の画家ではあっても民衆の画家ではないとしている。この対比を出発点としてアレクシは、とりわけシュルレアリスム運動に対する清算を行おうとするのである。[アレクシ曰く] イポリットは 1947 年のシュルレアリスム展という、ブルジョワの退廃を象徴するきわめて意味深い契機に回収され得た。それには次の三つの理由がある。第一に、シュルレアリスムは様々な詩学の境界を曖昧にする。第二に、これにはサディズムへの称揚が必要であり、このことはとりわけアルチンボルド、グラック、マッタ、タンギー、マン・レイ、マックス・エルンストなどの作品に表れている。第三に、展覧会の来場者もきわめて雑多であった。「上流階級のこの一大イベントで提供されたご馳走については不問にするとして、そこにはハイソなパリ人と闇市の連中がひしめき合っていたのだ」。

それに対して、セドールは曲解されることがない。先見的なこの画家は、民衆の運命と深く結ばれ、その存在を共にしている。彼の絵は騙し絵的な表現に頼らない。立体感を出すために絵の具を厚塗りすることではなく、空間は平面的で、遠近法に紛れて物体の量感を消してしまうこともない。このような要素によって、表象のリアリズムと、ハイチの民の驚異的^{レアリスム・メルヴェイユ}のリアリズムを通じて、セドールは正にハイチ的で、回収することのできない画家となっている。たとえ民衆の生活がほとんど、あるいはまったく描かれていなかったとしても、このことは変わらない。さらに、完成されたキャンバスからは、用いられた技法や制作過程が一切うかがえないようになっている。

1958 年 2 月 5 日、すなわち前述のアレクシ論考最終回が掲載された翌々日、ジャーナリストのダニエル・ゲーが二本の記事を発表している。一方ではボルトーブランス市長ウィンゾール・ラフェリエールに向けて首都の文化団体への支援を要請しており、もう一方では、ピエール・ヴィアラ⁹に向けて、ハイチのアンスティテュ・フランセでの講演会のなかで扱われる作品に、ハイチ国内で生まれたテキストを含めてほしいと頼んでいる。

2 月 11 日の『ル・ヌヴェリスト』紙には、フランソワ・デュヴァリエがハイチ人民党幹部の前で行った演説が掲載された。不穏な気配をもつこの演説では、1946 年の革命的運動を自らのものとして主張し、露骨な形で、全体主義的な社会変革の意思が表明されている。

政府は、旧式で時代遅れで、その変革がすでに始まっている社会制度に代えて、社会的、経済的に内容の詰まった平等を実現するために、人間の尺度にかなった新たな社会を段階的に導入しつつある。これは歴史上行われてきた論理的な歩みであると同時に、中産階級と大衆とが、自らの運命を背負い、解放の意思のもとに武装するなかでみられた歩み、共

通の努力によって万人の存在に色彩を与えること、その意味を広げ、人間に幸福への鍵をもたらされて以来とられてきた歩みだ。

もはやこの政権の性格について疑いの余地はなく、人々の精神を確実に掌握しつつあることが見てとれる。政治的な闘争は、とりわけデュヴァリエに関するところでは、文化や言語の領域でのそれと切り離して考えることはできないだろう。また、同号には「議会の活動」と題された記事も掲載されており、セラファン氏の議員活動に関する記者の所感が述べられている。とりわけ彼のたばこ公団の管理や、キューバからの 400 万ドルの借款、さらには悪意ある官僚による不正が起こった可能性に関するところでのこの議員の不正行為が注目されている。これに対して、財務を担当する国務長官は、曖昧な答弁しかしていない。このセラファン議員については〔本稿でも〕後ほど再び言及する。

紙面上ではこの時点で、二人の作家の対立は公然のものとなっている。それまでドゥペストルとアレクシは互いへの連絡を完全に断っていたわけではないと考えられるが、同時に、アレクシによる『ハイチの民の驚異的^{レアリスム・メルヴェイユ}への緒言』がドゥペストルの「セゼールへの返答」への応答となっていることも見て取れるのである。ここに、論争が始まる。というのも、ドゥペストルがすでに数か月前から『プレゼンス・アフリケヌ』にみられるセゼール的な路線に復帰していたのに対し、アレクシはアンチ・シュルレアリスムの立場と、ネグリチュードの展望に対して敵対する姿勢を堅持していたのである。

8. アフリカ文化協会（SAC）に立ち戻る

アレクシが論争の火蓋を切ったのは、1958 年 2 月 26 日の「SAC 第一回会合について」という記事においてである。この協会には起こりうるアクションを無力化しようとする働きがあるという批判を向けたのであった。まずは二人の作家を繋ぐ友情について「ルネ・ドゥペストルという長年の、14 年来の友人、ずっと前から兄弟も同然の存在」と強調されているが、その後現況について判断を下してほしいとの読者への呼びかけがある。アレクシは 1958 年 2 月 21 日付けの、SAC の第一回会合について報じた「とある会合をめぐる」という記事に遡る。そこではアレクシとドゥペストルの間で激しい口論があったことが伝えられていたのであった。アレクシが SAC の国際執行委員会のメンバーである自身が地元委員会から外されたことへの驚きを示す一方で、ドゥペストルは「設立された委員会はあくまで暫定的な設立委員会であって、今後定款が定まった上で正式な委員会に置き換わる予定であった」と返答したそうである。この 2 月 21 日の記事はドゥペストルの返答にあった口調の激しさについてのコメントで締めくくられている。「若き詩人ルネ・ドゥペストルは小説家ジャック・S・アレクシに対して、人道主義的な物言いと、利己的で芝居がかった言動の間にある乖離を指摘したアムルーシュの言葉を、あろうことかそのまま適用した」。

この記事末尾のすぐ隣、ページ下部には、全く関係のない、ソ連に関する記事が載っている。

1937 年の大粛清時に死刑宣告を受け、同年 6 月 12 日にトハチェフスキーと共に《ページ》に遭い、銃殺刑に処された将官ヴィタリ・プリマコフの名誉回復に関する記事である。紙面上でのこの、恐らく一握りの目ざとい読者だけが気づくであろうこの鉢合わせには、客観的偶然とでもいうべき意味合いがある。それというのも赤軍のコサック騎兵隊創設者であったプリマコフは、エルザ・トリオレの姉リリ・ブリクの夫であり、アラゴンの義兄にあたる人物だったのである。これはアレクシとドゥペストルという武闘派の作家の対立においても問題となっている、とある歴史の彷徨であるとも言える。[そこで暗に投げかけられているのは] スターリン主義にとっての恥辱は、マルクス主義の思想と、共産主義社会の実現のための闘争において、どのように受け止められるだろうか [という問いである]。

1958 年 2 月 26 日の記事の中で、アレクシの口調は徐々に激しくなり、それまでの二人の会話のなかで、ドゥペストルが SAC 第一回大会について一切触れていなかったことが非難されている。議論は法的な方面に向けられていく。[アレクシによると、] 大会収集通知の内容に反して、SAC にはすでに定款がある。また、委員会メンバーの選出方法も民主的なルールに則っていない。ドゥペストルが民族学者を優遇したのである。しかしドゥペストル自身も操られていた。長年ハイチを離れていたドゥペストルは、もはやハイチの政治家たちの駆け引きには通じていない。加えて、彼の「詩人としての単純さ、怒りっぽさ、不安定さ」が公の場での意思決定や発言に影響を及ぼしているのだ。ドゥペストルは 1956 年のソルボンヌ会議に使節団が送られた際に露呈した、現行の委員会メンバーたちの低俗さを知らない...本来アムルーシュの言葉を適用されるべきは彼らである。この委員会らしきものは、たとえばフーシェ、バステイアン、ウィルソン・ビゴー、レオン・ラロ、ジャン・F・ブリエールといった真なる有識者や芸術家を排除してしまったのだ [と語られている]。最後にアレクシは、自身が SAC ハイチ支部の設立に時間を要したことについて、委員会を合法化するためにハイチ当局と連絡をつけることがかなわなかったためだと理由付けしている。「私は、内閣に訴えて集会の許可を得られるようにする〈開けゴマ〉のようなものを持ち合わせていない。厳しく課せられた例外規定により、公的な団体以外を除いて一切の集会が禁じられている状況下ではかなわない」。そして文章を締めくくするのは、数週間前には否定していたにも関わらず、評判の芳しくないハイチの要人たちの集合体に加わろうとしているというドゥペストルの〈二枚舌〉を糾弾する次の内容である。

この件に関して騒ぎ立てている人間に慎みと、[アムルーシュの] あの言葉を理解するほんの少しの分別があったなら、顔を覆ったことだろう。彼らは人道主義的な言葉を並べながら、あらゆる政府に使えてきた人間、諂い、奉仕し、密告することでバターの皿の恩恵に授かるようとしている人間、真の文化をもたざる人間、すなわち自らの肉体と血を差し出すような文化的献身を欠いたまま、とある後進国で虚飾を並べ立て、それを文化だと主張するような人間なのだ。

アレクシはこれをもって宣戦布告している[といえよう]。しかしそれは一方的な言動ではない。前提として、新聞上での論争の争点は、相手の最新の発表に対する反駁や反応として書かれた一連のエピソードであるようにみえることは理解しておくべきであろう。しかし同時に、この論争の妙点はまず、相手の反撃が予想されていたこと、それ以上にその反撃を見越して準備されていたことにある。明らかにこの論争は公に出た最初の応酬よりもずっと前に始まっていたのであり、だからこそドゥペストルの〈二枚舌〉に対するアレクシの非難が出たのである。しかしこの記事に備わっているのはそれだけでなく、より深刻な告発が見受けられる。アレクシの糾弾の対象となっているのは、デュヴァリエに奉仕する知識階級全体なのである。後にアレクシが用いることになる言い分の萌芽がこのテキストには見てとれる。そこに現れているのはこの論争の根本にある文学的な性格であり、そのために時に奇妙で、時に驚きをもたらすテキストが生まれているのだが、それを書いたのは、始めは闘争の士として姿を現わし、兄弟愛のようであり兄弟殺しでもあるかのような闘いの場面を演出する二人の作家なのである。しかし同時に、そして手遅れになってから彼らが気づくように、この争いはハイチの知識人がそれを築こうともがいてきた政治という概念そのものを取り返しのつかないところまで損なってしまうものであった。それは、フィルマン、ジャンヴィエ、デュマルセヴァル・ドゥロルム、そしてルーマンがその構築に身を捧げてきた概念である。だがこの論争はやがて単なる乱闘に墮してしまうのであった。

9. ドゥペストル最初のカウンター

ドゥペストルは即座に反応した。彼もまたひどく感情を害したのだろう。1958年3月5日付の『ル・ヌヴェリスト』紙の第一面には「知識人の血痕」との見出しがある。題にうかがえる曖昧さは記事の書き手の感情を表していると考えられる。記事の分量は非常に多く、第一面から最終面にかけておよそ八段に亘って続いている。さらに3月7日、8日にも続報が掲載されている。ドゥペストルが提示したのはまさに告発のエッセイであった。

この文章はアレクシの〈三文芝居〉への非難から始まる。そしてSAC設立時の状況に言及し、アレクシはバリでの準備会合に一切参加しなかったのであるし、執行委員会への任命も名誉上のものに過ぎないのだと続く。これにより、新聞読者の耳にはそれまで関係者によって語られてきたものとは様相の異なる物語が入ってくることになる。また、アレクシがセゼールと『プレザンス・アフリケーヌ』に対して、政治と思想の面で距離を置いたことにも同一の方向性がうかがえるという。ドゥペストルはSACの創設を、バンドン会議で開かれた新たな見方のなかに位置づけ直している。

バンドン会議は人権宣言に新たな中身を与えたのだ。それまで人権宣言とは、実際には、白人で、ブルジョワで、西洋的な人間の権利の宣言に過ぎず、暴力と策略によって途上国の運命を意のままにする権利の表明であった。バンドン会議は西洋世界に対し、共存と、

自由に思考と存在のあり方をぶつけ合うことの、打ち消しようのない必要性を突き付けたのである。

この転換の流れのなかで、バンドン会議での決定は白人にとって本性にもとるものであるとドゥペストルは言う。そしてすぐさま、アレクシはこの展望の転換を理解することをわざと拒んだのだと非難している。さらに悪いことに、彼は自分の先の大統領選で支持した候補者ルイ・デジョワのうちに、肌の色に関する偏見が根強く残っていたことに十分な注意を払わなかったとする。徐々にドゥペストルはアレクシの〈日和見主義〉の非難へと筆を進め、政治に関わる彼の思考は貧弱であると責め立てる。さらには彼がデジョワの大統領選演説の原稿を作成した可能性さえ示唆されている。その文体が証拠であり、『プレゼンス・アフリケーヌ』で彼の小説作品を批評したことがある文芸評論家であれば誰にでも、それがアレクシによるものだと分かるというのである。さらにドゥペストルは、SAC 創設までの経緯を正当化しつつ、政治理論の講義とも言える論を展開している。SAC はハイチのあらゆる知識人に開かれるべきであるという。また、アリウン・ジョップへ訴えかけながら、アレクシは自身の報告する義務を放棄したのだとも述べられる。要するにアレクシは虚言癖に冒されているのだというのである。

1958 年 3 月 6 日、ドゥペストルは再度報告の義務に言及している。〔ドゥペストルによると、〕アレクシはドゥペストルが自身の報告の中で行った提案に耳を貸さなかったばかりか、SAC 創設時の構成員の操作と限定に関しては、まったくのでっち上げをしている。アレクシこそ、自身がもつ排他性によって操られ、無責任に振舞っている。〔3 月〕7 日号ではさらに語気を強めてアレクシの日和見主義を非難している。〔ドゥペストルによると、〕アレクシがデジョワを支持したのは、マグロワ政権下のハイチで暮らしたのは、自らに妥協したに過ぎず、自身の父が大使であった頃には国家の恩恵も受けていた。アレクシが理論的な裏付けとしているものは現実を前にして崩れ去る。「何かを組織しようという精神が貴方に欠けていることは、祖国の具体的な状況に見出される国家的な何かを分析する能力が欠如していることをそのまま反映しているのだ」。さらに、〈二枚舌〉はアレクシの第二の本性であるともいう。「つまり貴方は、貴方自身がした妥協に目をつぶってもらいたいがために、私が権力者と卑屈な妥協案を結ぶことも〈理解できる〉というわけだ」。

3 月 8 日、ドゥペストルはその筆致を告発から風刺へと変え、アレクシの〈三文芝居〉をさらに滑稽に強調する。「実のところ、諸君、アレクシらしさの極致というのは、三文芝居という滑稽な地獄に未来永劫落ちたのだ。彼を見るとプラトンのいうゴルギアスを思い出す。はったりと虚栄の医師博士、華麗な道化の大家、言葉遊びの名人だ」。アレクシは作家のパロディへと身を落とし、その態度はセリーヌやドリュウ、モンテルランのような対独協力作家の姿を思わせる。アレクシとはひとつの詐称／^(アン)ポストチュール態度であり、演出なのである。「我うわべをつくらう、故に我あり」。ナルシシズムに満ち、ほらを吹き、虚言癖をもつ、それがジャック・ステファン・アレクシなのだ。

このように激情をさらけ出しつつ、ドゥペストルは両者の友情の終わりを宣言する。締めは

セゼールの引用である。「そして何より私の身体も魂も、ただの観客であるかのような、不毛な姿勢で、腕を組んでいるだけにならないようにしてほしい。人生は見世物ではないのだから。苦悩の海は額縁舞台^{フロセニウム}ではないのだから。叫ぶ人間は、踊る熊などではないのだから...」。

最終的な末尾は呪詛のような言葉で締めくくられている。唯一読み書きのできない民衆だけがその洗脳から解放してやれるという類の呪詛である。「イデオロギーがあるかのような身振りを鏡の前でとることに甘んじるものに災いあれ。大衆はその鏡を打ち砕くだろう。もしもそこに、厳しくも希望に燃える表情を見出すことができないのなら」。

この記事により、この種のテキストによく見られる苛烈さと大仰さすらも越えてしまったところで、ドゥペストルはある暗黙の慣習を破壊してしまった。その糾弾は政治の、イデオロギーの領域からはみ出し、人格否定に転じて、徐々にあきれほど暴力的になり、公衆の目には品位を欠いたものとして映るのである。攻撃性の高まりに歯止めがかからぬまま、相手を貶めようとする憎悪へと変質してしまった対立が激化していく。もはや恫喝こそがこの論争における唯一の言葉遣いとなってしまうのだった。

10. アレクシによるドゥペストルの告発

1958年3月10日、ドゥペストルは国立舞台芸術協会にて講演しているが、その内容は先日までの記事を延長するかのようであったようだ。「知識人にこそ、文化に関わる国民的特質を守る責任がある」とドゥペストルは述べたようである。つまりは民衆を前にした知識人の責任が問われたのである。この講演を報じた記者によると、ドゥペストルは幸福の問題にこだわっていたという。そう、フランス革命でも政治的行動の核心に据えられた問題である。人間の解放のためには闘わなければならない。文化的コロニアリズムに抗って伝統の価値を見出さねばならない。そしてその抵抗のためにはあらゆる社会的勢力と連帯する必要がある。「私はデュジョワ支持者か、ジュメル支持者か、フィニョレ支持者か、デュヴァリエ支持者であるかにかかわらず、すべての若き知識人および文化人に対して、より鋭く責任を意識するよう訴えたい」。この発言をもってドゥペストルは、統一戦線の結成を宣言したのである。

〔その後〕記者による幕間を経て、日刊紙に論客たちの発言が戻ってくる。

アレクシは1958年3月11日から17日にかけて、「SACに差し入れられた手」と題された記事を通じて応答している。ドゥペストルが自分の記事をロートレアモンの引用から始めていたのに対して、アレクシはジャン・マルスナック⁷⁾が彼のSACへの貢献を称えた記事の一節を掲げることから始めている。〔その内容は以下のようなものである。〕ドゥペストルは権威主義的である。というのも、反論に耳を貸さず、「誰に対しても専制をふるう権利が自分にある」と思い込んでおり、明らかに、自分のすること言うことすべて認められるべきであり、そうでなくとも称賛されて当然と考えている」のである。SAC執行部の構成についても実際には相当選別されたものである。政府関係者に近い民族学者が名を連ねており、この集団の独立性は担保されていない。ドゥペストルは不誠実である。発言の順について虚偽を述べ、危機を民主

的に解決しようという提案を無視して、アレクシに関する記述にも嘘があり、議論の場で見せた誠実さや礼儀を汲み取ることもなく、新聞上ではアレクシを不正直な人物であると非難する。ドゥペストルはさらに知的なごまかしに従属している。『マルドロールの歌』とその生みの親ロートレアモン、つまりは病んだ詩人を参照軸としているのだから。ドゥペストルの論法はメルロ＝ポンティのそれになぞらえることができる。「反応するだけの根っからのイデオログ」であり、「問題を巧みに端折り、論争を核心から外れたところに誘導し、扇動的で浅はかなはぐらかしにつなげる」論法の達人なのだ。

3月12日、アレクシは論争の前線をイデオロギーのレベルへと移して、一連の事実関係を整理することから始めている。まずは1955年4月に『ル・フレイ・ダ・ハイチの鏡像』誌に掲載された自身の記事にて、ソルボンヌでの〈会議〉の準備に参加するよう『プレザンス・アフリケーヌ』から直々に要請を受けたと報告したことに言及している。[アレクシによると、]当時の彼は芸術家たちに〈会議〉への参加を呼びかけながら、ピキオン、アルティ、モリソー＝ルロワと活動を共にしていたが、ハイチのマグロワ政権直轄の警察による監視を受けており、さらには民族学者たちからの敵意にも直面していた。ここに付け加えるとしたら、アレクシが明らかなモーラス主義^{17*}をプリス＝マルスから嗅ぎとり、彼やその周りに結集したアンディジェニスムの民族学者と長らく距離をとっていたことは間違いない⁸⁾。[アレクシの見立てでは、]ドゥペストルはアレクシと、彼の小説への反響に嫉妬している。ドゥペストルは二回に亘って誤った。ひとつはSACの初回大会の日程決めの際のことで、アレクシがそこに出席できなかったのだとして、それはアリウン・ジョップが公務で不在だったためであるということ。もうひとつはより深刻で、ハンガリー動乱の時期に、ドゥペストルは反ソ的ともとれる批判的立場を持ち込もうとしたということである。

1958年3月13日号にてアレクシは、ドゥペストルに本当の意味での分析能力に支えられた政治学の素養が備わっていないと指摘している。アレクシにとって科学的論理と詩学的夢想は本質的に対立するものであるのだが、この二つの混同こそがドゥペストルを独断的にしているという。「よく知りもしない問題について語りながら、独断的でまったく思い上がった態度をとる。これは無知であることの明白な証であり、自分は絶対に間違えないなんてことはないのだと証明された途端に彼は我を忘れてしまうし、最も陳腐な修正主義に堕してしまう」。

しかし最大の問題はそこではないという。ドゥペストルはバカロレアを取得しておらず、デュマルセ・エスティメ元大統領の寛大さによって大学に入学できた。また、ドゥペストルは近頃デュヴァリエの招待を受けて大統領官邸での晚餐に応じたが、その件について説明しようとならないというのである。

そのことについて私が尋ねたとき、自分の名誉を傷つけようとする「敵」に向けられるような激怒が返ってきた。それはデュヴァリエ支持者たちとの結びつきに由来するものだった。あれほどお粗末な説明では、歴史的な対談のなかで交わされたかもしれない約束事も何なのか分からない。それでも私はルネ・ドゥペストルに政治的なレッテルを貼ろうとは

しなかった。女性が強姦され、家が破壊され、近ごろ起こっている殺戮を生き延びた市民が終わりの見えない恐怖にさらされるこの混乱の時代において、彼がどのような行動に出るか見定めようとしたのだ。

この対談こそアレクシがデジョワを支持していることに対するドゥペストルの攻撃の発端であったのかもしれない。〔アレクシによると、〕彼を支持することを非難するのは、ドゥペストルに政治的感覚が欠如していることを如実に表している。というのも、当時も今も譲歩が欠かれない状況にあり、何より重要なのは外国への依存を終わらせ、真の民主主義を築き上げることなのである。農業の発展を促し、余剰資本を産業化へ回し、労働者階級の地位を高め、国内ブルジョワ階級の安全を保障し、国家共同体の構成員すべてを尊重することが求められている

1958年3月14日号では、再びドゥペストルにみられる政治的感覚の欠如が言及されている。〔アレクシによると、〕ドゥペストルは、アレクシが『音楽家たる樹々』において、ポルトーランスの利己的なブルジョワがいかに戦争から利益を得たか、レスコー政権が〈肌の色至上主義〉の罠にどれだけはまったか、あれだけ描いているのに理解していない。ドゥペストルは「世界の中心にいる自分に酔いしれて偽造家となった人物」であり、政治的行動にはレアリスムが見出されるべきであろうという要請を捉えられていない。単なる左翼であり、軽薄さゆえに修正主義の主張に加担し、そのため政治で失敗を犯している。〈肌の色主義〉の罠にはまり、大きな国民統一戦線の構築の妨げにすらなっている。今求められているのは政治を〈ハイチ化〉し、労働者の権利保護を見据えて、大きく間口の広い組織の形成を促進させる、民衆の合意にもとづく一大政党の創設することなのである。

3月15日、アレクシはハイチにおける社会闘争についての教訓をさらに展開している。肌の色に基づく分析を止め社会階級の観点からマルクス主義にもとづく分析が必要であるとアレクシは言う。

ルネ・ドゥペストルのような進歩主義的で詩情に酔いしれた者だけが、この国には1804年と同様の階級構造が残っており、肌の色の問題に左右されていると信じ込むことができる。私は不平不満に満ちたこの小ブルジョワたちに知らせめようと思う。ハイチの歴史とはまさしく階級闘争の歴史であるということ。それというのも我が国の議会はそれがどのような政体であれ今なお封建的地主階級に牛耳られており、まさしく彼らこそ、反封建的で産業の90%を農業に依存する我が国の実際の支配階級を形成しているのである。封建体制のもとで商業資本が蓄積していくなか、彼ら封建的地主階級は、自らに対抗する新たな階級が誕生するのを目の当たりにしたのである。

〔アレクシは〕いわゆる中流階級は未だ封建的な土地所有者の客観的支持勢力となっているという。最貧困層からみれば状況は明らかに悲惨である。

毎年およそ 10 万もの失業プロレタリアートが農村を捨てて雇用市場に現われ、労働力を搾取する力をもつブルジョワを探し求めている。大都市郊外では約 50 万のルンペン・プロレタリアートが定職につけず飢えに苦しみ、市場でちょっとした仕事をしたり、「インディゴ刀」を手に歩き回って、高台の屋敷の庭で草刈りをさせてくれと頼んだりしている。毎日何十人ものプロレタリアートが生理的な貧困によって命を落としているわけだが、[彼らは] 自らの労働力を売ることもできずにいるのだ。

アレクシは官僚やこれまでの政府に主観を持ち込まず奉仕するために肌の色主義の論法を利用してきた者たちを糾弾している。とりわけ名指しされるのが、アレクシを〈日和見主義者〉に仕立て上げようとしている [らしい] プリス＝マルスである。そしてこう結ぶのである。「貴方の頭がそこまで空っぽだったとは、思いもしませんでしたよ、ルネ・ドゥペストル」。

3月17日号でもアレクシは同じ調子でドゥペストルの人格に言及している。再度嫉妬の話を持ち出すが、それはすでに自分の小説への自評に賞賛が詰まっていることに見て取れるという。[アレクシによると、] ドゥペストルにはどうしようもない欠点がある。「それは私のせいではない。いくらデュマルセ・エスティメにバカロレアを与えられようと、貴方は定職を得るための勉学を続けることができなかった。知識人としてこれは拭い難い汚点である」。

アレクシは自分があらゆる外交職や奨学金を断ったことも強調する。同時に大使であった自分の父の秘書という職務を引き受け、責任をもって務め上げたのだとも主張している。

また、[アレクシによると、] ドゥペストルの不安定さは悲惨な帰結をもたらした。国民詩をめぐる論争において、ドゥペストルはまずアラゴンの主張に同調し、その後セゼールの介入を受けてネグリチュード運動に復帰した。さらには恥知らずにも、恩人デュマルセ・エスティメを攻撃するに至った。アレクシは自身の作品がフランスで、とりわけ共産主義の批評家の間で高く評価され、たとえばセゼールのものよりもさらに急進的であるとの評価を受けたことにも言及している。[ドゥペストルへの評価の例として、] 批評家アンドレ・ヴルムセル¹⁰⁾の言葉を引用している。

同日号の第一面には〈国立芸術振興協会〉会合におけるアレクシの発言を報じる記者ジョスターによるリポートがある。見出しは「国民文化のための知識人の役割」となっている。この会はまず次の訴えから始まったという。資金不足のため振興協会は施設費用の支払いができなくなり、閉鎖の危機に瀕している。登壇者 F・ルルブールが「文化はドルの奴隷であるなどと言わせてはならない」と述べた。アレクシの発言は文化なるものの定義づけから始まった。

「[文化とは] 人間が過去、現在、未来のことを考え知識を編成しようとする性向から生まれる産物なのだ」。知識人には国民文化のために闘う責務がある。問題はまずハイチの国民文化とは何かを明確にすることである。真に国民的な文学の文化が現れたのは 19 世紀末、あるいは米国による占領時であると彼は言った。そしてアンディジェン¹¹⁾のグループの活動を再評価している。

今後は作家が現実の問題を提起するようになるだろう。だが支配階級の文化と被支配階級のそれを混同してはならない。この二重性は今なお作家の生活の特徴になっている。最大の努力をもって人々の文盲を解決していかなければならない。それこそがこの国の現況において唯一価値のある闘争である。

アレクシの発言はニコラス・ギジェンの引用で締めくくられた「[そうである]」。「文化とは[…] つねに民衆に属するものであり、だからこそ民衆によって作られるべきなのだ」。そこに具体的にアクセスできるようでなければならない」。

11. 尊厳の侵害

1958年3月18日第一面の自由投稿欄にて、ドゥペストルは「仮面を剥がされた黒人」と題された記事を発表している。この見出しは論敵アレクシの父親の小説の題をもじったものである¹²⁾。侮辱的で、問題含みで、偏見含みの見出しだと言える。記事の内容は非常に攻撃的で、極端にネガティブで、罵倒ととれる形でアレクシを形容している。[アレクシは]「大言壮語將軍」「虚言癖持ち」「できそこないの三流論客」「ご乱心の横柄ボンボン息子」。ドゥペストルはデジョジョワ演説の草稿をアレクシ自身から渡された書類の中に見つけ、それを使ってアレクシを攻撃している。同時に、巧みにアイロニーを用いて、クレオール語の童歌を用いて、統一戦線の確立に必要な条件について政治的な講釈を与えている。さらには政治に関するところでのアレクシのプチ・ブルの日和見主義を糾弾し、民衆からの敬愛も、距離を置いた控えめなものに過ぎないとしている。アレクシが論争のなかで使った言葉を、暗に、自分は命への脅しとして捉えたのだという。末尾にはニコラ・ヴァブツァロフ¹³⁾最後の詩が引用されている。

闘争は鎮めようがなく残酷だ。

闘争は、いうなれば、叙事詩なのだ。

私は倒れた。誰かが私の代わりとなる、ただそれだけのこと。

個人の運命などどうして構う必要があろう？

一斉射撃、その後は一蛆。

これらのことすべてがあまりに単純で、あまりに論理的である。

だが嵐のなかにあっても私はいつだってお前のそばにいる。

ああわが民衆よ、だって私はおまえを愛したのだから！

このような引用は2019年現在よりも1958年のほうがはるかに大きな反響を呼んだものだが、要はヴァブツァロフを銃殺したファシストたちにアレクシをなぞらえているのだ。

12. 危機の極点と終息

これほど怒涛のごとく並べられた非難と憎悪の言葉に、それ以上何かを言うことはできないだろう。1958年3月22日、アレクシがこの決闘に終止符を打つ。記事の見出しは「戦争にでも行ってしまえ、潰走のなかで…」であり、ドゥペストルがやってみせた、アレクシの父親の小説のタイトルをもじった低俗な言葉遊びへの非難から始まっている。誰が誰の仮面を剥いだって？ルネ・ドゥペストルは「小ブルジョワのムラート」でしかなく、「〈ネグリチュード〉なる科学的ナンセンスに改宗した」としても何も不思議ではない〔と語られている〕。アレクシはドゥペストルが糾弾に使った、SACの件、デジョワを支持したことをめぐる不誠実さなど、あらゆる論点を掘り返し、糾弾し返す。罵倒には罵倒で応じるのであった。〔ドゥペストルは〕「嘘つき」「できそこないの偽造家」「できそこないの批評家」「恩ある者に噛みついた裏切り者」。そして寛容そうでありながらも激昂したような調子で、ある要求を突きつけている。

私は全力で信じている。愛と兄弟愛こそが進歩の根本的な法則であり、いかなる幻滅によっても私たちが挫けるべきではないと。私はルネ・ドゥペストルに悪意を抱いているわけではなく、ただ彼が心の片隅で真に人間的な高みにのぼる力を取り戻してくれることを願っているのだ。だがどうか、これ以上私に構わず、私に仕事をさせてくれることを願うばかりだ。

この弁論においてアレクシは、ドゥペストルから受けた非難の一つ一つを取り上げている。そして最後には、バルティアン・ショットとでも言うべき告発をぶち込む。ドゥペストルはハイチに帰還するために多額の資金を受け取っていたというのである。ハイチの生活水準に照らしてみれば明らかに過剰であり、「社会福祉の非会計予算」から支出されたものであったという。つまりは本来貧困層のために使われるべき資金がそれとは異なる目的で流用されたことになる。

13. いくつかの同時代的反響

息切れを迎えた論争の観察はここで終えてもよいかもしれない。しかし次の二つの情報については言及しておくべきだろう。第一に1958年3月26日の『ル・ヌヴェリスト』第三面に掲載された記事である。見出しは「ジャック・ステファン・アレクシへの公開書簡」となっており、論争を目にした投稿者フェルナン・アリックス・ロワによって、この論争に備わっていた一側面、すなわちアレクシの提示した階級闘争を一時的に棚上げすることが統一戦線を築くために必要であるという論点が掘り起こされている。ロワは明らかにマルクス主義の文脈における階級闘争の意味を捉えずに自然法則に基づいて論を展開しているため、アレクシから返答を受けることはなかった。その一方で、国民を中心に置いて考える必要性和社会的勢力が取り組む

べき課題、すなわちハイチを「巨大な労働建設場」とすることが強調されている。数日間におよぶ、激しく、徐々に抽象性を増したやり取りを受けて、編集部は新聞読者からの投稿を載せることで議論の本質、すなわちハイチにおいて生産するという課題を思い起こさせようとしたのだろう。これにより論争の出発点、アフリカだけを参照項とすることの是非にもう一度光が当たっている。

第二に、アントニー・レスペス¹⁴⁾がドゥペストルに宛てた二通の書簡である。この書簡はL・ペアンによって発見され、彼の著書¹⁵⁾に再録されている(Péan 2007 : 431-438)。書簡の内容は極めて批判的なものである。[次に引用する]一通目は、おそらく1958年3月末に書かれたものであり、過去に実際何が起きていたかを知らないままにドゥペストルが思想的彷徨をみせていることを咎めている。

さて、貴方はヨーロッパから帰国したばかりの、19歳だ。なぜならその歳でこの国を離れたのだから。そして貴方は指図しているのだ。誰に？ 15歳の若者たちにか？ だが今は1946年ではないんだ、ドゥペストルさん。そこからいままでも何百という遺骸が積み重なった。この国は、失業にあえぎ、何百万人も失った。あつという間にこの国は白髪混じりになった。不幸の渦中というのはそういうものだ。涙にくれる祖国というこの家で、少しの間黙して悼むだけの良識はもてないか？ 灰はまだ空に舞っているんだ、ドゥペストルさん。それなのに貴方は、あの悲劇から利を得ようと躍起になっているように見える。

レスペスはアレクシとの論争にも言及している。[それによると、]若者を動員しようとする両者の姿勢は、これほど危険が迫る時代にあっては、ハイチ国内の左派の不信を招く。まずは1946年の革命に著しく欠けていたものについて自己批判するところから始めるべきである。

レスペスの二通目の書簡は4月15日付のものであるが、その内容はさらにラディカルなものになっている。まずハイチのインテリ同士の〈おふざけ〉が糾弾され、彼らは〈外に立たされた〉民衆、すなわち農民やプロレタリアートのあまりに悲惨な状態を顧みているようにはまったく見えないと述べられる。

この国は大きな嘘の上に成り立っている。いや、むしろこの国自体が嘘なのだ。読み書きのできる者のうち99%は嘘をついている。自分に対しても他者に対しても何かをでっち上げている。その他者とはこの土地に住まう300万人の肉体労働者のことだ。300万の影のことだ。この病理は根深い。なぜならこの嘘の裏側を見抜ける者はおらず、見抜こうとする者もないからだ。誰一人として明晰な視線を持つ者がいないのだ。

これはまさに、セゼールが1944年の自身のハイチ訪問について、2005年のフランソワーズ・ヴェルジェ(*Nègre je suis, nègre je resterai*, 2005を参照せよ)との対談で語るなかで説明していることである。セゼールのこの証言は大きく注目されたが、基本的にハイチの知識人の間では評価されていない。[以下の]セゼールの発言はレスペスの言葉を裏付ける。

「知識人は〈知識人らしさ〉^{インテレクチュアリズム}のことだけを考え、詩を書き、問題に対していちいち立場をとっていた。だがそれは民衆とはまったく無関係であったのだ。それこそ悲劇的だった…」。

レスペスはまさにこのことを念頭に置いている。アレクシとドゥペストルの論争は、とりわけ罵倒が始まってからというもの、この路線にはまってしまった。論争の目的が意味を失ってしまったのである。

ところがドゥペストルさん、この国を飲み込み、破滅に追いやっているその嘘に、無知ゆえにというわけでもなく、良心の呵責がありながら、罪深い思考によって、貴方自身も足を踏み入れてしまったのではあるまいか。そこに貴方は腰までどっぷり浸かっており、水位はなおも上昇しているのだ。[…] 貧者の叫びが貴方の息の根を止めてしまうぞ、ドゥペストルさん！

この指摘は厳しいものである。[レスペスという、] ジャック・ルーマン亡き後のハイチで参照項とされた、武闘派活動家であり知識人でもある人物からの指摘である。レスペスはアレクシに対してもドゥペストルに対しても厳しい態度をとっているが、特に自らの書簡の宛先であるドゥペストルに対しては、真に政治的な精神をまったくもって欠いていたと批判している。

貴方にとって、この国の主たる問題とは知識人のそれであり、観念のそれであり、文化、とりわけアフリカ文化のそれであったのだ。なんという嘲りだろう！

レスペスが想起させているのは、革命闘争の出発点は自由な労働組合運動という「民主主義の基軸」にあるという、至極当然の事実である。

歴史というぼろ布を素材に、新たな何かを作り出さねばならない。もしそこにあるのが大統領たちの争いであるとしても、消えずに残った歴史あるバックギャモンのようなものであるとしても、民衆からの見解が欠けているが故にアグレッシブで不毛で血なまぐさくなってしまった終わりのない対話であるとしても、今回ばかりは世代間の問題、若者たちを決定的に方向づける問題を扱わねばならないのだ。

レスペスはドゥペストルの思考が権威主義的（スターリニズム的とも言えるだろうか？）な方へ逸れていっていることを批判している。

いずれにせよ、それはどうやら貴方が変質させている社会主義の道筋ではない。社会主義は左派のトントン・マクート^{18*}ではないのだから。社会主義とは世界の方程式でもあり、

ハイチの地の方程式であると同時に、長い時間をかけて、代償と苦悩を最小限に抑えながら、すべての人のために築き上げていくものなのだ。

レスペスは、その歴史のかくも厳しい幕開けからずっと傷を負ってきた国を癒すために、どれほどの手腕が必要とされるかについても強調している。

病人の枕元に寄り添う医師は、高度な能力と優れた機転と相当に秀でた科学の知見を備えていなければならない。そうでなければ、何もかもすっかり諦めて、盲目のこの国が、悲惨と死に際の苦痛と恥辱に震えながらその声を探すのをただ見ているしかないのだ。

太陽に向かって進むことすら困難な盲目のオリオンと化した国家の様子は、すでに崩壊しつつあるものを先取りしており、レスペスはそこに、幼少期に感じるパニックを思い起こさせ、尚且つおそらくは対抗手段のない絶対的な危険を感じ取っている。「そして苦しむ民衆は夜の闇のなかに取り残され、その耳に入ってくるのは『^{クロック・ミタン}鬼』の声と足音だけだったのだ」。

これは容赦のない指摘であり、この手紙の受取人であるドゥペストルに衝撃を与えたに違いない。1959年3月、ドゥペストルはハイチを離れキューバへ渡ることとなる。

14. 緊迫する情勢

アレクシとドゥペストルによる投稿が終了してまもなく、ポルトープランスでも地方部でも情勢が緊迫していく。その様子は、控えめながら『ル・ヌヴェリスト』の記事からもうかがえる。たとえば1958年6月30日、先に言及したセラファン議員が国家の安全を脅かしたとして軍事委員会によって裁かれたと報じられている。7月22日、ジョルジュ・プティ、アルベール・オセナド、ダニエル・アルティが同様の容疑で起訴されている。7月28日、29日にはクーデター未遂事件が発生した。これを受けて戒厳令が布告される。こうして国全体が鉛のマントに覆われるかのように抑圧的体制の下に置かれることとなる。8月29日の『ル・ヌヴェリスト』上には、先の大統領候補であり、キューバ大使館に避難していたクレマン・ジュメル兄弟二人、デュカスおよびシャルル・ジュメル処刑を知らせる簡潔かつ虚偽の多い公式声明が転載されている。1959年4月13日には署名のない記事が掲載され、怒りの滲む調子で、クレマン・ジュメル死と、彼の葬送の最中、遺体が国軍兵士数名に奪われたと報じられている。

おわりに

この論争においてまず配慮されるべきだったのは、ラディカルな暴力の論と死を呼び込む論法から脱却しようという苛烈で不器用な、そしてあまりに早く放棄されてしまった課題であった¹⁶⁾。二人の論客は、議論の範囲を確定させることも、政治の言葉をナショナリズムの路線か

ら引き離すこともできなかった。デュヴァリエにより権力者のディススクールとして導入された、レトリックの暴力の上に張られた罟がその試みを覆い尽くしてしまったのである。ドゥペストルはその後、約一年に及ぶ厳しい監視を受けた後、完全にハイチから離れることになる。後年、1980年代になると幼少期の自分だけの領域を神話にし、とりわけ〈女性であり庭であるもの〉のイメージを作り出している。一方、アレクシは『まばたきの間に』（1959）の続編にあたる『アブサンの星』（2017）の執筆を始めたようだが、この作品は断片のまま遺稿として残されている。しかし異なる形で1958年に勢力を落としたにも関わらず、両者の政治思想には著しい近似性を示す側面がある。それは中国との親和性とも呼びうるものである。

1959年1月初頭、両者を接近させる大きな出来事が発生した。キューバにおいてバティスタ政権が倒れたのである。「カストロの勝利はあらゆる希望に再び火を灯したのだ」（Séonnet 1983:141）。アレクシは1958年にソ連作家同盟第30回大会に招かれモスクワを訪問した。さらに、その機会に中国へも足を延ばしている。本命の目的は政治と演劇の分野での接触を図ることであった。ポルトープランスに帰国すると、アレクシは1959年10月17日に正式に発足する〈国民協調党〉の結成に着手する。同党の武闘派活動家はさまざまな農民グループに働きかけた。勿論この間アレクシは常に監視の対象となっている。1960年11月、今度は共産党・労働党会議に参加するため再びモスクワを訪れる。M.セオネによると彼の旅程には不確かな点がある。アレクシはモスクワから北京へ渡ったのか、それとも北京からモスクワに向かったのか？これは些末な問題ではない。というのもアレクシはハイチ上陸の準備として多額の資金援助を受けていたのだが、その出所は未だ明らかになっていないのである。さらにアレクシは旅の一部をベトナムの指導者ホー・チ・ミンと共にしている。モスクワでの会議では、中国とソ連それぞれの指導層に向けて、軋轢を乗り越え対立の激化を避けようと呼びかけた。ドゥペストルはこの場でアレクシとの最後の対面を果たすこととなる。再会した二人には語り合うべき多くのことがあっただろう。その後、アレクシはキューバへ渡り、そこから四名の同志と共に1961年4月中旬、モスクワ滞在中からすでに多数の警告を受けていたにもかかわらず、ハイチに向けて出航した。彼らが上陸することはすでにハイチ軍に知られていた。一方、ドゥペストルは1960年から中国に滞在し、上海を経て北京に至る。1961年2月から5月にかけてはハノイに移動してホー・チ・ミンと行動を共にするなかで、共産主義運動の統一を訴えたアレクシの演説がどれほど聴衆に強い印象を与えたか耳にする。このことから暫定的に導きうる結論は、アレクシとドゥペストルはハイチを離れない限り、あるいは一時的にでも国の外に出ない限り、ハイチ解放のための手段を共に模索することはできなかったのではないかというものである。それは両者の対立に潜む最大の逆説である。最後に指摘しておくべきなのは、中国という空間が、ドゥペストルの想像域に深い畝溝^{19*}を残すことになったという点である。

参考文献¹⁷⁾

[原文にある通りの順で記載する。]

Jacques Stéphen Alexis, *L'Espace d'un cillement*, Paris, Gallimard, 1959.

Jacques Stéphen Alexis, *L'Étoile Absinthe*, Paris, Zulma, 2017.

Stéphen Alexis, *Le Nègre masqué*, Port-au-Prince, Imprimerie de l'État, 1933.

Aimé Césaire, *Nègre je suis, nègre je resterai. Entretiens avec Françoise Vergès*, Paris, Albin Michel, 2005.

Yves Chemla, *La Question de l'Autre dans le roman haïtien contemporain*, Matoury, Ibis Rouge Éditions, 2003.

André Corten, *Diabolisation et mal politique. Haïti : misère, religion, et politique*, Montréal, CIDHICA, 2000.

J. Michaël Dash, *The Other America. Caribbean Literature in a New World Context*, Charlottesville et Londres, The University Press of Virginia, 1998.

René Dépestre, « Réponse à Aimé Césaire (Introduction à un art poétique haïtien) », *Présence Africaine*, nouvelle série, 4, 1955, p. 42-62.

René Dépestre, *Bonsoir Tendresse. Autobiographie*, Paris, Odile Jacob, 2018.

Max H. Dorsinville, *Mémoires de la décolonisation*, Montréal, Mémoire d'encrier, 2006.

Anne Douaire-Banny, « 'Sans rimes, toute une saison, moins des mares'. Enjeux d'un débat sur la poésie nationale », 2011. URL http://pierre.campion2.free.fr/douaire_depestre&cesaire.htm (2018-11-10).

Léon-François Hoffmann, « Chronologie de René Dépestre », 2007.

URL <https://ile-en-ile.org/chronologie-de-rene-depestre/> (2018-11-11).

Leslie Péan, *Histoire d'Haïti, économie politique de la corruption. L'Ensaucement macoute et ses conséquences. 1957-1990*, Paris, Maisonneuve & Larose, 2007.

Pierre Pressoir, *Témoignages 1946-1976. L'espérance déçue*, Port-au-Prince, Imprimerie Deschamps.

Francis-Joachim Roy, *Les Chiens*, Montreuil, Le Temps des Cerises, 2019.

Michel Séonnet, *Jacques Stephen Alexis ou Le Voyage vers la lune de la belle amour humaine*, Toulouse, Éd. Pierres hérétiques, 1983.

原著

Yves Chemla, « D'une obscure polémique », *Il Tolomeo*, vol. 21, 2019, p.69-101.

訳注内参考文献

[訳注内で引用した文献のみを記載する。]

Matthew J. Smith, *Red and Black in Haiti. Radicalism, Conflict, and Political Change 1934-1957*, University of North Carolina Press, 2009.

Michèle Aquien, *La versification* (9^e édition), Presses Universitaires de France, 2014. URL <https://doi.org/10.3917/puf.aquie.2014.01> (2025-7-8).

Frankétienne et Bernard Hadjadj, *Frankétienne. L'universel haïtien : Entretiens*. Paris, Riveneuve, 2012.

謝辞

本訳稿執筆にあたって、原著者であるイヴ・シェムラ氏に快く翻訳の許可を頂戴しました。ここに謝意を表します。また、訳文の確認の際には東京大学言語情報科学専攻教授、渡邊淳也先生にご助力、ご助言を賜りました。あわせて、感謝申し上げます。

Notes

原注

- 1) <https://ile-en-ile.org/chronologie-de-rene-Dépestre/> (2018年11月12日閲覧)。^[2025年11月時点で、アクセス可能なリンクは次のものに変更されている。https://ile-en-ile.org/chronologie-de-rene-depestre/]
- 2) レズリー・ペアン氏はこの大著に収められたレスベスの二通の書簡について、著者の質問に快く応じてくれた。ここに記して謝意を表する。^[本稿では二次資料に分類し、Leslie Péanの氏名をL.ペアンと訳出している。]
- 3) 詩人ドゥペストルの綴りには顕著な揺れが見られる。ほとんどの仏語文献では *Dépestre* と綴られるが^[文脈から考えて、Depestre と綴られる、の誤植である。仏語文献では〈ドゥペストル〉、ハイチの文献、ハイチ・クレオール語では〈デペストル〉と捉えるのがよいだろう]、ハイチで書かれた文献、特に1946年から1959年にかけての報道においては *Dépestre* と綴られている。たとえばウェブサイト *Haïti-référence* ^[2025年11月時点で、原文内で提示されているリンクは失効している]にあるハイチの著名人6400選のなかでは *René Depestre* と記されている。本稿ではこの綴りを採用する。
- 4) Dorsinville (2006 : 483) を参照せよ。あわせて、Francis-Joachim Roy の小説 *Les Chiens* (2019) にも注目されたい。そこにおいてアレクシは Georges-Jacques Darcourt という人物を通して描き出されている。この小説は1961年に Robert Laffont により初版が刊行されたのであるが、この時、アレクシの消息はまだ不明の状態であった。
- 5) ジェラルド・ブロンクール (1926-2018)。1946年、印刷工であった彼はドゥペストルとアレクシとともに革命の発端となる事件を起こし、その結果、時の大統領エリー・レスコーは辞任に追い込まれた。軍事法廷によって死刑宣告を受けたブロンクールであったが、国外追放を条件に極刑は免れた。フランスに亡命して後は写真家となり、数十万点にのぼる写真作品の他、詩や物語も遺した。
- 6) ビエール・ヴィアラ (1922-2013)。コメディアンであり、アリアンス・フランセーズ名義で行った巡業で人気を博した。彼のリサイタルにはアレクシの作品も取り入れられていた。^[原文ではヴィアラ基金の該当リンクが提示されているが、2025年11月時点で、このリンクは失効している。]
- 7) ジャン・マルスナック (1913-1984)。詩人、ジャーナリストであり、フランス共産党員でもあり、アラゴンと親しかった。パブロ・ネルーダの作品の翻訳している。^{[1958年]9月29日発行の『レ・レットル・フランセーズ』誌に掲載された記事において、SACハイチ支部第一回会合について報じ、あわせてこれに敬意を表している。}
- 8) Dash (1998 : 74-77) を参照せよ。ルネ・ピキオン自身も多くの知識人と同様に、ファシズムの誘惑に屈し、それがデュヴァリエ統治のモデルの一つとなる。
- 9) アレクシによる1958年3月13日の記事には曖昧なところがあり、ドゥペストルがその告発をでっち上げだとして退けたのか、その会談の結果がハイチの内政に対する彼の見解に何ら影響しなかったただけなのかを判断するのは難しい。しかしながらドゥペストルの妻エディット・ゴンボスがこの夕食会についてフロランス・アレクシに証言しており、後者もまた本稿筆者に対してこの私的な会談の存在を肯定した。いずれにせよドゥペストルは L-F・ホフマンに対して、1958年2月にデュヴァリエから外務省文化長官のポストを打診されたと語っている。
- 10) アンドレ・ヴルセムル (1899-1984)。作家、ジャーナリスト。長年に亘って日刊紙 *L'Humanité* の社説を担当した。
- 11) 《アンディジェニスト》のことを指している。
- 12) 以下の作品のことを指している。Stéphen Alexis, *Le Nègre masqué*, 1933.
- 13) ニコラ・ヴァブツァロフ (1909-1942)。ブルガリアの詩人。機械工として働き、作品はごくわずかしが残しておらず、生前に出版したのは *Les Chants des moteurs* 一冊のみであった。それにもかかわらず、ブルガリアにおける最も重要な詩人の一人として見做されている。共産主義活動家でもあった彼は、ドイツ軍およびブルガリア国内の対ド協力勢力と闘った。逮捕され拷問を受けた後裁判にかけられ、裁判と同日に銃殺刑に処された。1966年、ピエール・セゲルスが首都ソフィアにて彼の詩を数点翻訳、出版している。序文は特異な経歴をもつ作家であり、知識人であり、フランス共産党の指導者でもあったジャン・カナバによって書かれている。この書籍は以下のウェブサイト^[2019-05-26]で閲覧可能である。<https://www.notesdumontroyal.com/document/430a/pdf> (2019-05-26) ^[原文では Nicolas Vatzarov と綴られているが、文脈から考えて Nikola Vaptsarov (Никола Вапцаров) のことであり、日本語では〈ヴァブツァロフ〉と表記すべきであると判断した。また、記載されているリンクは2025年11月時点で失効している。]

- 14) アントニー・レスベス (1907-1978)。ハイチの詩人、小説家、ジャーナリスト、政治家。1946 年に発足した人民社会党の創設者であり、その作品としては *Les Semences de la colère* が有名である。
- 15) L・ペアン氏は、かつて人民社会党員であった人物から託されたこれらの書簡について、本稿のために情報を提供してくれた。
- 16) たとえば、Corten (2000)を参照せよ。「悪魔化とは、社会を構成している人物を文字通り、あるいは比喩的に、和解することが本質的に不可能であり、かつこれを行うことは許されない存在としての悪の化身へと変換することである。したがって悪魔化とは必然的に、特定の手続きに関するルールが守られる限り、討論は可能かつ必要であると見做す、民主主義の手続きに関する理念を必然的に妨げるものである」(44)。
- 17) 注記。この課題を可能な限り慎重に取り扱うために、多岐に亘る二次資料を参照した。こうした資料は、直接的にこの一件や、この時代を扱ってはいないものの、『ル・ヌヴェリスト』上ではほとんどがわからないことのできない当時の雰囲気や再構築するうえで必要不可欠であった。この課題に関する考察を深める上で重要な証言者がいたが、すでに故人である。その彼、ジェラルド・ブランクールと重ねた対話は、論点を明らかにするための手がかりとなった。ここに謝意を表する。なお本稿に示す参考文献は、本文中で参照されているものに限る。

訳注

- 1) Port-au-Prince。現代ハイチ・クレオール語 (kreyòl ayisyen) では *Pòtoprens* と表記される。本稿では仏語の発音で訳出した。
- 2) 原注3で示されるように、ルネ・ドゥベストルの綴りには媒体と言語によって揺れが見られる。本稿では邦訳されている作品での表記に従って「ドゥベストル」と表記することとする。しかしハイチで書かれた文献の表記法、あるいはハイチ・クレオール語の発音に基づくならば、「デベストル」の方がより適切と考えられる。
- 3) *Le Nouvelliste* は、1898 年に創刊された日刊紙 *Le Matin* を前身として発刊され、当時多くの新聞が短命に終わっていくなか、世紀を越えて存続していった新聞である。現在もハイチで最も一般的に読まれる、「読者の生活に密着した」新聞として親しまれている。詳細については *Le Nouvelliste* 公式ウェブサイト (<https://lenouvelliste.com/a-propos>) 上にある沿革を参照されたい。
- 4) La Bibliothèque numérique de la Caraïbe の訳語として、〈カリブ海デジタルライブラリー〉を採用した。原文ではこの箇所以降、dLOC と略称されているが、これは英語の Digital Library of the Caribbean に由来する略号である。
- 5) La Société Africaine de Culture の訳語として〈アフリカ文化協会〉を採用した。本稿ではこの箇所以降、SAC の略号で示している。
- 6) *Compère, Général Soleil* は、2025 年 7 月現在までに唯一邦訳されているアレクシの小説である。詳細は以下の作品を参照されたい。ジ・エス・アレクシ『太陽将軍』〈上〉〈下〉、里見三吉訳、新日本出版社、一九六五年。翻訳者である里見氏は、ジャック・ステファン・アレクシの略記 J. S. Alexis を日本語読みで訳出したようである。
- 7) ムーラン・ダンデ (Moulin d'Andé) はバリから 100km ほど離れた Val de Reuil に位置し、2025 年現在も作家のレジデンスとして開かれているようである。1956 年の〈第一回黒人世界作家芸術家会議〉開催時には、この会議の参加者がイベントを催す場としても使用された。後述されるように、ドゥベストルも一時ここに身を寄せていた。詳細については、ムーラン・ダンデの公式サイト (<https://moulinande.com/ceci-presentation/>) を参照されたい。
- 8) 原題は *Rossignol mangé corossol* である。これはハイチ・クレオール語であるが、mangé は仏語の manger にあたる動詞の原形である。動作動詞の場合、時制を表す機能辞が付かなければ、過去時制として解釈される。他方、corossol は現代のハイチ・クレオール語の正書法では *kowosol* と表記されるはずだが、当時は正書法が定まっていなかったことから、仏語に寄った表記となっていると考えられる。また、アレクシは自身の小説においてもクレオール語の語彙を用いるが、その際の綴りは仏語に近いものを採用する作家であるため、なおのことである。
- 9) 原題 *Bonsoir Tendresse* に訳者による訳題を付した。この著作に限らず、未邦訳のアレクシ作品も含め、本稿中で言及される、まだ日本語に翻訳されていない作品については訳者による訳題を付す。
- 10) 英語での発音に即した〈ヴードゥ〉のほうが日本語では馴染みがあるかもしれないが、仏語での綴りは *vaudou* であり、ハイチ・クレオール語でも *vodou* と記されることがほとんどであるため、本稿では〈ヴォドゥ〉と訳出している。

- 11) ノワリスト運動あるいはノワリズム (noirisme) とは、米国による占領 (1915-1934) への反抗を契機として生まれた潮流である。Smith (2009) においては「黒人ナショナリズム」と形容されている。ハイチ社会ではフランス的価値観への〈同化〉こそ、ハイチ本来の発展を妨げてきたものであるという見方が根強くあったために、ノワリズムの言説において、ハイチの対立項に置かれるのは米国よりもフランスである。Smith によると、ノワリズムは文明国なるものの条件としてヨーロッパ的な政治制度を挙げることを拒否し、ハイチ統治のモデルをアフリカにおける政治構造に見出そうとする。その一方で、「ノワリズムの根底には権威主義的かつ排他的な国家の構築を望む強い反リベラル的要素が存在していた」(26)。1940 年代に入るとノワリズムの言説は明確な形で影響力をもつようになる。ノワリズムの代表格とも言うべき集団が、1930 年代後半に創刊された季刊誌 *Les Griots* の編集メンバーであり、その内の一人がフランソワ・デュヴァリエであった。
- 12) 「ハイチにおいてムラート (*mulatto, mulatto*) は一般的に白人と黒人の混血を意味する語として用いられるが、他にも *griffe, grimelle, grimault, brun, marabou, clair* など、肌の色の明るい人々に対して用いられるさまざまなカテゴリーが存在するため、これらの語はしばしば誤用されてきた。[中略] 肌の色が明るい人物を「ムラート」と呼ぶことは、その身体的特徴に着目した言及ではあるものの、それが必ずしも社会的地位を意味するとは限らない。」(Smith 2009: 198)。これに対して、クレオール語 *milat* は、肌の色のみならず階級的属性をも含意する。この箇所において黒人 (*noir*) に対置されているムラート (*mulâtre*) は、*milat* に対応し、肌の色が明るく、かつ一定の社会階級に属する人物を意味している。
- 13) フランソワ・デュヴァリエ (François Duvalier, 1907-1971) は、特にイチゴ種 (*pian*) の治療と対処法普及活動を主導した医師としても知られていた。
- 14) ドミニカ共和国第 36 代、39 代大統領ラファエル・トルヒーヨ (Rafael Leónidas Trujillo Molina, 1891-1961) のことを指している。彼は 1937 年に国境の街で起こった虐殺 (所謂〈バセリの虐殺〉) に際する意思決定を行った大統領として知られ、この事件を極点として、ハイチとドミニカ共和国の二国間関係は最悪の状態が恒常化していた。
- 15) デュヴァリエ統治を象徴する旗である。Smith によると、黒と赤という色の選択は「ナショナル・カラーは黒と赤とする」(1) という 1805 年のハイチ憲法の記述に関連しており、この「真正なるハイチの色」(187) に飾られた旗と自分自身が「一つにして不可分」(同頁) であると示しつつ、デュヴァリエは自らを終身大統領と宣言した。
- 16) アンディジェニスム (Indigénisme) とは 1920 年代に始まった運動であり、その射程は思想、政治、文化、詩学、文学、民俗学、社会学など、極めて広範に及ぶ。ハイチ国内のみならず、ネグリチュードを始めとする仏語圏の思想、運動にも影響を与えた。運動の中核となったのは『おじさんはかく語りき』の筆者プリヌ＝マルスであるが、アンディジェニストと呼ばれる文筆家には、ジャック・ルーマンを始めとして、*Revue Indigène* に寄稿していた人物が多い。アンディジェニスムを単一の定義に収めるのは困難であるが、この潮流を端的に言い表そうとするならば、〈ハイチ文化に見出されるアフリカの起源への回帰〉とまとめることができよう。ハイチ・クレオール語に威信が与えられ、ヴォドゥとキリスト教の習合が認められるようになるなど、大きな影響があった。
- 17) シャルル・モーラス (Charles Maurras, 1868-1952) に由来する語彙である。20 世紀前半ハイチの知識人たちの思考とモーラス主義の呼応関係については以下を参照されたい。Chelsea Stieber, « Camelots du roi ou rouges: radicalization in early twentieth century Haitian periodicals », *Contemporary French civilization*, 45, p. 47-69.
- 18) ハイチ・クレオール語では *tonton makout* と綴る。デュヴァリエ政権下で大統領の直轄下に置かれた私兵組織、秘密警察である。統治に反抗する人物に対する密告の受付、逮捕および拘束、拷問、処刑を行っていた。
- 19) *sillon* の訳語として〈畝溝〉を採用した。〈詩行〉を意味する仏語彙 *vers* が、「回る」を意味するラテン語の *vertere* に由来しており、元は「畝の端で鋤を返す運動を指し、やがては畝そのものを指すようになり、そして文章の〈行〉を指すようになり、最終的に詩行を指すようになった」(Aquié 2014: 9) ことを考えると、この箇所における〈畝溝〉は、記憶のなかの刻印のようなものだけでなく、その後のドゥベストルの詩作への影響も暗示しているとも考えられる。